e-FICTIONS

SEIKAISHA

# ダンガンロンパ／ゼロ

DANGANRONPA/ZERO

下

KODAKA KAZUTAKA 小高和剛

ILLUSTRATION:小松崎類



本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。

ご利用になるブラウザまたはビューワにより、表示が異なることがあります。

星海社
FICTIONS

# ダンガンロンパ／ゼロ（下）

小高和剛
Illustration／小松崎類

星海社

# ダンガンロンパ

DANGANRONPA / ZERO

ゼロ 上

「夜助くん」
「なんだよ」
「ねぇ、夜助くん」
「だから、なんだよっ！」
「どうして怒ってんの？」
「当たり前だろ？　僕は一日中ずっと犯人捜ししてたんだぞ！　自分で壊したなら最初から言えよ！　どうしてあんな嘘ついたんだよっ！」
「嘘なんかついてないもん……言わなかっただけだもん……」
「一緒だよ！　何でそんなことするんだよ！」
「夜助くんが……ずっとお家から出て来ないからだよ……」
「……は？」
「夜助くんに見せようと思って作った砂の教会だもん。夜助くんが見てくれなかったら意味ないもん……」
「余計なお世話だよ……」
「……夜助くん、どうして隠れてたの？」
「うるさい」
「……他の人に泣いてるとこ見られたくなかったの？」
「殴るぞっ！」
「夜助くんは女の子殴らないもん」
「お前みたいに性格が悪くてブサイクな女は別なのっ！」
「な、泣かない……よっ……」
「泣きそうになってるじゃんか！」
「泣かないもんっ！　だって本当に泣きたいのは夜助くんの方だもんっ！」
「な、何言ってんだよっ！　僕は泣きたくなんか……」
「どうして強がるの？」
「強がってなんかないって！」
「……別に私の前では強がんなくてもいいのに……性格も悪くてブサイクな女の子なんかに気を使わなくてもいいのに……」
「………………」

「それに、私は泣いてる夜助くんを見たらもっと好きになれるのに……」

「お前、気持ち悪いよ……」

「気持ち悪くてもいいもん。だって決めたんだもん。これからは夜助くんが隠れたりしても、私はずっと傍（そば）にいるからね。もう逃げらんないんだよ」

「そういうのストーカーって言うんだぞ」

「ストーカーじゃないよ。恋人だよ」

「いつ恋人になったんだよ。勝手に決めんなよ」

「ね、恋人だから悲しい時も一緒だよ」

「別に……僕は悲しくなんかない……」

「また強がった」

「強がりなんかじゃない！　悲しくなんかないんだっ！」

「夜助くん……」

「あいつは最後まで僕のことを思い出してくれなかった！　僕のことを知らない子供だと思い込んでたんだぞ！　お母さんって言うと怖がるから、僕もずっと他人の振りをしてたんだ！　そんなヤツの為（ため）になんか泣いてやるもんか！　死んでくれてせいせいするよ！　これでやっとお芝居（しばい）なんてしなくて良くなったんだ！」

「でも、病気だったんだし……」

「仕方（しかた）ないって言うんだろ？　聞（き）き飽（あ）きたよっ！　いつも医者が言ってた！　でも医者のクセに仕方ないって何だよ！　医者ならお母さんの頭を治せよっ！」

「……きっと、ヤブ医者だったんだよ」

「ふん……僕が医者だったら、あんな病気くらい簡単に治せたのに……」

「……泣いてるの？」

「泣いてなんかないって言ってんだろ！」

「……大丈夫（だいじょうぶ）。私はずっと夜助くんのこと忘れないから」

「な、何だよ……いきなり変なこと言うなよ……」

「変じゃないよ。本当のことだもん。もし他のことを全部忘れちゃったとしても、私は夜助くんのことだけは絶対に忘れないんだもん」

「もし……忘れたらどうすんだよ……」

「夜助くんに治してもらうよ。夜助くんが医者だったら簡単に治せるんでしょ？」

「それは……そうだけど……」

「それでね、もし夜助くんが忘れちゃったら、私が思い出させてあげるんだ！　でも思い出さなくてもずっと一緒にいてあげるね！　そんで一生面倒見てあげる！」

「……やっぱ、ストーカーじゃんか」

「とにかくずっと一緒なの！　ね、ずっと一緒にいるんだから……別に恥(は)ずかしがったりしなくていいんだよ。泣きたかったら、いつでも泣いていいんだよ」

「お前って……変なヤツだよな……」

「えへへっ、諦(あきら)めた？」

「……馬鹿(ばか)にしたりしないか？」

「馬鹿になんかしないよ」

「……慰(なぐさ)めたりしないか？」

「慰めなんかしないよ」

「……他のヤツに言ったりしない？」

「友達いないもん」

「僕も友達いない……それに家族もいなくなっちゃったよ」

　そこで松田(まつだ)夜助は生まれて初めて——人前で涙を流した。

　希望(きぼう)ヶ峰(みね)学園東地区——

　その教職員棟。

　人気のない四階の廊下(ろうか)にはたった二つの足音だけが響いていた。

　一つは、希望ヶ峰学園の学校医のもの。

　そしてもう一つは——

《超高校級の神経学者》松田夜助のものだった。

　学校医に先導されるようにして歩く彼の顔には影が濃く浮かんでいて、そこには悲壮感さえ漂っていた。いつもの薄汚れたワイシャツをだらしなく着崩(きくず)した格好(かっこう)とは違い、裾(すそ)をしっかりとズボンに入れ、その上にジャケットを羽織(はお)っている。着慣れないせいか、妙に肩を強張(こわば)らせながら歩いていた。

「……いや、それにしても助かったよ」

先を歩く学校医の声に、俯（うつむ）いていた松田が顔を上げる。

「彼は私の専門からは大きく外れていてね……どう対処すべきか困っていたところだったんだ。だから君に協力してもらえるのは心強いよ」

彼は安堵（あんど）したような声だったが――それに返答する松田の声は冷淡なものだった。

「きっと、本来ならちゃんとした専門家に診（み）せているんでしょうね。ただ、それができなかったから僕に依頼した……それだけのことですよね？」

「そ、それは――」

学校医は言葉を詰まらせていた。松田の位置から彼の顔は確認できなかったが、その表情が曇（くも）っていることは容易に想像できた。

――さすがに今のはまずかったかな。

そこで松田は自らを落ち着かせるように深呼吸した。

「……大丈夫です。僕は自分が学生であることを言い訳にするつもりはありませんから。いや、むしろ外の専門家以上に役に立てるはずです」

「そ、そうか……それなら助かるよ」

学校医が再び安堵の顔に戻る。だが、その一方で松田の緊張と苛立（いらだ）ちは増していた。彼はそれを抑え込むように、ひたすら自分に言い聞かせる。

――どっちにしろ、もう後戻りはできないんだ。

――あいつを守る為には進み続けるしかない。

――いや、むしろ……落ち続ける……か。

そこで先導する学校医が廊下の角を曲がった。松田もそれに続いて曲がると――途端に空気が変わった。曲がった先の廊下はやけにひっそりと静まり返っていて、気温が下がったようにすら感じた。廊下の片側に並んだすべての窓が厚いカーテンで覆（おお）われている。その反対側にはいくつもの扉が並んでいたが、それらの扉の小窓にもびっしりとスモークが貼（は）られていた。

そんな廊下が一直線に長く続いている。

さすがの松田でさえ、教職員棟にこんな場所があったなんて初めて知った。

「……通常は、どの部屋も空き部屋になっているんだ」

唐突に学校医が説明を添えた。松田の疑問を察知したのかもしれない。

――つまり、緊急時にのみ使われる部屋ってことか。

ぼんやりとあたりを見回しながら進んでいくと、前を歩く学校医の足が急に止まった。

「……ここだよ」

　そう言いながら、彼はある扉を指差していた。あまりに何も特徴（とくちょう）がないので、彼がどうやってその扉を見つけたのかもわからないほどだった。
「言われた機器の搬入（はんにゅう）はすべて終わっているが……本当に一人で行くのか？　学園長からは二人で、というように頼まれていたんだが……」
「大丈夫です」
　松田はきっぱりと答えた。
「いや、しかし……」
　躊躇（とまど）った様子の学校医に、松田は駄目（だめ）を押すように言う。
「学園長や評議委員会の方々が僕に全権を任せてくれたということは、その判断自体も僕に任されているはずです。それに二人で行ったところでどうなるものでもありません。むしろ対象者に良くない影響を与える可能性もあります。ですから、ここからは僕に任せてください」
　それでも学校医は、「うーむ」と渋い表情を見せていたが――やがて諦めたように神妙そうに頷（うなず）いた。
「……わかった。ではお願いするよ」
　歩き去っていく学校医の背中が遠くの廊下を曲がっていく。
　それを見届けた後で、松田は目の前の扉に向き直る。
　そして、ゆっくりと扉を開けると――
　そこには薄暗い空間が広がっていた。まず目についたのは、部屋中に所狭しと置かれた様々な電子機器だった。どこぞの大学病院や研究所よりも、ずっと立派な設備だった。
　――さすがは希望ヶ峰学園だな。
　それらを目の当たりにした松田は、ついそんな感想を抱いていた。
　しかし、すぐに気を引き締め直すと、部屋の中へと足を踏み入れた。頭上の蛍光灯（けいこうとう）は教室のそれと比べると頼りなく、奥の壁にある窓も分厚いカーテンに覆われていて、部屋は全体的に光量が不足しているようだった。そのせいで、あたりの電子機器から発せられる人工的な明かりがより一層際立（きわだ）っていた。
　それらの明かりに囲まれるようにして――部屋の中央にベッドが置いてあった。
　松田の視線が、そのベッドの上へと吸い寄せられる。
　そこには――男が寝ていた。
　松田はベッドの脇までゆっくりと歩み寄ると、鋭い角度でその男を見下ろした。
　浅い彫（ほ）りの顔立ちの男だった。時代劇の青年剣士を思わせる清潔さと実直さのある顔だが、それより目を引いたのは――その頭に幾重（いくえ）にも巻かれた痛々しい包帯だった。

　松田はその男を知っていた。

　彼の名前は、村雨早春（むらさめそうしゅん）。

　希望ヶ峰学園生徒会の頂点に君臨する《超高校級の生徒会長》であり――

　希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件の《生き残り》の一人でもあった。

　観察するような松田の視線が、そんな彼へと向けられる。

　仰向（あおむ）けに寝ている彼の目はしっかりと開いていたが――しかしどこも見ていなかった。ただ意思のない目を一直線に天井に向けているだけで、瞬（まばた）きすら緩慢（かんまん）だった。

「……久しぶりだな」

　声を掛けてみたが――反応はない。

　松田は村雨の枕元に置かれたカルテを手に取った。そこに書かれていたのは、事前に聞かされていた話通りの内容で、それ以上でもそれ以下でもなかった。

　――村雨早春は《希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件》に巻き込まれた際、頭部に大怪我（おおけが）を負った。だが幸いにも命にかかわるような怪我ではなかった為、すぐに回復すると思われていたのだが――それから数日経っても、数週間が経っても、彼は一切の意思疎通（そつう）を行えないままだった。しかも、その原因は不明のまま――

　松田はカルテを村雨の枕元に戻しながら、もう一度声を掛けてみた。

「俺が誰だかわかるか？　お前と同期の松田夜助だ。超高校級の神経学者なんて言われている男だよ。何度か会ったことがあるはずだぞ」

　やはり反応はなかった。それでも松田は続ける。

「なぁ、どうして俺がここに来たと思う？」

　ベッドに腰を下ろしながら村雨の顔を覗（のぞ）き込んだ。その目は対象者の一切の反応を見逃すまいと鋭くなっている。

「ここの学園長やら評議委員会の連中に頼まれたんだ。お前の回復を手伝って欲しいってな。連中はお前から事件に関する話を聞きたいらしいぞ……と言っても、連中の目的は事件を明らかにすることじゃない。その逆だ。連中は事件を完全に隠蔽（いんぺい）する為に、お前の口から事件の全容を聞き出したいらしい」

　そこで松田は一息つくと――その後に続く言葉を強調するように言った。

「ま、それはただの建前（たてまえ）だろうけどな」

　相変わらず村雨の反応はなかったが――松田は構わずに続けた。

「俺の考えだと、連中はむしろお前に戻られると困るはずだ。だからこそ、それを見極める為に俺を手配

したんだろうな。そこまで手を尽くしても戻らないなら、それはそれで構わないはずだ。事件の全容を知る者がいなくなるのは、連中にとってはむしろ好都合ですらあるはずだからな。それなら、その逆はどうだ？　お前が戻るようであれば、それは連中にとっては厄介なんじゃないのか？　その時、連中はどうするだろうな……場合によっては、お前から話を聞き出した上で極端な手段に打って出るかもしれない……」

　松田は話しながら村雨の右手を取ると――その手を持ち上げて、すぐに離した。

　だが、彼の手は力なくベッドの上に落ちるだけだった。

「それにしてもよくわからないな……この学園の生徒会長を見捨ててまで隠蔽しようとするなんて……その理由はやっぱり事件の犯人にあるのか？」

　そこで松田は身を乗り出した。ほとんど顔と顔とがぶつかりそうな距離から、さらに村雨の瞳の奥を覗き込む。

「なぁ、どう思う？　お前は犯人を知っているんだろ？　だったら教えてくれ。どうして学園側はそこまでそいつに固執しているんだ？」

　それでも、やはり反応はない。

　その表情や目からも――一切の返答はなかった。

「やっぱり駄目か……」

　松田は苛立ったように首を横に振りたくった。

「ま、だけど検査だけはしておかないとな……」

　と、頭を掻きながら不機嫌そうに呟いたところで、

「あ、そうだ」

　ふと何かを思い出したような――さりげなさを装った口調で問い掛ける。

「……ところで、江ノ島 盾子って名前に心当たりはないか？」

　ピクリと、村雨の眼球が動いた。

　やがて睨むような目付きに変わったそれは――真っ直ぐ松田へと向けられた。

　それを見た松田の反応は――意外にも落ち着いていた。

　――やっぱりな。

　そこにあったのは落胆にも似た感情だった。

　――むしろ、本当に意識がなかったら良かったんだけどな。

　だが、その期待は呆気なく外れた。

　とは言え、それは予想していたことでもあった。松田はもうとっくに覚悟していた。落ちていくしかない自

分を覚悟していた。それはまるで最初から決められた運命のようなものだ。いくら呪(のろ)ったところで変えられない運命だ。
　だから、もう止められないのもわかっていた。
　松田は自分の足元を今まで強固に支えていた物が崩れ、そのまま深い奈落の底に落ちていくような感覚を味わっていた。
　それは比喩(ひゆ)でもなく、
　錯覚なんかでもない。
　落ちながらも、松田はそのことだけはしっかりと理解していた。

　寄宿舎の外は眩(まぶ)しいくらいに太陽が照り付けていて、私は思わず目を細めます。
　けれど、暑さを感じるほどではなく、むしろひんやりするくらいの風が私の肌を撫(な)でていきました。すっかりのんびりした気分になってきた私は、傍にあるベンチに腰を下ろすと、ぐぐっと体を大きく伸ばしました。
　──あぁ、今日も平和だぁ！
　そんな風に叫(さけ)び出したい欲求に駆られたところで──ふと首を傾(かし)げました。
　──あれ、私ってどこかに行こうとしてなかったっけ？
　私はすぐにリュックから『音無涼子(おとなしりょうこ)の記憶ノート』を取り出すと、記憶の確認作業を始める為にノートを開きます。けれど開いたところで──その手が止まりました。
　たまたま開いたページいっぱいに描かれた男性の絵を見て──私の胸がプチドキン。
「え、松田くん……？」
　そうです、そうに違いありません。
　けれどプチドキンとしかしないということは──おそらく、この似顔絵はあまり似てないのでしょう。
「うーん、少し手を加えたらもっと似るのかな……？」
　本物の松田くんの顔を覚えている訳ではない私は、胸のドキドキをセンサー代わりにして、目かな、鼻かな、お口かな──と、探るようにしながら似顔絵に手を加えていきます。しばらくすると、胸のプチドキンが、ほとんどドキンに近いくらいまで高鳴るようになっていました。
「うんっ！　結構似てきたのかもっ！」

じっと似顔絵に見入りながら、松田くん。松田くん。松田くん。と心の中で繰り返していると――ほら、お胸がドキンドキン。

本格的にドキドキしてきた私はそっと似顔絵に顔を寄せました。

何だか自分が描いた似顔絵にその気になってきちゃいました。変態チックかもしれないけど無性にぶちゅっとしたくなったところで――ふと首を傾げます。

――あれ、私ってどこかに行こうとしてたよね？

何となくそんな気がした私は松田くんの似顔絵とはいったんお別れして、ペラペラとノートをめくっていきました。そのまましばらくめくっていったところで――

ようやく思い出しました。と同時に青くなりました。そして訳がわからなくなるほど全身が震え出しました。

そこで私が思い出していたのは――例の殺人予告のことでした。

そうです。あの時、江ノ島盾子が語った彼女の目的についてです。

――愛するダーリンである松田夜助を殺すこと。

「わ、忘れてる場合じゃ……ないって……」

震えている場合でもありません。急いで松田くんに危機を知らせないと！

目指すは東地区の生物学棟――松田くんのいる神経科学研究所です！

「急がないとっ！」

私はベンチから跳ね上がると、すぐに全力疾走を開始しました。

ちょうど昼休みか休憩時間のようで、あたりは生徒たちでごった返していました。私はそんな彼らを乱暴に押(お)し退(の)けながら、ひたすら舗道を突っ走ります。当然、私が通った道からは、「わぁ」だの「きゃあ」だのといった悲鳴や怒声が上がっていましたが――そんなことなど関係なし！

とにかく全力で疾走していく私は、思考そのものを置き去りにしていくほどのスピードで走ります。余計な雑念なんかは吹っ飛ばし、私は松田くんの元へと一直線に突き進む愛の弾丸(だんがん)と化していました。

そして中央広場を突っ切って、東地区にやって来た私は、そのまま他の学生たちをなぎ倒しながら生物学棟へと飛び込みました。

痛いくらいに渇(かわ)いた咽喉(のど)を唾(つば)で誤魔化(ごまか)しながら、一気に階段を駆け上がっていきます。呼吸がバカみたいに乱れていましたが、私は苦しいとかそういう概念自体を忘れたまま、ひたすら全力疾走を続け――そして研究所に到着するや否(いな)や、ノックもなしに扉を開け放ち、それと同時に残った気力のすべてで叫びました。

「松田くーーーーんっ！」

ビクン――と、部屋の中央で背の低い男子高校生が体を震わせていました。

彼は驚いたように見開いた目を私に向けて、すっかり固まっています。

――何かピンときませんでした。

――と言うか、キュンともドキンともきませんでした。

「も、もしかして……松田くんじゃない？」

「う、うん……」

「ま、紛(まぎ)らわしいよ……っ！　どっちの『うん』なのっ？」

最大限に乱れた呼吸のせいで、私はほとんど叫び声になっていました。

「え、えっと……違うって意味の『うん』だけど……」

「じゃあ、松田くんはっ!?」

と、慌(あわ)てて見回した研究所の中には――もう他には誰もいませんでした。

「なんか留守みたいなんだよね……」

「そんなの、見ればわかるって！」

私は怒声で答えると、すぐに頭を抱えてしまいました。

「あぁっ、もうっ！」

急激な疲労感に襲(おそ)われ、思わず膝(ひざ)から崩れ落ちます。

「な、何でこんな時に限っていないのぉおおっ！　どこ行っちゃったのぉおおっ！」

と、崩れ落ちたまま喚(わめ)き散(ち)らしていると、さっきの彼が慌てて駆け寄って来ました。

「そ、そんなに心配しなくても大丈夫だよ。きっとすぐに戻って来るって！」

「………………」

私を見下ろしているその人物は、どうしてそこまで心配そうなのか逆に心配になってしまうほどの心配げな視線で私を見ていました。けど、何だかそれが――

「……逆に怪しいんですけど」

「……は？」

「もしや、そういう性癖(せいへき)の人とかっ？　呼吸を荒くして取り乱している女子高生を見ると目を爛々(らんらん)と輝かせちゃうタイプとかっ……きゃあ、こっち来ないでぇ！」

と、私が尻(しり)もちのまま後ずさると――彼は慌てて視線を逸(そ)らしていました。はっと気付くと、スカートがめくれて、太ももとそれ以上の部分までもが露(あらわ)になっています。

「ひゃん！」

私がスカートで隠すと、彼は視線を逸らしたまま真(ま)っ赤(か)な顔で言いました。

「ち、違うんだって！　ボクは本当に、キミが心配だったから声を掛けただけで……」
「う、嘘だよっ！　だって初めて会った赤の他人を、そこまで心配するなんて不自然だもん。きっと下心とか魂胆（こんたん）とか黒い計画とかがあるに決まってるって……」
「……え？」
　すると、途端に空気がシリアスなものに変わりました。
「……赤の他人？」
　彼の驚いたような視線が一直線に私に向けられています。
　あ、この反応って、もしかして――
「……あれ？　ひょっとして私の知り合いとか？」
　そんな私の言葉に、彼はさらに驚いたような表情になり――だけど、それも一瞬でした。彼はすぐに改まったような顔付きになると――
「ボクの名前は……苗木（なえぎ）誠（まこと）だよ」
　と、いきなりの自己紹介。
「……あぁ、どうも」
　私は相槌（あいづち）を打ちながら、『音無涼子の記憶ノート』に視線を落としました。当たり前ですけど、『苗木誠』なんて私には聞き覚えのない名前だったので、ノートからその名前を探そうとしたのですが――そんな名前なんてどこにも見当たりません。
　――知り合いじゃないじゃん。
　と、私が訝（いぶか）しげな視線を送ると、彼は困惑したような顔のまま私を見つめ返してきました。そんな仕草（しぐさ）がますます怪しいです――何と言っても変態さんですしね。
　そこで私は、さらなる追及を試みようと、ノート片手に勢い良く立ち上がりました。
「ねぇ、あなたってこの学園の生徒なんだよね？」
「え？　う、うん……そうだけど……」
「だったら、あなたも他の人とは違う才能を持ってるんだよね？」
「……え？」
「あれぇ？　持ってないんですかぁ？」
　やっぱり怪しい、と私が目を細めると――
「いや、あるにはあるんだけど……ただボクの場合は特別って言うか……」
　言（い）い淀（よど）みながら目を逸らす彼の仕草がいよいよ怪しい――と、私がさらに目を細めたところで、
「わ、わかったよ……」

彼は渋々(しぶしぶ)頷きました。ようやく観念して話す気になったようです。
「えっと、ボクは幸運らしいんだよね……」
「……はい？」
「だから……《超高校級の幸運》ってことらしいんだよね……」
「超高校級の……幸運？」
何て言うか――まず根本的な問題が気になりました。
「……そもそも、幸運って才能なの？」
「ボクにもよくわかんないんだけど……学校側が言うにはそうらしいよ。要は、全国にいる普通の高校生たちの中から毎年抽選(ちゅうせん)で一人だけを選んで、それを《超高校級の幸運》として入学させてるんだって。で、それにたまたま当たったのが……ボクってことらしいんだよね」
うーん、何だか――
「ビミョーだね……」
「やっぱビミョーだよね？」
と、私だけではなく当の苗木くんまで困ったように苦笑い。
ともあれ、これで彼の素性は明らかになった訳ですが――だけど私はまだ信用した訳ではありませんよ。そんなに簡単に警戒心を解くほど、尻の軽い女じゃありませんから。
「で、そんな《超高校級の幸運》さんはどうしてこの研究所にいるの？　あ、言っておくけど、松田くんの知り合いだとか、そういう下手(へた)な嘘は通用しないからねっ！」
「えっと、それは……」
そこで苗木くんは制服のポケットから何かを取り出しました。それはスマートフォンのような薄型の端末でした。
「これ、松田夜助さんが落とした物みたいなんだよね。なくしたら困るだろうから届けてあげようと思ったんだけど……」
「……何それ、初めて見た」
「きっと初めてじゃないと思うけど……ほら、電子生徒手帳だよ」
苗木くんが言うには――この《電子生徒手帳》という物体は、本科の生徒にのみ配られる希望ヶ峰学園特有の情報端末とのことでした。様々な機能を備えている高性能の端末で、IDとしての役割もある為、これを呈示しなければ利用できない施設などもあるらしいのです。
「中庭の植え込みの中に落ちていたのを見つけたんだ。これがないと不便だし、なるべく早く届けてあげた方が良いかなと思って持って来たんだけど……留守だったね」

あれっ？　じゃあ、もしかして苗木くんって——

「だ、駄目だよっ！　駄目だからねっ！」

「な、何っ？」

「そんな良い人ぶって私を騙(だま)そうとしたって駄目だよっ！」

「だ、騙してなんかないって！」彼は慌てて首を振っていました。「それに良い人ぶるも何も……ボクはただ松田さんの落とし物を届けに来ただけなんだって！　本当にそれだけなんだって！」

「……ホントに？」

「ほ、本当だよ！」

まぁ、でも——彼が松田くんの落とし物を持っている以上は、信じるしかないですよね。

「じゃあ……わかったよ」

「……やっと信じてくれた？」

と、苗木くんはホッとしたように胸をなで下ろしていましたが——私はそんな彼に向かって、ビシィッと効果音が出そうな勢いで人差し指を突き付けます。

「て言うか、紛らわしいんだよねっ！　不審者じゃないなら最初からそう言ってよ！」

「え？　あ、えっと……ごめん」

彼は自分がどうして謝(あやま)っているのかわからないといった顔で謝っていました。

「でもさ、それにしてもツイてないよね。せっかく落とし物を持って来たのに留守なんて……あ、ツイてないなんて超高校級の幸運さんに向かって言う言葉じゃないか」

「いや、ツイてないのには慣れっこだったりするんだよね……」

そう言いながら、苗木くんはまた頼りない苦笑いを浮かべています。

でも、《超高校級の幸運》を名乗っておきながら、『ツイてないのに慣れっこ』とか、その才能を全否定するようなことを言うなんて——なんか変わった人ですね。

変わっている——うん、彼を言い表すのに一番しっくりくる言葉かもしれません。

そうです、彼は変わっているのです。

彼は普通すぎるほど普通で、だからこそ変わっているのです。

私のノートによると、この学園の生徒たちは誰もがギラギラと前向きで、向上心と競争心に溢(あふ)れていて、希望に胸を膨(ふく)らませていて——だから周囲と関わりたくない私にとっては、それが気持ち悪くて仕方ない——らしいのです。

だけど彼にはそれがない。だからこそ変わっていると感じるのかもしれません。

などと私が思案にふけっていると——不意に、苗木くんが油断したようにポツリと漏(も)らしました。

「でも本当だったんだ……」

「……え？」

　それを耳にした私は思わず聞き返します。

「本当だったって何が？」

「えっ？　い、いや……別に大したことじゃないよ！」

　慌てているあたり、さっきのはやっぱり独り言（ひとごと）だったみたいですが――

「大したことじゃないなら教えてよ。本当だったって何の話？」

　私は柄（がら）にもなく強めの口調で問い詰めていました。なぜだか、彼を相手にしていると自然とそんな態度になってしまうから不思議です。

「ほら、早く教えてってば！　大したことじゃないなら教えられるはずだよ。そうでしょ？　わかったら返事っ！」

「は、はい……」

「『はい』は一回でしょ……なんて言わせないでよ。先生じゃないんだからさぁ！」

「……いや、今のは一回だったけど？」

　あれ、そうでしたっけ？　忘れちゃいました。

「もうっ！　いいから早く教えてよ！　早くしないと、何を聞こうとしてたか忘れちゃうでしょ！」

「いや、だからさ……噂（うわさ）でしか聞いたことなかったから信じられなかったんだけど……本当なんだなって思っただけで……」

「……噂？」

　またもや伸ばした私の人差し指は、苗木くんの額（ひたい）の数センチ前でピタリと静止。

「噂って、私の噂？　もしかして、いやらしい噂じゃないでしょうねっ！」

「ち、違う違う！　そういうんじゃないって！」

「だったら、どんな噂なの？」

「え、えっと、それは……」

　そこで苗木くんは私から視線を逸らすと――ためらいがちに言いました。

「……忘れっぽくなった生徒がいるって噂だよ」

「忘れっぽく……なった……？」

　その言葉が何だか引っ掛かりました。

　と言うか、その言い回しが引っ掛かりました。

　だって、『忘れっぽくなった』なんて、まるで私の忘れっぽくなる前のことを知っているみたいな言い回し

で――
「あっ！」
　私は思わず声を上げていました。全身が雷に打たれたみたいに大きく震えます。
「ど、どうしたの……？」
　心配げな視線を向けてくる苗木くんをよそに、私は大慌てで『音無涼子の記憶ノート』を開くと、そこからノートをめくって、めくって、めくって――
　と、そこで目も眩（くら）むような光を感じました。それは爆発でした。私の閃（ひらめ）きとノートの記憶がぶつかり合って、激しい化学反応を起こしたのです！
　それをもたらしたのは――ノートに挟（はさ）まっていた一通の手紙でした。

『拝啓、超高校級に忘れっぽい残念子さんへ。
　アンタが大切に書き留めていた《過去の記憶》はすべて頂きました。
　松田夜助との思い出がいっぱい書き留められている《記憶》でした。
　あれがアンタの過去の重さなんですね？
　そうなんですね？　そうなんですよね――』

「ねぇ、さっき『忘れっぽくなった』って言ってたよね？」興奮を抑え切れない私は早口気味にまくし立てました。「それって忘れっぽくなる前の私を知っているってことだよね？　苗木くんもそうなの？　忘れっぽくなる前の私を知っているの？　ねぇ、どうなの？」
「お、落ち着いてよ！」彼はそんな私を必死に宥（なだ）めようとしています。「よくわかんないけどさ……とにかく今は病気みたいだし、そういうことはあんまり気にしすぎない方がいいと思うんだよね……って、ボクが言っちゃったのがまずかったんだろうけど……」
「いいから、早く教えてってば！　忘れっぽくなる前の私を知ってるんでしょ？　そうなんでしょ？」
「えっと……だから、それは……」
「どうなのっ！」
　すると彼はようやく――小さく頷きました。
「……う、うん」
「やっぱり……そうだったんだ……」
　これでハッキリしました。
　この学校にいる人が、忘れっぽくなる前の私を知っているということは――つまり私が忘れっぽくなったの

は、この学園に来た後ということになるはずです。
　だったら、江ノ島盾子が脅迫文に書いていた《過去の記憶》って？
　私は本当に、そんなに大量の『記憶ノート』を持ってたの？
　いえ、もしかしたら――あれは私を巻き込む為の罠だったのかもしれません。
　つまりは、嘘。
　だったら彼女の他の言葉は？
　中央広場で人を殺したと言っていたのも、松田くんを殺すと言っていたのも、そもそも江ノ島盾子って存在自体だって――
　と、そんな思考を重ねながらノートに意識を集中させていると、そこから《嘘》と《江ノ島盾子》という二つのキーワードがゆっくりと浮かび上がってきました。
　浮かび上がったそれらの文字は紙の上をぐるぐると回り始めます。それは次第に速度を増し、ぐるぐるぐるぐる、と互いに混ざり合いながら回っていきます。すると――何だか頭の奥がむず痒くなってきました。その痒みが私に不思議な予感をもたらします。
　この感覚って――
　あれ？　何かを思い出せそうな気が――
「ねぇ……」
　というところで邪魔が入りました。苗木くんの声です。けれど彼に構っている場合ではありません。ノートに集中しないと。だって、もう少しで何かを思い出せそうな――
「ねぇ……」
　――だから、うるさいって！
「ね、ねぇ……」
　――あぁっ、もうっ！　集中させてよ！
「ねぇって……」
「だからうるさいってば！」
　と、ノートから顔を上げながら叫んだ私は――そこで固まりました。
　真っ青な顔をした苗木くんの背後に、見知らぬ男が立っているのを目にしたせいです。
　――え、誰？
　苗木くんの両肩を鷲掴みにしている彼は、真っ黒な学生服を身に纏った真っ黒な長髪の男でした。ただ黒いシルエットの中には、それとは対照的な真っ白い顔が浮かんでいて、そこには爬虫類を連想させる鋭い目が刻まれています。

それと目が合った途端――私の中で緊急を知らせるサイレンが鳴り響き、心臓が不整脈のように波打ちながら鼓動を速めていきました。

「ね、ねぇ……」

青い顔をした苗木くんが全身を強張らせながら口を開きます。

「ボ、ボクの後ろの人ってキミの知り合いとか？　知り合いなら……離すように言ってもらえると助かるんだけど……」

「ざ、残念だけど知り合いじゃないみたい……」

と、私が答えたところで、

「おい、待てよ」男の低く唸（うな）るような声が響きました。「まさか忘れたのか？　そりゃちょっと……あんまりだろ？」

「……や、やっぱり知り合いなの？」

困惑した声を上げる苗木くんを、男の目がジロリと見下ろします。

「知り合いというか因縁（いんねん）というか……ま、どっちにしろお前には関係ない。お前はただ巻き込まれただけだよ。まったくツイてなかったな」

私は大慌てでノートに視線を落とすと、すぐにその男に関する記憶を探しました。

すると――思い当たる人物が一人だけいたことを思い出します。

「もしかして……斑井（まだらい）さん？」

「……そうだよ。深夜の中央広場でお前にズタボロに返り討ちにされた斑井だ」

「ズタボロに……返り討ち？」

って言う割には、無傷みたいですけど――

「俺は不死身（ふじみ）なんだよ」

「……え？」

彼は私の疑念を察知したように、ニヤリと不気味（ぶきみ）に笑いながら言いました。

――不死身って？

――富士見的なファンタジーですか？

「あの……本気じゃないですよね？」

「決まってんだろ」

「えっと……どっちの意味で？」

「本気で不死身なんだよ。そうでなきゃ、俺が無傷でここにいることの説明が付かねーだろ……」

「た、確かにそうかもしれないですけど、だからって急に一人だけジャンルを飛び越えて参戦してこられて

も困るって言うか……」

「あの、ちょっといいですか？」

　そこに苗木くんの声が割り込んできます。

「ボ、ボクの後ろの人……斑井さんって言うんですか？　あの……もしかして斑井さんって、生徒会の斑井さんですか？」

「えっ、生徒会？」

　私は思わず驚きの声を上げてしまいました。この全身真っ黒の不気味な男が生徒会だなんて――イメージとかけ離れすぎですって！

「ふーん、そうか。少年は知ってるのか……」

　そこで斑井は顔を歪(ゆが)めながら目を閉じ、そして忌々(いまいま)しげに呟きました。

「……そうだよ。俺は生徒会の生き残りだよ」

「い、生き残り？」

「……今更(いまさら)とぼけんのか？」

　再び目を開いた斑井の、鋭く射抜くような視線が私を貫きます。

「《例の事件》のせいに決まってんだろ。あの事件が生徒会を滅茶苦茶(めちゃくちゃ)にしやがったんだ。運良く生き残った俺以外はみんな――」

　いや違うな――と、斑井は自らの言葉を否定するように首を振りました。

「……運良く生き残ったってのは違うな。むしろ生き余ったって言った方がしっくりくる。そうだ、俺は運悪く生き余っただけだ。戦う機会さえ与えられずにな……俺はそれが一番許せないんだよ。俺から生徒会を守る機会を奪いやがったことが何より許せないんだよ。誰だ？　これは誰の仕業(しわざ)なんだ？」

　そう吐き出す斑井の両手に力が込められていきます。苗木くんは肩の痛みに思わず顔を歪めながらも、それでもまだ反論を試みようとしていました。

「あ、あの、詳しいことはわかりませんけど……生徒会を滅茶苦茶にされて怒る気持ちはわかります……だったら尚更(なおさら)誰かを憎んだりするより、生徒会を立て直すことを考えた方がいいと思うんですけど……」

「立て直す？　俺が？」

　斑井はフンと鼻を鳴らしました。

「わかってねぇな。そもそも、どうして俺みたいのが生徒会にいたと思ってる？」

「……え？」

「俺は最初から体を張ることだけを期待されて生徒会に選ばれたんだ。だからこその《超高校級のボ

ディーガード》なんだよ。俺が生徒会の為にできるのは、今も昔もこれからも《守る》ことだけだ。それだけなんだよ……」

　ギリッ、と歯を食いしばる音が聞こえました。斑井はそのまま食いしばった歯の隙間（すきま）から、憎悪に満ちた声を漏らしています。

「それなのに……いざって時に、俺は体を張る権利さえ与えられなかった。俺は事件の標的にすら入れてもらえなかったんだ。犯人にとっちゃ俺は生徒会でもないってことか？　なぁ、これがどれだけ屈辱的なことか想像できるかよ？　自分の才能を活かす機会さえ与えられないまま、その才能を踏みにじられるのがどんな気分か……おい、お前らの想像力を使って考えてみろよ……」

　苗木くんの両肩を摑んだ手にさらに力が込められます。彼を襲う痛みと恐怖が増していき、苗木くんの口から悲鳴のような声が漏れ出します。

「……今の俺が守れるのは生徒会の尊厳だけだ。生徒会はやられっ放しじゃ終わらない……俺がそれを見せつけてやる。だからこその復讐だ。今の俺が体を張れる場所はもうそこしかないんだ。その為だったら……俺は何だってするぞ」

　真っ赤に染まった彼の目は、もはやどこにも照準が合っておらず——どうやら彼は完全にプッツンしちゃっているみたいでした。

「わ、私は……何も知らないよ……」

　私は自然と言い訳を始めていました。とにかく目の前の圧倒的な恐怖から逃れようと必死だったのです。

「わ、私は生徒会とか、何とか事件とか……そういう物騒（ぶっそう）なものとは無関係で……とっ、とにかく私とは関係ないんだって！」

「関係ない訳ないだろ……」

　そう否定する斑井の言葉には、声だけで相手をねじ伏せるような凄（すご）みがありました。

「いいから、さっさと話せよ。事件について知っていることをすべて話せって」

「ほ、本当に何も知らないんだって！　疑うんだったら……ほら、このノートを見てよ！」

　私は『音無涼子の記憶ノート』を斑井に向かって大きく広げます。

「ね、ここに何にも書いてないでしょ？　これが証拠だよ！　私は事件については何も知らないし、関係者なんかじゃないんだって！」

「ふざけてんのか？」

　怒気を孕（はら）んだ声がノートごと私を射抜きました。

「そんなノートなんかが証拠になる訳ねーだろ……おい、どうして隠してる？　犯人を庇（かば）っているの

か？　口止めされているのか？　いや、それともお前自身が——」
「だ、だから関係ないって言ってんじゃん！」
　と、私は思わず絶叫。
　けれど叫んだ瞬間に後悔していました。これでは火に油です。むしろ怒らせてしまったに違いありません——と思ったのですが、私の予想に反して斑井はむしろ平淡な顔付きになっていました。
「………………」
　彼はすべての感情を捨て去ったような無表情のまま、瞬きすらしていません。まるで、彼の周辺だけ時が止まってしまったようでした。
　そんな斑井の異変を感じ取った苗木くんが、恐る恐る振り返ったところで——
「……そう言えば、少年の名前を聞いてなかったよな？」
　斑井が無表情のまま口だけを動かして尋ねます。
「な、苗木誠……です」
　それを聞いた斑井は、何だか笑うような、その割に不機嫌そうな態度で、苗木くんの耳元に顔を寄せると——
「なぁ、苗木くん。さっきの俺の話は聞いていたよな？」
「……は？」
　そこで突然、斑井の両手が苗木くんの肩から離されました。けれど次の瞬間には——その手は苗木くんの頭を挟み込むように掴んでいました。



「あ……っ！」

　苗木くんの顔が瞬間的に恐怖に歪みます。

「俺は言ったよな？　『復讐の為なら何だってする』って」

　斑井は悪魔のように口を裂いて――毒気に満ちた笑みで笑っていました。

　ヤバいです。あの人もう完璧にヤバいですって！

　臆病なウサギみたいに打ち震えるだけの私に残された手段は――もう逃げることしかありません。ほら、早く逃げないとっ！

「逃げようとしている訳じゃねーよな？」

「……えっ？」

　牽制(けんせい)するような言葉に思わず足が止まります。

「そんなことしたら……こいつがどうなるかわかってんのか？」

「……えっ？　えっ？」

　それを聞いた苗木くんの顔は――青を通り越して白くなっていました。

「これは最後の警告ってヤツだ……大人しく話せ。そうでなけりゃ、こいつの頭が惨(むご)たらしく潰(つぶ)れるところを見ることになるぞ」

「な、何それ……」

　困惑する私に、二つの視線が一斉に私に向けられます。

　さっさと話せ――斑井の威圧するような視線がそんな風に急(せ)かしていました。

　助けて――苗木くんの懇願(こんがん)するような視線がそう訴(うった)えかけていました。

　威圧する視線と、懇願する視線。

　そんな二人の視線を一身に浴びた私は――

　――困るって。

　私なんかに何かを求められても困ります。

　私には何もできないし、何もしたくありません。

　だって、こんなの私には――

「関係ない……」

　そうです、関係ないのです。

　そもそも私は巻き込まれただけで、この状況の一切とは関係ありません。

　こんなの私の知ったことではないし、だから私には――

「関係ない関係ない関係ない関係ない関係ない関係ない……」

　私はひたすら呟きました。自分と、そして周囲の人間に言い聞かせるように、その魔法の呪文を全力で呟き続けました。
「は？」
「は？」
　それを耳にした斑井と苗木くんが、同時にキョトンとした顔付きに変わります。
「関係ないってどういう意味だ……」
　最初に困惑した声を上げたのは斑井でした。
「関係ない訳ないだろ……こいつはお前のせいで巻き込まれたんだぞ」
「違うよ」その言葉を私はきっぱりと否定します。「そもそも、あなたが絡んできたのは私とは関係ないことが原因だし、苗木くんがそこに巻き込まれたのも、私とは関係のない彼の運の問題が原因だし……だから、やっぱり私とは何も関係ないんだよ」
「ちょ、ちょっと待っ――」
　と、声を上げようとする苗木くんを遮るように、
「残念だけど、苗木くんはツイてなかったんだよ」
　私はすっかり落ち着いた口調で言い放ちました。
「そんな異常者に生殺与奪権を握られた苗木くんがツイてなかったんだよ。だから、諦めるしかないと思う」
　それに、どうせ何が起きても私は忘れてしまうんです。松田くんのこと以外はすぐに忘れてしまうんです。だから何があろうと関係ありません――と、呟き続けている内に本当にすべてが関係ないことになっていきました。
　私はさっそく忘れてしまったのです。
　束の間の苗木くんとのやり取りや、彼に抱いた情みたいなものを、すべてまとめて忘れてしまったのです。もう私が彼に対して後ろめたさや罪悪感を抱く理由はありません。
　だからやっぱり――私とは関係なかったってことです。
「……やれないとでも思ってんのか？」
「知らないよ。そんなの私には関係ないもん」
　私があっさり答えると――
「そうか、わかった」
　斑井は歯を剝き出しにして、唸るような声で呟きました。
「だったら俺の覚悟を見せてやるよ」

私の目の前に、覚悟を見せる為だけに人を殺そうとしている異常者がいました。もはや今の彼には、苗木くんを殺してどんな意味があるのかを考える冷静さすらないようです。
——やっぱり苗木くんはツイてなかったのです。
——あんなプッツンした異常者の人質になるなんて。
「終わりだ」
そして斑井は、苗木くんの頭蓋骨を掴んだ両手に渾身の力を込め——
「……それ違う」
およそ緊張感とはかけ離れた声を響かせながら、一つの人影がものすごい勢いで研究所に飛び込んできました。
その人影は滑るように斑井の眼前に接近すると、無防備だった彼の鼻っ柱に鞭のようにしなる裏拳を叩き込みます。斑井は堪らずに目を閉じました。前後不覚に陥って、攻撃してきた人物をすっかり見失っているようでした。
その隙を突くように斑井の懐へ潜り込んだ人影は、苗木くんの頭を掴んでいる両手を、下から突き上げる掌底で同時に弾き飛ばしました。ようやく解放された苗木くんをベッドの上に突き飛ばすと、そこで人影はくるりと回転しながら——飛びました。
そして繰り出された後ろ回し蹴りは斑井の顎先に見事に命中。人体急所に叩き込まれた一撃は、斑井の脳を激しく揺らし、彼の意識を根こそぎ奪っていきました。
膝から崩れ落ちた斑井の体が、力なく床にひれ伏します。
ちなみに——これらは私が一回分の瞬きを終える間に行われた出来事でした。
そんな華麗すぎる動きを見せた人影は、後ろ回し蹴りの余韻を残した回転の後で、音もなく鮮やかに着地。少し遅れてスカートがふわりと舞って——って女の子？
「い、戦刃さんっ！」
ベッドに倒れ込んでいた苗木くんが、歓声にも似た声を上げていました。
戦刃さん——それが彼女の名前のようです。
もちろん初めて聞く名前でした。
苗木くんは慌ただしく彼女に駆け寄ると、「あ、ありがとう、戦刃さん！　本当にありがとう！」と、興奮したように何度もお礼を言っていました。
しかし、当の彼女はそれとは対照的に冷静でした。いえ冷静と言うより、ただ感情がないだけなのかもしれません。
「クラスメイト助けただけだから……」

　ぼそぼそと独り言のように呟くだけで、彼女は苗木くんとも頑（かたく）なに視線を合わせようとしません。とても
じゃないけど、今さっき華麗な戦いを見せた人物とは思えませんでした。
「あ……でもさ、戦刃さんはどうしてこんな所にいたの？」
　それは確かに気になりました。だって、いつもだったらこの研究所にいるのは松田くんだけ――と私のノートにも書いてあるのに、どうして松田くんが留守の今日に限って、こんなにも来訪者が多いのでしょうか。何か大いなる力でも働いているとか？
「えっと……それは……」
　極端にボリュームの小さいその声に、私も耳を傾けます。
「……たまたま？」
「え、何で疑問形？」
　思わず突っ込んでしまいました。
「……戦刃さん、相変わらずだね」
　しかも相変わらずなんだ。
「……じゃあ、戦刃さんはたまたま近くを通り掛かったところで異変に気付いてくれて、それで助けに来てくれたんだね？」
　苗木くんの言葉にコクリと頷く戦刃さん。
「そっか……でも助かったよ。一時はどうなることかと思ったからさ……ありがとうね、戦刃さん。本当にありがとう」
　苗木くんは安堵したように胸をなで下ろしながら、戦刃さんが困ってしまうくらいに何度も何度もお礼の言葉を述べ続けていました。
「それにしてもツイてたよね……戦刃さんがたまたま通り掛かってくれるなんて……本当にツイてたよ……」
　ツイてたから――どうやら、それが私たちの助かった理由のようです。
　でも、確かにそうとしか言いようがありません。こんなに強い人がこの研究所の近くをたまたま通り掛かったお陰で、私たちはあの窮地（きゅうち）から逃れられたのですから――
　これは、あまりに都合の良すぎる幸運です。
　逆に、斑井にとっては都合の悪すぎる不運でした。
　――あ、それが超高校級の幸運ってこと？
　だけど本当の幸運なら、そもそもこんな事態に巻き込まれていない気もするし――
「あのう」

「……えっ？」
　はっと気付くと、いつの間にか眼前に戦刃さんが立っていました。
「わわわっ！」
　思わず飛び退ってしまいました。て言うか、本当にいつの間に？　瞬間移動でもしたんですか？
「………………」
　しかも、自分から声を掛けてきた割に彼女は無言です。
「………………」
　いつまで待っても口を開く気配がないので、仕方なく私から声を掛けてみました。
「えっと、はじめまして……先程はどうもありがとうございました」
「えっ？」
　と、驚きの声を上げたのは苗木くんです。彼は目をパチクリさせながら、私と戦刃さんの間で視線を行き来させていましたが──でも何をそんなに驚いているの？
「……戦刃むくろ、です」
　私が小首を傾げていると、今度は戦刃さんがボソリと声を上げました。
「第七十八期生の《超高校級の軍人》です……はじめまして、です」
　と、彼女は表情を変えずに口許を必要最小限に動かすだけの自己紹介をして、それが終わると──また黙り込んでしまいました。
「………………」
　割と、というか、かなり無口な女性のようです。でも、そんな彼女が超高校級の軍人なんて、人は見かけや態度によらないと言うか──もしかして軍人ってみんなこうなんですかね？　当たり前ですけど軍人の知り合いがいない私にはよくわかりませんでした。よくわからないので──
「………………」
　私も黙り込んでしまいました。
「………………」
　その沈黙に困惑した苗木くんも沈黙。
「………………」
　斑井は泡を吹いたまま当たり前のように沈黙。
　全員沈黙。
　気まずい無言。
　だけど、その気まずさも長くは続きませんでした。しばらくすると、私はその気まずさ自体を忘れ──代

わりに、あることを思い出していました。
　――あ、そう言えば松田くんがいないな。
　そうです。私が思い出せるのなんて、いつだって松田くんのことだけなのです。
　――松田くんは留守なのかな？
　――早く会いたいな。早く戻って来ないかな。
　と、そんなことをボーっと考えていると――
「……ッ！」
　いきなり身を低くして構えた――えっと戦刃さん。
「ど、どうしたの？」
　驚いた彼――えっと苗木くんが問い掛けると、彼女は警戒するような声で答えます。
「……誰か隠れてる」
　その言葉に、研究所内の空気が引き締まりました。
「え？　隠れて……？」
　と、その時です。
「失礼しちゃうな。僕は隠れてなんかないですぞ。人聞き悪いこと言わないでよねっ！」
　突然上がった声に、一同は反射的に研究所の中を見回します。
「……あれ？」
　けれど、いくら見回しても――そこには誰もいませんでした。
「いや、いるって！　ほらほら、ここだよ！」
「え？　ど、どこ……？」
　私がうろたえながら、キョロキョロとあたりを見回していると――
「あっ、あそこ！」
　苗木くんが指差していたのは、戦刃さんが乱入して以来開けっ放しになっていた研究所の扉の前あたりでした。
「あっ！」
　少し遅れて私も気が付きました。その扉の前にあどけない顔をした少年が佇（たたず）んでいたのです。
「お、やっと気付いたみたいだね？」
　その少年は何の特徴もない顔で、その声にもやっぱり特徴はありませんでした。
「正直気付くのが遅い気がしないでもないけど……ま、それは僕の才能のせいだから仕方ないか。許してあげるよ」

「どっ、どうして子供がこんな所にいるのっ？」
　と、苗木くんは突然現れた少年に面食らっています。
「コラコラ、僕を子供扱いするのはやめてくれるかな。確かに稀（まれ）に見る童顔かもしれないけど、これでもれっきとした希望ヶ峰学園の学生ですがな！　ほら、『れっきとした』なんて難しい言葉だって使えちゃうんだから……って、あれあれあれあれ？」
　少年の視線が倒れている斑井に吸い寄せられます。
「あらら……何だか大変なことになっちゃってるみたいだね……」
「あっ！　そ、それは違うんだよっ！」苗木くんが少年の視界を遮るように慌てて割って入りました。「こ、これは何て言うか……ちょっとした事故みたいなもんで……」
　すると、少年はそんな苗木くんの肩にポンと手を置きながら、
「あぁ、いいんだよ。別に僕に言い訳する必要なんかないって。だってこの件に関しては僕も関係者なんだからさ……そうだよね、お姉ちゃん？」
「えっ？」
　いきなり話を振られたものの当然のように覚えていない私は、「……そうだっけ？」と、首を傾げる他ありません。
「……あれ？　ひょっとして、また僕のこと忘れちゃった？」
　少年は、うーむ、と唸りながら腕組みをして渋い顔。
「ま、忘れられるのは慣れっこだからいいんだけどさ。これも僕の才能の副産物だしね。ほら、僕って存在感ないでしょ？　だから人から気付いてもらえなかったり、忘れられるのってしょっちゅうなんだよね……でもさ、お姉ちゃん」
　そこで腕組みを解いた少年は、両手をぶんぶんと振り回しながら声を張り上げました。
「依頼をした相手の名前くらいは覚えておこうよっ！　ほら、僕は神代優兎（かみしろゆうと）だよっ！　第七十七期生の《超高校級の諜報員（ちょうほういん）》だってばよ！」
「ちょ、ちょっと……待って……」
　猛抗議をしてくる少年に詰め寄られた私は、慌てて『音無涼子の記憶ノート』を広げると、そこから少年に関する記憶を探しました。
「あ、わかった！　神代くんね！　思い出したよ！　目立たない体質の神代くんだね！」
「目立たない体質って……」と、能面顔の戦刃さんが呟きます。「なんか座敷童子（ざしきわらし）みたいで気持ち悪い……」彼女は意外と思ったことを口にするタイプのようです。
　神代くんはそんな戦刃さんをジト目で一瞥（いちべつ）した後、すぐに私に視線を戻すと――わざとらしいくらいの

大声で言いました。
「いやぁ！　それにしても、お姉ちゃんの忘れっぽさってホントに酷いんだね！　ほとんど笑っちゃうレベルだよね、それ！」
「ちょ、ちょっと……本人の前で何てこと言うんだよ……っ！」
　それを聞いた苗木くんがすっ飛んできましたが、それでも神代くんは涼しい顔。
「あははっ、気を使う必要なんてないって。むしろ、気を使われる方がよっぽどムカつくと思うんだよね。きっと、お兄ちゃんはそういう経験ないんだろうけど……僕にはわかるからさ」
　神代くんはひょいっと苗木くんの脇をすり抜けると、私の目の前に立ちました。そして私に面と向かって言いました。
「いや、ホントにすごい忘れっぽさだよ。もはや天然なんて言葉じゃ収まりきらないね。でも僕は嫌いじゃないよ。むしろ、そういう度を越した天然キャラの女子ってのも、ありだなーなんて思ったり……実際、僕の股間の愚息スカウターもビンビンですがな！」
　私たちは揃って目を白黒させていました。当然、話の内容よりも唐突に挿入された露骨な下ネタの方にです。
「ま、とにかく僕は依頼人であるお姉ちゃんが無事でいてくれて、心底ホッとしている訳だけどさ。でも、やっぱり……」
　と、そこで神代くんの視線が再び斑井に向けられます。
「いくらなんでもこれは酷いんじゃないかな。さすがにどうかと思っちゃうよ。コンビニのアイスを丸ごと溶かすほど温かい性格と言われる僕でさえ、ちょっとイラッときちゃうレベルだよ」
「い、いや、確かにやりすぎたかもしれないけど……」すると、またもや苗木くんが弁解を始めます。「これは何て言うか……正当防衛みたいなものって言うか……」
「そういうことじゃなくてさ」
　それをピシャリとはねのけた後――神代くんは斑井の元までゆっくりと歩を進めながら、呆れたように呟きました。
「まったく、雑な解決方法だよね……いや、むしろ解決すらしてないじゃん。きっとこいつは目を覚ましたらまた暴れ出すよ？　ねぇ、どうすんの？　放っておく訳にはいかないよね、これ？」
「だから……それはみんなで警備部に行って説明すれば――」
「それは最悪だよ、お兄ちゃん」
　凍りつくような視線が苗木くんを射抜きます。
「あのさぁ、僕は依頼人であるお姉ちゃんと大事な話をする為にわざわざここまで来たんだよ？　わか

る？　大事な話なんだよ？　つまり、僕らは忙（いそが）しいのっ！」
「え、えっと……でも……」
　苗木くんは、神代くんの冷淡な圧力にすっかり気圧（けお）されているようです。
　と、その時でした。
　不意に、ボソリと呟くような声が響きました。
「私が何とかする……」
　その場の視線が一斉に戦刃さんに向けられます。
　すると彼女は慌てて目を伏せながら、繰り返すようにもう一度呟きました。
「わ、私が何とかする……」
「何とかするって一人で？」
　神代くんが詰め寄るように問い掛けると、彼女はコクリと頷いていました。
「なんだー、わかってんじゃん！」
　途端に、神代くんの目がキラキラと輝きます。
「だよね、だよね。そうだよね！　自分でやったことの始末くらい自分でできるよね？　うんうん、それを聞いてやっと安心したよ！　あ、ちなみに警備部には僕らの話はしないでいいから。だって面倒だからね」
「ちょ、ちょっと待ってよ！」
　そこに、またもや苗木くんが割り込んできました。
「でも、ちゃんと説明しなかったら、逆に戦刃さんが疑われちゃう可能性だって――」
「はあ？」
　神代くんの視線が苗木くんを貫きます。それは神代くんの幼い顔付きからは想像もできない熱量を備えていて、苗木くんを黙らせるには充分すぎるほどでした。
「だから何度言ったらわかるのかな？　僕とお姉ちゃんは忙しいの。後片付けなんてやってる暇（ひま）はないんだよ。そんなのは主要登場人物以外が勝手にやってくれればいいんだよ。て言うか、そもそもこんな乱暴な解決の仕方をした君たちが悪いんじゃん。だって、僕だったらもっと上手（うま）くやったはずだからね」
　一方的にまくし立てられる身勝手すぎる主張に、苗木くんは返す言葉もないまま、ただうろたえるしかありません。
　すると――そこでまたボソリと呟くような戦刃さんの声。
「大丈夫……私が一人で何とかするから……」
「い、戦刃さんっ！」
「……大丈夫だから」

　彼女は心配する苗木くんをその一言で制止すると、そこで私と神代くんに向き直り、「もう行っていいよ……」と、また呟くように言いました。

「じゃあ、これで決定だね！」

　神代くんは顔中に無邪気（むじゃき）な笑みを浮かべながら、パチパチパチと満足げに手を叩いています。

「では、お言葉に甘えて、ここの件はそちらのお姉ちゃんに任せるとして……僕とノータリンお姉ちゃんは別の場所にでも移動するとしますかね！」

　そして、彼は私の手を取ると、「ほら、行こうよ。行こうよ」と、玩具（おもちゃ）でも買って貰（もら）おうとねだる子供のように強引に引っ張っていきます。

「ちょ……ちょっと待っ――」

「いいから、いいから！　お姉ちゃんは元の平和な日常に戻りたいんでしょ？　だったら黙って僕に付いてくればいいんだよ！」

　強引に神代くんに引っ張られる私は、ずるずると研究所の扉の前まで引きずられていったところで――ふと振り返りました。

　そこには無表情な戦刃さんと、心配げな苗木くんが立っていました。

　その時、苗木くんが一歩踏み出しました。そこには決意の眼差しがありました。その目に思わずドキリとしていると――そこで彼の肩に戦刃さんの手が触れました。

　苗木くんが振り返ると、彼女は何かを諭（さと）すようにそっと頷いていました。

　それを見た苗木くんが諦めたように肩の力を抜きながら、もう一度私に視線を向けたところで――二人の姿が私の視界から消えました。

「さてと、気持ちを切り替えて頑張（がんば）っていきましょーう！」

　廊下に出るや否や、神代くんが張り切ったようにエイエイオー、とやりました。

「そんで、さっさとトラブルを解決させちゃおうぜー！」

　神代くんはそのまま勝手に歩き出してしまいました。

「……あ、待ってよ」

　私はそれを慌てて追い掛けながら――けれど、頭の中ではぼんやりと別のことを考えていました。それは苗木くんが最後に私に向けた視線のことです。

　私はあの目に猛烈な違和感を抱いていました。

　苗木誠という人物は、何だか頼りなくて、弱々しい物腰という印象だったはずなのに――あの時のあの目の奥には、そんな彼の印象を根底から覆（くつがえ）すほどの芯（しん）の通った力強さがあって、それが眩いばかりの煌（きらめ）きを発していました。

　それはどんな苦境であろうと、どんな強敵であろうと、決して諦めない意志の強さを主張しているようでもありました。

　思いも掛けない人物からそんな目を向けられた私は——むしろ得体(えたい)の知れない不気味な不安に襲われていました。

　どうして私がそんな風に感じるのか、それは私自身にもわかりません。

　だけど——きっと、わかる必要なんてないんでしょうね。

　だって、やっぱり私には関係ないことだから。

　それは私が忘れてしまうからとか、そういう単純な理由だけではなくて、もっと根本的に関係ないことのような気がします。

　例えば、まるで違う次元の出来事のように——きっと、私のこの物語と苗木くんの物語は決して交わることのない関係にあって、つまりは決定的に関係ないのです。

　なんだかそんな気がします。

　だから私はもう彼のことなんて忘れてしまおうと、生物学棟の廊下を歩きながら、そんな結論に達していました。

　そして実際——すぐに忘れてしまいました。

　真っ赤な目——

　それは白目の部分が塗料で染められているのではと思えるほど真っ赤な目だった。

　そんな目を向けてくる相手に対して、松田夜助は呟くように問い掛ける。

「……いつから意識があったんだ？」

　長すぎる瞬きの後で、ベッドの上の人物——《超高校級の生徒会長》村雨早春はゆっくりと口を開いた。貼り付いた唇(くちびる)がパリパリと音を立てながら剝(は)がれていく。

「……ずっとだ」

　張りのない嗄(か)れた声だった。以前、演説で聞いていた彼の声とは別人のようだった。

「やっぱりそうか……」

　そこで松田はあえて笑って見せた。それは友人に向けるような人懐(ひとなつ)っこい笑顔だった。

「でも、俺の目まで誤魔化そうってのは無謀（むぼう）だったんじゃないのか？」

　しかし村雨には何も響いていないようだった。彼は何の感情もない目の照準をただ松田に合わせているだけだった。それでも松田は、場の空気を和（やわ）らげるように冗談めいた口調で続ける。

「だけど、大した演技だったな。反射や生理的反応までほとんど消えていた……そんな常人離れしたことを平気でやるなよ。俺じゃなかったら見破れなかったところだぞ」

「何しに来た？」

　だが返ってきたのは――ほとんど敵意のような言葉だった。

　そこで松田は諦めたように真顔に戻った。

「さっきも言った通りだ。評議委員会のジジイたちに頼まれたんだよ。お前が本当に目覚めないのか……それを見極めて欲しいってな」

　しかし村雨は興味なさそうに視線を外すと、そのまま天井に向かって意味のない瞬きを繰り返していた。

「正直に言うと……俺も迷っているんだ……」

　松田は乾いた唇を舌で湿（しめ）らせ、さらに続ける。

「連中に……お前に意識があることを報告したらどうなるだろうな？」

　そんな松田の問い掛けにも村雨は口を噤（つぐ）んだままだった。電池の切れたラジコンのように、すべての反応が緩慢だった。

　――あながち演技でもなかったのかもな。

　松田は深いため息を吐き出しながら――自らの質問に答えていく。

「きっと、その報告は連中を驚かせるだろうな。その後のことは……さっき俺が推測した通りかもしれない。『場合によっては極端な手段に打って出る』……とっくに腹はくくっているはずだ。外の有力者に頼ってまで事件を隠蔽している時点でな」

　そこで松田は村雨から視線を外すと、ゆっくりと周囲を見回した。何の反応も見せない村雨の代わりに、取り囲む電子機器に向かって語り掛けているようだった。

「だったら……やっぱり報告する訳にはいかないよな。同期の人間に危険が及ぶと知りつつ差し出すような冷酷な真似（まね）はできないからな。冷酷じゃなきゃ優秀な研究者にはなれないなんて言うヤツもいるが……ま、それも別に構わないか。俺はもう十分すぎるほど優秀だからな」

　そんな松田の軽口にも、村雨は相変わらず眉（まゆ）一つ動かさない。以前の村雨早春はどんなくだらない冗談にも必ず愛想（あいそ）笑いで返すような男だったが――そんな彼はもうどこにもいないようだった。

　――いや、感傷に浸（ひた）っている場合じゃないな。

　松田はため息を吐きながら、目元までかかった髪をかき上げた。その下の切れ長の目がさらに鋭くなって村雨に向けられる。
「なぁ、村雨。交換条件って訳じゃないんだが教えて欲しいことがあるんだ……念の為に言っておくけど、これは評議委員会とか学校側の意向なんかとは別の話だからな。本音を言うと、俺は連中の考えなんてどうでもいいんだよ。俺はただこの学園で何が起きているのかを知りたいだけなんだ。その為に俺は――」
「従った振りをしている……」
　唐突に村雨が口を開いた。松田の目には村雨の口元が緩（ゆる）んだようにも見えたが――それは錯覚だったのかもしれない。次の瞬間にはもう跡形もなく消えていた。
　それでも村雨が反応してくれただけ、まだいい方だ。
　――もう少しで聞き出せるかもしれないな。
　そこで松田はジャケットを脱ぐと、くたくたのワイシャツを裾から出し、慣れたいつもの格好に戻った。気を抜いた訳ではない。むしろ逆だった。松田にとっては腕まくりをするような気持ちだった。
「やっぱり、俺にはお前が逃げる為だけにあんな演技をしていたとはどうしても思えない。むしろお前はこんな状態になっても、まだ学園のことを心配して……そして戦おうとしているんじゃないのか？　その為にあんな演技までして、評議委員会の連中の目を逃れようとしていたんじゃないのか？」
　そこで松田はベッドに腰掛けると、身を乗り出すように言った。
「なぁ、きっと俺ならお前の力になれるはずだ。お前を守れるはずだぞ。連中には嘘の報告をしておけばいいし、場合によっては一緒に戦ってやれるかもしれない。生徒会長と一緒になって巨悪と戦うなんて展開も悪くないからな……」
　そこで松田はもう一度村雨の様子を窺（うかが）った――だが彼はまだ無反応だった。
「ただ、力になろうにも俺はその事件について知らないことが多すぎる。だから、それをお前が教えてくれると助かるんだけどな……」
　すると村雨はわずかに目元を緩めた――少なくとも拒絶の反応ではなさそうだ。
　そう判断した松田は、まず一つ目の質問を用意した。それは彼が一番聞きたいことではなかったが、だからこそ先に聞いておくことを選んだ。
「犯人は……カムクライズルなのか？」
　それが最初の質問だった。
「教職員連中から聞いた話だと、行方不明（ゆくえふめい）になった例の事件の生き残りはカムクライズルって名前のヤツらしいな。でも、そんなヤツなんて……本当に存在するのか？」

　すると、しばらくの沈黙の後で――村雨はゆっくりと口を開いた。
「カムクライズルは……生徒会をたくさん……殺した……」
　途切れ途切れの断片的な声だったが、それでも意味は伝わった。
「……じゃあ、カムクライズルは存在するんだな？」
　松田は確認するように聞き返した。しかし村雨は何も答えない。彼は口を開けたまま固まったように動かない。
「おい、村雨……」
　急かすような声を掛けると、彼はようやく口を動かした。
「……どうでもいい」
　それだけで終わった。
　それでも、その一言から感じ取れることはあった。
　――つまり、問題はそこじゃないってことか。
　村雨が希望ヶ峰学園に抱いている危機感はそこにはない。カムクライズルが例の事件の犯人だという事実にすらない――そういうことだった。
　やっぱりそうか――と、そこで松田は思った。
　そして一番聞かなくてはならなかったことを聞く――その決心をした。
　深く息を吸い込むと、迷いが生まれる前に口に出した。
「だったら江ノ島盾子はどうだ？　あいつはこの事件にどう関係しているんだ？」
　すると村雨は目を閉じた。
　それは瞬きにしては長すぎる時間だった。
　そして、次にその目が開いた時――もはや彼の顔は原形をとどめていなかった。
　その目は眼球が零れ落ちそうなほど限界まで見開かれ、剝き出しになった歯はミシミシと音を立てて嚙み締められていた――それはパースそのものが狂ったような歪み切った表情だった。
　そこで松田は思い知った。
　そこにはもう村雨早春という人物はいない。
　超高校級の生徒会長と呼ばれていた男は完全に終わっていた。
　今そこにあるのは――単なる彼のなれの果てだった。
「こっ、こっ、こここここここ」
《それ》は尋常じゃないほど大きく口を開くと――そこから言葉にもならないような言葉を撒き散らし始めた。

「こっ、こここころろろさささないいいいいいとっ、ととととと……だだだめめめ……ころろさささないいいとと
と……だだめめななんだだ」
　――殺さないと駄目？
「誰だ？　誰のことだっ？」
　松田は《それ》の枕元に手を突くと、見下ろすような格好で問い掛けた。すると、大きく見開かれた
真っ赤な目が、ギロリと松田に向けられ――
「えのし……ま……じゅん…………こ」
　――江ノ島盾子。
　体の内側から殴られたような衝撃に襲われた。それは自分の心臓の鼓動だった。そのあまりの衝撃に
松田は思わず声を失った。
　すると、突然、《それ》が叫んだ。
「……ああああああああああああああああああああああああああ！」
　顔中に血管を浮かび上がらせ、赤黒く変色した顔はほとんど悪魔の形相（ぎょうそう）だった。
「江ノ島盾子を江ノ島盾子を江ノ島盾子を江ノ島盾子を江ノ島盾子を江ノ島盾子を江ノ島盾子を
江ノ島盾子を江ノ島盾子を江ノ島盾子を江ノ島盾子を江ノ島盾子をっ！」
《それ》は口から泡を飛ばしながら、壊れたテープレコーダーのように耳障（みみざわ）りな音を叫び続けていく。
「ころす！ころす！ころす！ころす！ころす！ころす！ころす！ころす！ころす！ころす！ころす！ころ
す！ころす！ころす！ころす！ころす！ころす！ころす！」
　絶叫に絶叫を重ねながら、何度も何度も叫び続ける。
　そんな絶叫を全身に浴びながら、松田は自分の体が冷たくなっていくのを感じていた。それは冷静と
も違う。全身から感覚が失われ、体温そのものが低くなっていくようだった。
　もう、彼はすべてを理解していた。
　希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件のすべてを理解してしまっていた。
　村雨早春にとっての本当の敵とは、
　希望ヶ峰学園にとっての本当の敵とは、
　おそらく、江ノ島盾子――
　それは彼の想像通りの結論で、彼の想像通りの最悪だった。
　だからこそ、松田はそこで絶望的な決意を固めるしかなかった。
　――やっぱり、俺がやるしかないか。
　――どうせ、とっくに引き返せない所まで来ているんだ。

　下腹部のあたりで何かがふつふつと沸騰（ふっとう）を始めていた。冷め切っていた全身が急に熱っぽくなっていく。

　そこで松田は、村雨に向き直った。

「なぁ……さっき俺ならお前を守れるはずだって言ったよな？」

　そして彼は穏やかな口調で語り掛ける。

「だけどさ、俺にはどうしても守らなきゃいけないヤツがいるんだ。そいつは俺が守ってやらないとどうしようもないヤツでさ……だから俺は何を犠牲（ぎせい）にしてもそいつを守るって決めてるんだ」

　その言葉は口から出た次の瞬間にはもう絶叫に飲み込まれていく。それでも松田は語り続けた。

「……俺は嫌なんだ。もう、あんな想いなんてしたくないんだ。大切な人に忘れられたり、大切な人に死なれたり……あんな想いはこりごりなんだ……だから俺は守る。どんなことをしてでもあいつを守る」

　松田は静かに語り掛けながら──《それ》の首に自分の両手を巻き付けた。

「コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス！」

　それでもまだ、《それ》は叫び続けていた。

　これから自分に何が起きるのか、それさえも理解していないようだった。

　──恨（うら）むなら恨んでくれ。

　松田は目を閉じ、心の中で呟いた。

　──あいつじゃなくて俺を恨んでくれよ。

　そして、次の瞬間。

　松田の全身の力が、一気にその両手に集約される。

　一際（ひときわ）大きな声を最後に、《それ》の絶叫は鳴り止んだ。

　代わりに、ベッドがガタガタと大きな音を立てて揺れ始める。

　前傾姿勢になった松田の目元に前髪が滑り落ちてくる。しかし松田は力を緩めない。むしろ強く、さらに強く力を込めていく。

　やがて、ベッドの揺れが収まってくると──

　松田の手の中で何かが失われていく感触がした。

《それ》が終わっていく感触だった。

　しばらくして松田はようやく目を開けた。疲れ切った全身の筋肉が熱く緊張して、鉄のように硬くなっていた。額から零れた汗が長い睫毛（まつげ）に溜まっている。

　彼はぼんやりとした視線をベッドの上の《それ》に向けていた。

その目からは一切の光が消えていて——どこまでも深い闇しかなかった。
それは——闇よりも深い闇色の目だった。

東地区にある学生食堂の一つ——

《第三学生食堂》と素っ気(そっけ)ない名前で呼ばれるこの食堂は、学園内に点在する食堂の中でも断トツの人気を誇る食堂——らしいです。

昼時には、学生たちはおろか教職員たちまでもが行列に並ぶほどで、その人気の秘訣(ひけつ)はこの食堂を取り仕切る《超高校級の料理人》と呼ばれる学生が誇る独自のレシピにあるようでした。一切のジャンルにも常識にも囚(とら)われない彼の料理には、麻薬でも入っているのではと思わせるほどの中毒性があるらしいのですが——

とは言え、その中毒性すら忘れてしまう私には関係ありませんけどね。

ま、それはともかく——

そんな人気の学生食堂は、今も空席が見当たらないほどびっしりと人で埋め尽くされているのですが、そこに一人でポツンと佇む私にとっては、その雰囲気(ふんいき)は決して居心地の良いものではなくて——

「て言うか、僕もいるって！」

「えっ、聞こえたのっ？　えっと……」

「だから第七十七期生の《超高校級の諜報員》神代優兎だってば！　もうっ！　これって何回目の自己紹介かなっ！」

と、そこで神代くんは胸の前で十字を切ると、

「まったく、僕とお姉ちゃんの相性ってだいぶ悪いみたいだね。体の相性はそうじゃないことを強く祈るよ……ザーメン」

「どの神に祈ったのよ、それ……」

とは言え、私と神代くんの相性が悪いのは確かなようです。

——忘れっぽい私。

——忘れられやすい神代くん。

それって、薄いカルピスをさらに水で割るような組み合わせですから。

「ま、いいや。そんなことより、さっさと話を始めるよ！」
「うん、話はいいんだけどさ……」
　と、私は学生たちでごった返す食堂内を見回しながら、
「でも、どうしてわざわざこんな所で？」
　チッチッチ――と、神代くんが私の目の前で短い指を振りました。
「部外者に聞かれたらまずい話ってのは、逆にこういう場所でする方がいいんだって。人の少ない場所でコソコソ話なんてするから盗み聞きされちゃうんだよ。無修正モノを隠すならアダルトビデオの中にって理論だよ！」
「つまり、大事な話を隠すなら雑談の中ってことだね」
「突っ込んでくれないのは寂しいけど、そういうことだね！」
　実際、そんなくだらないやり取りも、すぐに周囲の喧噪（けんそう）に埋もれていきます。
「ほらね！　誰も気にしないでしょ？」
　いたずらを成功させた後のようなしたり顔になりながら、神代くんはようやく本題に入っていきました。
「で、さっそくだけどお姉ちゃんに確認したいことがあるんだよね……あのさ、今朝お姉ちゃんの部屋に誰か来てなかった？」
「え？　そうだっけ？」
「忘れてるなら、ほら。さっさとノートで確認しないとね」
　呆れられながら催促された私は、『音無涼子の記憶ノート』を取り出すと、すぐに記憶の確認作業に取り掛かりました。
「……あっ！」
　私がその記憶を思い出すまでに時間は掛かりませんでした。そして、それは思い出すと同時に思わず叫んでしまうような記憶でした。
「お、思い出したっ！　そうだよ、江ノ島盾子だよっ！　彼女がいきなり私の部屋に来たんだった！」
「へぇ」
　それを聞いた神代くんの顔が急に険（けわ）しくなりました。
「やっぱり、あの時のあの人が江ノ島盾子だったんだね。初めて知ったよ……うん、どうやら、お姉ちゃんの部屋に盗聴器を仕掛けておいたのは正解だったみたいだね」
　――え？
「ねぇ、神代くん？」
「ん、何？」

「今なんて言ったの？　もしかして『とうちょうき』とか……言わなかった？」
「うん、言ったよ。盗聴器って。それがどうかした？」
「……盗聴器って、あの？」
「そう、一般的には盗聴に使われる機械だね」
　私は勢い良くイスから立ち上がると、「な、な、何が一般的よっ！」と、力の限り叫びました。「そもそも一般の人はそんな機械なんて使わないって！」
　けれど神代くんは相変わらず涼しげな顔で、悪びれる様子すらありません。
「盗聴器くらいでガタガタ言わないでよ。あの盗聴器は防犯も兼ねてるんだしさ」
「兼ねるってことは防犯以外の目的もあるってことじゃん！」
「あははっ、よく気付いたね！　ぱちぱちぱちぱち！」
　口で拍手を表現しながら、神代くんはイスの下から大きな紙袋を取り出していました。彼は即座に紙袋の中に手を突っ込むと、そこから取り出した菓子パンを見るや否や――
「おっ、ツイストシュガードーナツだ！」
　一人で歓声を上げながら、嬉しそうに頬張ります。
「……だいぶ傍若無人な持ち込みをするんだね」
「ふがふぐふが」
「何言ってるのかわかんないよ」
　神代くんは口の中に詰め込んだパンをゴクンと一気に飲み込むと――
「……あのね、誤解のないように言っとくけど、僕は別にお姉ちゃんだけに盗聴器を仕掛けている訳じゃないんだよ。他にもだいたい……これくらいかな？」
　と、両手を広げて見せる神代くん。
「ええっ！　十人も！」
「ううん」神代くんは首を振りながら、「百人だよ」
「ひゃ、百人！」
　一本の指につき十人の単位ってことですか！
「イナバ物置に乗っても大丈夫じゃん！」
　予想外の数字に驚いた私は、訳のわからない突っ込みをしてしまいました。
「……という訳で、基本的にはその女の子たちでローテーションを組んでるから、僕がお姉ちゃんで楽しむのはせいぜい月イチくらい……ま、よほど気に入ってヘビロテしても週イチくらいだね！」
　と、胸を張る神代くん――いや、張られても！

「て言うか、どうやって百人もの部屋に盗聴器を仕掛けたのさっ！」
「あはは、そんなの僕の能力を使えば簡単だよ。女子トイレや女子更衣室に忍び込むのだって朝飯前だからね！」
「朝飯前に何やろうってのよ……」
「ヌキヌキニンニン、ヌキヌキニンニンニン」
　あーあ、これはもう手に負えません。
　手にも足にも頭にも背中にも――どこにも負えませんね。
「ま、それはそれとして」
　彼はその一言で問題を片付けると、話をスタート地点に強制移動させました。
「お姉ちゃんたちってば部屋の中をドタバタ暴れ回ったりしてたでしょ？　そのせいで後の会話がほとんど聞こえなかったんだけど……ねぇ、江ノ島盾子はどうしてお姉ちゃんに会いに来たの？　何か用事があったから会いに来たんでしょ？」
　そう言いながら、新しい菓子パンを取り出した神代くんは、「お、ドイツ産のこぐまの足あとだ」と、珍味を味わうような顔付きでモグモグしています。
「えーっと、それはね……」私はノートに視線を落としながら答えます。「なんか……私にヒントを教えに来たみたいだね……」
「ん？　ヒントって？」
　私はさらにノートをめくりながら、
「えっと……江ノ島盾子の目的だってさ……」
　その言葉に、神代くんがピクリと反応します。
「詳しく教えて。その江ノ島盾子の目的って何なの？」
　神代くんの声が強張っていました。それにつられたように、私も緊張しながらノートの記憶を読み上げていきます。
「なんか……江ノ島盾子には二つの目的があるみたいだね……うーんと、その一つ目は『カムクライズルを完膚なきまでに叩き潰すこと』だってさ……意味わかる？」
「続けて」
　神代くんに冷たく先を促された私は、そこでまたノートに視線を落とすと、
「えっと、二つ目はね……」
　と、読み進めたところで――突然の衝撃。
　背骨をハンマーで殴られたような激しい衝撃に全身が強張ります。

「……お姉ちゃん？」

「な、何これ……『愛するダーリンである松田夜助を殺すこと』って……」

　そう口にした途端——脳が沸騰したように熱くなり、周囲の景色がグラグラと揺れ始めました。地震ではありません。私の全身が震えていたのです。頭は熱くて仕方ないのに、体だけが冷え切っています。怒りと恐怖という馴染(なじ)みの少ない感情にいっぺんに襲われ、私は訳がわからなくなるくらいに震えていました。

「……落ち着いてよ、お姉ちゃん」

　恐怖で痺(しび)れたようになっている頭の中に、微(かす)かに響いてくる声がありました。はっと我に返ると——神代くんが何かを語り掛けています。

「殺すなんてどうせハッタリだよ……人ってのはそう簡単に殺せるもんじゃないんだ。それに本当に殺す気だったら、わざわざお姉ちゃんに宣言する前にとっくに殺してるはずだよ。そうでしょ？」

　確かにそうです。わかっています。だけど体の震えが止まらないのです。

「そそううだだよよねねこころすすすななんてててありありありえな」

　声まで震えて、ほとんど言葉になりませんでした。

「……とりあえず、落ち着くまで黙っていいよ」

　面倒臭そうに言いながら、神代くんは手元のパンを丸飲みすると、

「その代わり、ここからは僕の推理を聞いてもらうパートにしよっかな」

　そう高らかに宣言しました。

「よーし、じゃあさっそく始めちゃうよ！」

　神代くんは急に張り切ったように姿勢を正すと——すぐに、その推理パートとやらを始めました。

「まず、お姉ちゃんが気にしている『松田夜助の殺害予告』の件だけど……やっぱりそれはハッタリじゃないかな。だって殺害を予告する意味がないからね。脅しに使うならまだしも、そういう訳でもなさそうだし……うん、やっぱりハッタリだよ。とりあえず、そうしとこう。それに……むしろ気になるのは彼女の一つ目の目的の方だしね」

　江ノ島盾子の一つ目の目的。

　それって確か——

「いや、それにしても、『カムクライズルを完膚なきまでに叩き潰すこと』とはね……まったく、さすがの僕もちょっぴり驚いちゃったよ。まさかこのタイミングで、カムクライズルの名前を聞くとは思ってもなかったからね……」

「だだれれななのののののの」

「『誰なのその人？』って聞いてるんだよね？」
　そこで神代くんは――ぱん、と胸の前で手を叩きました。
「犯人なんだよ」
　そして彼はテーブルに乗り上げるように身を乗り出すと、興奮したようなうわずった声で言いました。
「なんとビックリ！　実は、そのカムクライズルってのが希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件の犯人だったんだよ！」
　え？　希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件の犯人？
　て言うか、希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件って――何でしたっけ？
　と、私が首を傾げていると、
「ちょっと！　その反応からして覚えてないんでしょ！」
　神代くんはムッとしたように唇を尖らせていました。
「なんか、お姉ちゃん相手に推理を披露してもツマんないね……これからは、お姉ちゃんのリアクションには期待せずに話を進めることにするよ」
　神代くんは本当にツマらなそうにため息を吐き出した後、再び語り始めます。
「こないだ話した時点では……って、それも覚えてないだろうけど……あの時点では、希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件が本当にあったのかすら確認が取れてなかったよね？　でも今だったら確信を持って言えるよ」
　そこで神代くんは、パチンと私の目の前で指を鳴らすと、
「希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件は実際に起きた事件なんだよ。そしてカムクライズルが、その事件の犯人だったんだ」
　と、自慢げな顔付きで言い放ちました。
　そして、その自慢げな顔のまましばらく待った後で――
「……別にリアクション待ちしてる訳じゃないよ」
　そんな風に一方的な言い訳を口にすると、気を取り直したように続けます。
「僕がそう確信するに至った理由はね、ある会話がきっかけなんだよ」
　そこで神代くんは私の耳元に顔を寄せると、小声で囁くように言いました。
「実はさ、ちょっと教職員同士の会話を盗み聞いちゃったんだよね……」
　盗み聞いた――何だか嫌な予感がしまくりですけど。
「あの人たちも学園内での会話には随分と気を使っていたみたいだけど、さすがに自室でこぼす愚痴までには気が回らなかったみたいだね……しかも情事の後なんて、一番気の抜けるシチュエーションだも

んね。まったくオフィスラブってヤツは怖いですな」
「ま、まさか……っ！」
「お、久しぶりに喋ったね！」
　え？　久しぶりでしたっけ？
　て言うか、そんなことを気にしている場合ではありません。それより今は――
「いやはや、さすがの僕ちんも女教師の部屋に取り付けておいた盗聴器がここまで役に立つとは思ってもいませんでしたがね。この一連の作戦に名前を付けるなら、『ハメられたエリート女教師の淫謀！』となるのでしょうな！　ぐふふふふ！」
「そっか……良かったね」
　何だか、まともな反応が馬鹿らしくなったので適当に返しておきました。
「ともかく、これでピースが揃ってきたね。希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件、カムクライズル、それと江ノ島盾子……後はこれらがどう繋がっているのか、それさえ判明すれば一件落着だよ」
「……じゃあ、もうすぐってこと？」
「うん、もうすぐなんだけどさ……」
　と、そこで神代くんの顔が曇ります。
「逆に言えば、もう一歩ってとこなんだよね……僕の予想だと、これらを繋げるピースがもう一つくらい隠されている気がするんだ。それさえわかれば後は早いんだけど……」
　残されたもう一つのピース――ですか。
「だったら、そのカムクライズルって人に聞いてみれば？　だって犯人なんでしょ？」
　私の提案に、神代くんは難しそうな顔で首を傾げます。
「うーん、それは無理かな。だって、どこにいるかわかんないし……」
「どこにいるかわかんないって……それって行方不明ってこと？」
「行方不明って言うか……」
　ますます難しそうな顔になった神代くんは、口調も重くなっていきました。
「そもそも、カムクライズルなんて人間は、本科にも予備学科にも教職員の中にもいないんだ。そんな名前のヤツなんて希望ヶ峰学園のどこにも存在していないんだよ……男にも女にも、現在にも過去においてもね」
「……は？」
　どこにも存在しないって――そんな幽霊じゃあるまいし。
「それでも可能性として一番考えられるのは、誰かがその記録ごと抹消したってことだけど……だとして

も厄介だよ。だって、そんなことができるのって学園側の人間だけだし、それもかなり組織の中枢（ちゅうすう）にいる人間でないと不可能だからね」
「じゃあ……学園側の中枢にいる人間が共犯者ってこと？」
「でもね、僕が調査した限りだと、そのカムクラってヤツのことを知る生徒すら、どこにもいなかったんだ。もし学園側が事件後に隠蔽したんだとしても、事件前の彼を知っている生徒がいてもおかしくないはずなのに……むしろ、最初から存在してなかったとしか考えられないよね」
「ま、まさか……本当に幽霊とか……」
「や、やめてよっ！　幽霊だなんてっ！」
　神代くんは頬を膨らませて本気で怒っていました。どうやら、その手の話題が苦手なようです。
「と、とにかく……」
　そこで彼は小さな咳払い（せきばらい）をすると、真顔に戻って言いました。
「どんな理由があるにしても、カムクライズルの素性が明らかにならない以上は、もう諦めるしかないみたいだね……」
「あ、諦めるって！」
　と、思わず声を上げた私の眼前で――神代くんは指を振りながらチッチッチ。
「早とちりは良くないな。僕が言っているのは、その視点からの考察を諦めるって意味だよ。その視点から考えてわからないなら、別の視点から考えてみればいいだけだよ。一つの視点に囚われるなんて愚か者のすることだからね。たとえば胸ばっかり見て尻を見ない中学生と一緒だよ」
「そっか！　良かったね！」
　まともな反応が馬鹿らしくなったので、元気よく適当に返しておきました。
「で、もう一つの視点って？」
「もちろん江ノ島盾子だよ」
　江ノ島盾子――再び戻ってきた彼女の名前に、背筋がゾクリと粟立つ（あわだつ）ような感覚がありました。
「これまた女教師の会話を盗聴したお陰で、ようやくわかったんだ。江ノ島盾子が希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件にどう関係していたのかがね」
　そこで神代くんはチラリと私に視線を寄越（よこ）しましたが――私のリアクションが思いのほか弱いのを確認すると、すぐに大きなため息を吐き出しました。
「お姉ちゃんは覚えてないみたいだけど……彼女は『事件の噂を広めた張本人』って以外は、希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件にどう関係していたのか謎だったんだよ。でも、それがようやくはっきりしたんだ。どうやら彼女は**事件の第一発見者**らしいんだよね」

　事件の第一発見者――そうノートに書いてみたところで、ふと思います。

「第一発見者って……なんか怪しくない？」

「推理小説だったら真っ先に疑われるポジションだからね」と、頷く神代くん。「でも、これでわかったでしょ。彼女が学園側から取り調べを受けていた理由がさ」

「えっと……取り調べって……」

「もうっ！　ノートを見て思い出してよっ！」

　神代くんが癇癪（かんしゃく）を起こしたように叫ぶので、私は慌ててノートを読み返します。

「……あ、そっか。江ノ島盾子は事件の噂が広まり始めた直後に、学園側から取り調べを受けてたって話だったよね？　でもその直後に解放されてて……だから彼女は犯人じゃないってことになってたんだもんね！」

「お姉ちゃんのお陰で大分テンポの悪い解決編になっちゃったけど……ま、そういうことだね。とにかく学園側の取り調べはかなり執拗（しつよう）だったみたいだし、それを逃れるのはどう考えたって不可能――」

　と、そこで突然、神代くんの動きが止まりました。

「どうしたの……？」

「そっか……そういうことか……」

　彼は目を大きく見開き、唇の端をわなわなと震わせています。

「お姉ちゃんわかったよ！」

　直後、興奮したような甲高（かんだか）い声が上がりました。

「僕としたことが、こんな大事なことを見落としてたなんて……うん、やっぱお姉ちゃんに参加してもらって正解だよ。対話形式の推理パートは偉大だね！」

　神代くんはその興奮を抑え切れないといった様子で新たな菓子パンを取り出すと、それを咀嚼（そしゃく）しながら言葉を紡いでいきました――ちなみに、ようかんパンでした。

「つまりさ、江ノ島盾子が学園側から受けてた取り調べ……そこに最後のピースが隠されてたんだよ！」

「え？　どういう意味？」

「あのね、これまた盗聴で耳にした情報なんだけど……彼女が学園側から受けてた取り調べってのは本当に徹底的でさ、ポリグラフ検査とかキネシクス分析とか、そういうベタなヤツに始まって、《脳指紋法》なんて、ちょっと変わった取り調べも受けてたらしいんだよ。でね、その脳指紋法ってのは、ポリグラフ検査に代わる実用性の高い嘘発見器として注目されている検査法らしいんだ……要は、嘘をついているかどうかを脳波を直接測ることで調べようっていう検査法なんだけど……わかる？」

「よくわかんないけど……何か凄そうだね」
「そうっ！　凄いんだよ！」
　神代くんは興奮し切ったように口角を上げています。
「とてもじゃないけど、専門家でないとどうしようもないくらいにね！」
「……専門家？」
「実はさ、その取り調べには学園側から要請を受けた《ある生徒》が協力していたらしいんだ。さすがに、その生徒が誰かってことまでは判明しなかったんだけど……ようやく気付いたよ。《脳指紋法》なんて、専門家なしでは難しい取り調べ方法が行われてたとなると、その道の専門家こそが協力者……そこまでわかれば想像するのは訳ないよね。この学園で脳のことに詳しい人間なんて言ったら……」
「え……」
　途端に、頭の中におぞましい想像が浮かんできました。
　けれど、それを具体的なものにしたくない私は慌てて別の言葉を頭に浮かべます。
　関係な――
「お姉ちゃんとも関係ある《超高校級の神経学者》の松田夜助だよ！」
　耳の後ろで何かがショートするような音がして――頭の中が真っ白になりました。
「さっきの『殺害予告』の件からして、江ノ島盾子と松田夜助の間に関係があるのは間違いないとは思ってたけど……ひょっとすると、松田は江ノ島に何か弱みでも握られてるのかもしれないね。とにかく、その関係こそが理由だったんじゃないかな？　江ノ島盾子があっさり学園側の取り調べから解放されちゃったことのさ！」
　目を輝かせてまくし立てる彼に、私は相槌すら打てません。
　私はもう、とっくに彼の話についていく気力を失っていました。
　それでも神代くんは続けます。沈んだ私とは対照的に、嬉々とした様子で語っていきます。
「……要はさ、松田夜助こそが『隠された最後のピース』なんじゃないかな？　だからこそ江ノ島盾子は、松田と仲のいいお姉ちゃんを執拗に狙ってるんじゃないかな？　ね、そう考えると、すべてが繋がってくると思わない？」
　思わないも何も――私には何もわかりません。
　そもそも、どうして松田くんの話になっているのかもわかりません。
　――わからない。わからない。わからない。わからない。わからない。
　圧倒的なほど訳がわからなくて、何もかもが理解できないので――そこで私はノートに走らせていたペンを止めました。

　私の自己防衛が働いたのです。

　もし、これが私の世界を脅かすような事実なら、むしろ忘れた方が幸せです。だって関係ないことにして忘れてしまえば——私の世界は守られるのです。

　だから私は都合の悪いものから目を背けます。全力で私の世界から追いやります。そのことに罪悪感や自己嫌悪（けんお）を抱くこともありません。だって私は自分が目を背けたことさえ忘れてしまうのですから。

　そうやって、すべてを関係ないことにして忘れることが——

　私の自己防衛なのです。

「……うん、どうやら本当にもうすぐって感じになってきたみたいだね」

　ふと気付くと、神代くんが独りごちながら、人差し指でテーブルの上に意味のない図形を描いていました。

「ねぇ、お姉ちゃん……このトラブルも終わりに近付いてきたみたいだよ。だからさ、お姉ちゃんも解決後のご褒美（ほうび）タイムに備えて、我がままボディに磨きをかけておいてね。僕の想像だと、お姉ちゃんってかわいい顔に似合わず、夜は暴れん坊将軍だったりするんじゃない？　どう？　当たってるでしょ」

　一方的に言った後、神代くんはピョンと飛び跳ねるようにイスから腰を上げました。

「よーし！　じゃあ一気にラストスパートしちゃおうかなっ！」

　気合を入れ直した彼は、そこでくるりと身を翻（ひるがえ）すと、

「きっと、お姉ちゃんと次に会うのは、真の解決編の時だね！」

　と、手を振りながらテーブルから遠ざかっていきました。

　けれど、数歩進んだところで——

「あ、そうそう」と、思い出したように顔だけで振り返ると、「もし、じっとしてられないなら、松田夜助の件を頼もうかな」と、言いました。

「ま、いくらなんでも、殺すなんてことはあり得ないだろうけど……念の為に忠告くらいしてやってもいいんじゃないかな。ただし、江ノ島盾子と松田夜助にどんな秘密の関係があるのかわかってない以上は、充分に注意した方がいいだろうけどね」

　秘密の関係？

　江ノ島さんと松田くんに——秘密の関係？

　——何それ。

　何それ。何それ。何それ。何それ。何それ。何それ。何それ。

　私は大型の不安に襲われ、また胸が苦しくなって、すべてが怖くなって、そのままグッタリとうな垂（だ）れてしまいました。

「……とにかく、そろそろクライマックスも近いみたいだし、お姉ちゃんも覚悟だけは決めておいた方がいいと思うよ、色々とね」
　神代くんは私にそんな言葉を掛けたところで――今度こそ身を翻し、学生たちで賑(にぎ)わう食堂の中を、するすると幽霊のようにすり抜けていってしまいました。
　こうして、私は食堂に一人残されてしまいました。
　私はグッタリとうな垂れたまま、とりあえず深呼吸を繰り返します。
　そこに意味はありません。単なる時間稼ぎでした。
　すべてを解決するのは時間だけなのです。時間はいつだって容赦なくすべてを洗い流していきます。だから、私がこうして深呼吸を繰り返している内にも時間は過ぎていき――
　そして私は忘れてしまいます。
　見事にすべてを忘れてしまいます。
　もはや、自分がどうして深呼吸を繰り返していたのかさえ覚えてなくて――
「ま、いっか！」
　でも忘れてしまった以上は仕方ありません。ここからは明るく元気に前向きに、過去など振り返らずに希望を持って未来へと進もうと、テーブルの上のノートを手に取り、勢い良く立ち上がり掛けたところで――
「……あれ？」
　立ちくらみ――とは少し違います。
　私は思わずテーブルに手を突いていました。
　落とした視線の先で、ノートの文字がぐにゃぐにゃと踊(おど)るように歪んでいます。
　途端に、背筋から大量の虫が這(は)い出したような悪寒(おかん)がゾワゾワと全身に広がっていき、膝が折れ、おやと思った時には――またイスに腰を下ろしていました。
　頭の中が無機質な灰色で染められ、ぼんやりとしていきます。
　――眠い。
　瞼(まぶた)が重くなり、顔の筋肉がだらしなく緩み、世界が急速に閉じていきました。周囲の学生たちの喧騒もどこかに消え、あたりから人の姿が失われていきます。
　毒でも盛られたか、催眠術(さいみんじゅつ)にかけられたみたいに、私は身動き一つできません。
　そんな静寂の中――ふと耳元で誰かの声を聞きました。
「うぷぷ」
　それは不気味な笑い声。

　けれど、不思議と聞き覚えがありました。
「あれ？　もしかしてボクのことを覚えててくれたの？　嬉しいなぁ。忘れっぽい癖（くせ）にボクのことは覚えててくれたんだね……そう、ボクは《超高校級の絶望》だよ。お久しぶりだね、うぷぷぷ」
　どうして覚えているの？
　どうして覚えていられるの？
　それでも確かに覚えています。その声は以前、私にこう言ったはずです。
　――また会おうね！　その時こそちゃんとオマエを殺してあげるからさ！
　ふと見上げると、目の前に大きな影が立ち上がっていました。
　その影の中には、見覚えのある顔が浮かんでいます。
　けれど、それが誰の顔なのかは思い出せません。
　その見覚えのある顔は、毛穴の奥まで覗き込むような視線を私に向けていました。
　それは闇色の虹彩（こうさい）に彩られた目でした。
　絶望にすら絶望しているような目でした。
　そんな目に見つめられていると、不意にある考えが脳裏（のうり）をよぎります。
　――あぁ、私はこの目に殺されるんだ。
「ううん。今はまだオマエを殺したりしないよ」
　私の思考を読んだように、また耳元で声が囁かれました。
「今はまだ、オマエを殺す訳にはいかないんだよね。オマエにはもっと絶望を味わって貰わないといけないからさ。もっともっと絶望的な絶望を味わって貰わないといけないからさ」
　すると急にあたりから光が奪われました。
　と同時に、自分が瞼を閉じたことに気付きます。
　まるで大きな影が私の頭をすっぽりと覆い尽くしたようでした。
「でも、もしそんな絶望なんて味わいたくないって言うなら……だったら戦うことだね。絶望と戦わないと希望は勝ち取れないんだよ」
　それが最後の言葉でした。
　その後は、音も、声も、何もかもが消え失せ――私の体は痺れながら全機能を停止。
　完全に動けなくなった私は、意識の外へと突き落とされるように――
　そのまま静かに落下していきました。

急ぎ足でやって来た彼女の部屋に鍵は掛かっていなかった。それにもかかわらず、そこには誰もいなかった。勢い良く開かれたドアの風圧で、部屋中に貼られた貼り紙がバタバタと虚しく音を立てただけだった。

「……なんで、こんな時に限って留守なんだよ」

用がない時はじっとしてろって言っただろ――と、思わず怒鳴り散らしたくなった。

とは言え、そんな言葉が彼女にとっては意味がないこともわかっている。いくら言って聞かせたところで――彼女はすべてを忘れてしまうのだ。

一際大きなため息と共に、松田夜助はふと自分の両手に視線を落とした。

彼の拳は握り締められたままだった。いくら手を開こうとしても無理だった。両手の感覚はとっくに麻痺していたが、それなのに村雨早春の首を絞めた感覚だけはしっかりと残っている。

不意に、村雨早春の赤い目が鮮烈に脳裏に浮かんだ。

握り締める両手の力がさらに強くなる――その手は今も彼の首を絞め続けているようだった。

「なんで……こんな時に限って留守なんだよ……」

さっきよりも弱々しい声で呟きながら――彼はその部屋を後にした。

寄宿舎を出た松田は、すぐに東地区の生物学棟へと向かった。

彼女がいるとしたら、もうそこしか考えられなかった。すべてを忘れた彼女に、他の居場所なんてあるはずがない。

真夏でもないのに、ワイシャツの背中が汗でびっしょりと濡れていた。汗を含んだ全身は鉛のように重く、いつもなら十分程度で辿り着くはずの生物学棟まで、その倍以上の時間が掛かった。

それでも、何とか生物学棟にやって来た松田は、切れかけのゼンマイ人形のようなぎこちない足取りで階段を上っていき、神経科学研究所の前に立った。

肩で息をしながら乱暴に扉を開ける。

と同時に、期待を込めた眼差しで部屋の中を見回した。

だが――そこには誰もいなかった。

しかし落胆よりも早く、違和感が駆け抜けていった。

――荒らされてる？

巧妙に隠されてはいたが、何者かが荒らしたと思われる痕跡が、デスクに、ベッドに、研究所のあちらこちらに見受けられた。

──まさか気付かれたか？

顔色を変えた松田が慌ててベッドに駆け寄ると──それを察知したかのように、その下で何かが動いた。

「誰だ！」

反射的に声を上げながら、伸ばした手で一気にシーツをめくり上げると──

ベッドの下に女がいるのが見えた。

松田は思わず体の緊張を解いていた。いくらか安堵したのかもしれない。

だが次の瞬間──

その安堵は爆発するような音と共に吹き飛んだ。

そこで松田が目にしたのは──宙に跳ね上がったベッドだった。

まるで模型のように軽々と浮かび上がったベッドは、ぐるぐると空中で回転を始め、そのまま何回転かした後で、ようやく重力を思い出したように落下する。

そして、シーツをめくり上げた体勢のまま固まっていた松田の鼻先を掠(かす)めるように──元の位置に着地した。

轟音(ごうおん)が響く。

その轟音の後に続いて聞こえてきたのは──笑い声だった。

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

ベッドの向こう側で──さっきの彼女が仁王立(におうだ)ちをしていた。

「松田は思わず身構えた。そこにいたのは彼が期待していたのとは、まったく別の女性だった。その彼女の顔に貼り付いている笑みは、今まで彼が見てきたどんな笑みよりも狂的で、だが崇高(すうこう)さすら感じさせるほど魅力的だった」

「お、お前……っ!?」

「その女はト書き風の妙な言葉を口にしていたが、松田はそれを無視するように問い掛けた。彼は一刻も早く彼女のことを聞きたかった。彼女のことが知りたくて堪らなかった。そう思えるくらいに彼女は魅力的だったのだ。松田は改めて彼女の全身を舐(な)めるように見回した。すると自然と彼の股間が熱く──」

「……いい加減にしろ！」

松田は思わずベッドを蹴り付けた。乾いた金属音が研究所内に響く。

「あらら、怒っちゃった？」それでも彼女は笑顔のままだった。「でも、怒りたいのはこっちなんだけど……。ねぇ、どうしてこんなにカワイイお顔の江ノ島盾子ちゃんを見て欲情しないの？　どうして？

ねぇ、どうして欲情してくれないの？」
　そんな彼女の言葉を聞いて――松田は改めて思い知らされていた。
「……やっぱり、お前は異常だぞ」
「そう？　アタシにとってはこれが普通なんだけど」
「……それがお前の本性なのか？」
「ちょっと……本性なんて言い草はやめてよ……」
　江ノ島は途端にムッとしたような口調になっていた。
「確かに、アンタからすれば今までのアタシは猫を被（かぶ）っていたように思えるかもしれないけどさ……それもアタシという存在を形成する一つの要素であったことに変わりないのよ。だから、どのアタシも間違いなくアタシなの。ただアタシって飽きっぽいから、いい加減アンタの前で演じてたキャラに飽きちゃったのよね。ただそれだけの――」
「目的は何だ？」
　松田は江ノ島の言葉を遮るようにして問い掛けた。人相が変わるほど目付きが厳しくなっている。
「……ちょっと酷くない？　クイーンオブお喋りと呼ばれるアタシに喋らせないなんて、サイヤ人に戦うなって言ってるようなモンよ？」
「いいから答えろ！」松田が苛立ったように声を荒らげる。「お前は何がしたいんだ。お前は何をしようとしているんだ」
　すると江ノ島は小さく首を傾げ、「別に。アタシは何もしないけど」
「……なんだって？」
「今更、アタシから何かをすることなんてないわよ。そんなことしなくたって他のみんなが勝手に色々とやってくれてるみたいだしね。生徒会の連中や学園長さんや評議委員会の連中……それにアンタのことが大好きなあの子もそう……みーんな、アタシの為に動いてくれてる。ま、その筆頭がアンタなんだけどね」
　それを聞いた松田の顔から色が失われていく。
「お前はもう気付いてるのか？　俺が何をしたのか……」
「だったら、どうだって言うの？」
　江ノ島は顎を上げ、松田を見下ろすように言った。
「アンタのやってることなんてとっくにお見通しで……そもそも、それ自体がアタシの目論見（もくろみ）通りだったとしたら、どうだって言うの？　ねぇ、どうだって言うの？」
　その言葉に、松田は思わず奥歯を噛み締めていた。
　それを見た江ノ島は――恍惚（こうこつ）とした表情でブルリと体を震わせる。

「あふん……やっぱり松田くんは素敵な顔をするのね。でも、そんな絶望的な顔見せられると、もっと欲しくなっちゃうかも。もっともっと絶望させたくなっちゃうかも」
「ふざけ……るな……」
　松田は顔中に怒りを滲ませていた。それを見た江ノ島はフフンと鼻を鳴らすと、腰の後ろで手を組むような格好で、悠々と松田の周囲を回り始める。
「そんなことよりさ……松田くんこそ、これからどうするつもりなの？」
「……何がだ？」
　と、聞き返した瞬間だった。
　いきなり伸びてきた江ノ島の手が、松田の手首を強く掴んだ。
「あらら、手が傷だらけよ？　もしかして誰かに引っ掻かれたとか？　痛そうね。舐めてあげよっか？」
　松田は慌てて手を引こうとしたが――江ノ島に掴まれた手は微動だにしない。
「ふむふむ、この引っ掻き傷からして、これって男の仕業でしょ。とっても優等生っぽいヤツの仕業でしょ。しかも悪い病気にやられちゃって、ショックで寝たきりだったヤツの仕業でしょ」
「もう……そこまで知っているのか……？」
「知ってるんじゃなくてわかってるのよ。だって全部アタシの目論見通りなんだもん」
　江ノ島は青ざめた松田の顔に自分の顔を寄せると――ニヤリと不気味に口許を歪ませた。
「うぷぷぷ、なんちって！」
　そこで松田の手を離すと、彼女は再び松田の周囲を回り始める。
「きっと、そこまでして大切な存在を守りたかったのね。そりゃそうよね、もうお母さんの時のような惨めな思いをするのはゴメンだもんね……あ、お母さんと言えばさ、ちょっと例の音無涼子ちゃんと風貌が似てるような気がするんだけど……ほら、雰囲気とかさ。大切な存在同士で偶然似ちゃったのかしらね？　それともアンタが似せたのかしら？　意識か無意識かは知らないけど、相手が忘れっぽいのを良いことにお母さんっぽく似せちゃったとか？　ま、男はみんな母親みたいなタイプが好きって言うし、特にアンタみたいに母親に忘れられた惨めな過去を持つと尚更なのかもね……」
　江ノ島はねっとりとした上目遣いを松田に向けながら、弾むような足取りでぐるぐるとその周囲を回っていく。
「だからこそ、今度はちゃんと守りたかったのね。わかるわよ、もうあんな惨めな想いはゴメンだもんね……でも、それにしても困ったわね。本当に困ったわよね。で、それを踏まえた上で改めて聞くんだけど……」
　江ノ島は松田の正面で立ち止まると――睨み上げるような視線で彼を覗き込む。
「マジで、これからどうするつもりなの？」

開き掛けた松田の口が――すぐに閉じる。固く結ばれた色の薄い唇を小刻みに震わすだけで松田は何も答えられない。ただじっと江ノ島を睨み付けているだけだった。

江ノ島はそんな彼の反応がわかりきっていたように――再び静かに歩き始める。

「仕方ないわね。アタシが一緒に考えてあげるわよ……」

だが、そう言った直後にすぐにその足が止まった。

「……か、勘違いしないでよねっ！」

彼女は恥ずかしさに頬を真っ赤に染めながら叫んでいた。

「べ、別にアタシは……アンタなんてどうなったって構わないんだからね……ただ、こうなっちゃったのはアタシの責任でもあるから……ほ、放って置けないってだけなのっ！」

意味がわからなかった。

何の脈絡もなくキャラを変えていく江ノ島に、松田はまったく付いていけない。

だが反応があろうとなかろうと構わないといった様子で――江ノ島は何事もなかったようにまた歩き出すだけだった。

「ま、一緒に考えるって言っても方法は一つしかないと思うのよね……」

ぐるぐると松田の周りを回りながら、今度は淡々とした口調で語っていく。

「……カムクライズルよ。あいつのせいにしちゃうしかないでしょ。あいつが脱走して、希望ヶ峰学園史上最大最悪と呼ばれる事件の続きをやったことにしちゃえばいいのよ。そうすれば評議委員会の連中の件も、生徒会長の件も、万事解決ってことになるはずよ。どうせ連中がまた隠蔽するに決まってるんだからさ」

それを聞いた松田は、やっぱりな――と、心の中で呟いていた。

きっと、こいつならそう言うと思っていた。

だからこそ――

ますます、わからなかった。

「お前は本当に……何がしたいんだよ……」

「だからさぁ！　さっきも言ったでしょ？　アタシは何もしないって！」

江ノ島は高笑いのような声で、それを笑い飛ばす。

「アタシは面白がってちょっかい出してるだけなんだって。でも、ちょっと首を突っ込むくらいはいいじゃん。どうせ、今のアタシの存在なんてイレギュラーみたいなもんなんだし、それ以上は何もできやしないんだからさ！」

その言葉が本心かどうかはわからない。そして、いくら聞いたところでそれがわかるはずがないことも――

松田は理解していた。
「ま、結局はアンタ次第ね。事態はアンタ次第でどうにでもなるのよ……うん、好きにしていいよ。アタシはどんな結末でも受け入れる準備はできてるからさ」
　と、そこで江ノ島の足が止まる。松田の正面に立った彼女は、そこから彼に向かって再度問い掛けた。
「で、どうするの？　乗るも乗らないもアンタ次第だけど？」
　彼女の思う壺だとわかっていながらも――松田は聞き返すしかなかった。
「……お前はカムクラってヤツの居場所を知ってるのか？」
「ううん、知らない」
　江ノ島はあっさりと首を振った。松田の顔が苦々しく歪む。
「だったら、カムクラのせいにするも何も――」
「大丈夫だって！　そんなのすぐに明らかになるんだから！」
　江ノ島は松田の言葉を遮るように、甲高い声でそう断言した。
「だってさ、カムクラの居場所を知ってるヤツが今どこで何をしているのかは、バッチリわかってるんだしね！」
「評議委員会か……」
「ピンポン、大正解っ！」江ノ島は得意げな顔でふんぞり返る。「あいつらから聞き出せば、カムクラの居場所なんて丸わかりって訳よ！」
「……だけど、あいつらが口を割るとも限らないんじゃないか？」
　すると江ノ島はふんぞり返りながら――急に沈んだ声に変わっていた。
「そうね。限らないわね……」
　途端に、彼女は何もかもに興味をなくしたような完全な無表情になっていく。
「でも、そんなの別に大したことじゃないわよ……あいつらが口を割らなかったらカムクラの居場所が掴めないまま終わるだけのことで、そうなったらアンタの計画も失敗して、アタシも破滅するだけのことだもん。ただそれだけのことだから、別に気に留めるほどのことじゃないわよ……」
　平淡な口調で呟きながら、江ノ島はとぼとぼとした足取りで窓に向かって歩いていく。そして彼女はどこか物憂(ものう)げな視線を窓の外に向けながら、そっと窓に寄り掛かった。
　研究所から見下ろす東地区の中庭に――予備学科生たちのパレードが見える。
「……まるで失敗しても構わないような口ぶりだな」
　そんな江ノ島の背中に向かって、松田が困惑したような声を発すると、

「だって構わないもん」

　彼女は窓の外を見つめたまま、あっけらかんと答えた。

「アタシ的には、そんな雑魚(ざこ)っぽくて意味のない終わり方も絶望的で素敵だなー、なんて思ってたりもするんだよね……」

　その言葉は作られたものではなく、間違いなく彼女の本心から滲み出た言葉だった。だからこそ、やっぱり――

「……お前は異常だよ」

「あっ、ごめんね！　松田くんはそんなの嫌だよね？」

　そこで振り返った江ノ島の顔は――見間違うような無垢(むく)な笑顔だった。

　悪魔の顔の次の瞬間には天使の笑顔――そのどちらも作られたものではない。だからこそ彼女と話しているだけで揺さぶられ続け、激しい疲労感に襲われる。

「そうだよね、大切な彼女の為には負ける訳にいかないもんね」

　すると江ノ島は清純な笑顔のまま、松田に向かって音もなく歩を進めてきた。

「うぷぷ。松田くんてやっぱり純愛の人だよね。愛の為に戦う一途(いちず)な人だよね。きっと『恋は盲目(もうもく)』って言葉も松田くんをモデルにして作られた言葉だと思うよ……あ、バカにしてる訳じゃなくって、むしろ感謝してるんだよ。そんな人と同じ時代を過ごせている運命に、アタシは心の底から感謝しているんだよね」

　そのまま歩み寄ってきた江ノ島は、互いのつま先が触れ合うほどの距離になって――ようやく止まった。

　その距離から、江ノ島は優しく囁くように言う。

「ねぇ、松田くん頑張ってね。期待してるからね。松田くんが目の前の絶望を打ち破って、希望を勝ち取ってくれるのを……アタシは期待してるんだからね」

　そっと囁きながら江ノ島が身を乗り出してくると――二人の顔はほとんど接触せんばかりまで近付いた。

　そこから彼女はさらに身を乗り出してくる。

　そして、次の瞬間には――

　二人は唇を重ね合わせていた。

　松田は逆らえない。困惑しながらも受け入れるしかなかった。

　それは、ねっとりと、長く、絡み合う、暴力的な――くちづけだった。

　しばらく、と一言で終わらせるには長すぎる時間が経過した後――江ノ島はようやくその唇を松田から離した。そして、そのまま何の余韻もなく身を翻すと、無言で研究所の扉へ向かって歩き出す。

「……どこに行くつもりだ？」

松田が口許を拭(ぬぐ)いながら問い掛ける。
「うんっ、キスのお礼にちょっと手伝ってあげよっかなと思って」
そう言って微笑(ほほえ)んだ江ノ島を慌てて止めようと――
――待て。
――これ以上余計なことをするな。
だが口が動かない。
いや、口だけではなく全身が痺れたように動かなくなっていた。
「うぷぷ。松田くんともあろうお方がこんな古典的な手に引っ掛かるなんてね……」
動けなくなった松田を見て、江ノ島は大好きな玩具を手に入れた子供のような、心の底から湧(わ)き出る嬉しそうな笑みになっていた。
「そう、凶器は口紅(くちべに)なのでした！　アタシの口紅に毒物を塗っておいたのでした！　あははっ、毒物だって！　なんて懐かしくて古典的な響きなのかしらね！　あ、でも安心して。命に別状があるアレじゃないからさ！」
江ノ島は動けなくなった松田の周囲をぴょんぴょんと跳ね回りながら、自らの姑息(こそく)な策が成功した喜びを全身で表現していた。
そして彼女は最後に、ぴょんと松田の前に着地すると――
「さてと、じゃあ最後に一つだけ忠告しておいてあげるね！」
いきなりの真顔――ゴング直前のボクサーのような真剣な顔付きになって言った。
「あのね、このシナリオで選択権が与えられているのって松田くんだけなんだよ。だからしっかりと考えて、よーく悩んで、それから選ぶことをお勧めするわよ。松田くんにとって何が希望で何が絶望なのか……ま、それって割り切れるもんでもなくて意外と表裏一体(ひょうりいったい)だったりするんだけどね。とにかく、それをよーく考えて……えっと、考えて……あぁ、駄目だ。なんか眠くなってきちゃったよ。この話に退屈してきちゃったのかな……ま、いいや。とりあえず話はこれくらいにして……さようなら」
一方的に始めた話を一方的に打ち切って――江ノ島はふらふらとした足取りで研究所を後にした。
――待て！
そう叫ぼうとした声も、松田の口から発せられることはなかった。
彼は呆然と立ち尽くしたまま――全身の痺れが消えるのをただじっと待つしかなかった。

そこで私は唐突に目覚めました。
意識が回復した瞬間、何だか清々しい気持ちでいっぱいだったので――
「ああっ、良かった！」
と、思わず声に出していました。
おそらく私は長い間、悪夢にうなされていたに違いありません。だけどそれも終わりです。私は長らく続いた悪夢からようやく解放されて――なんかいませんでした。
どうやら、ここはまだ悪夢の中のようです。
だってそうじゃなければ、どうして私はこんな部屋にいるんですか？
天井や壁や床――四方をコンクリートで囲まれた、窓もドアもない部屋なんて――
ねぇ、どうして私はこんな異常な部屋にいるんですか？
「どこ……ここ……？」
少なくとも私の部屋ではありません。いくら私が忘れっぽくても、自分がこんな不気味な部屋で暮らせる訳がないことくらいはわかります。
「まさか……閉じ込められてるとか……？」
閉じ込められてる――その独り言が冷たい灰色のコンクリートに反響すると、それを聞きつけたように例のあいつがズシンズシンと足を踏み鳴らしてやって来ました。孤独という名の化け物です。
――出口探さないと！
慌てて体を起こしたところで――自分がベッドに寝かされていたことに気付きました。アンティーク調で可愛らしいピンク色のお姫様風天蓋（てんがい）ベッドでした。天蓋ベッドへの憧（あこが）れはすべての女子に共通のものですが――剥き出しのコンクリートの部屋にポツンと置かれたピンクの天蓋ベッドって！
その最低の組み合わせは、むしろ部屋の不気味さをより際立たせているだけでした。しかも、この部屋にはそれ以外の要素がまったく存在していません。コンクリートとピンクの天蓋ベッドだけで完璧に完結していて――家具はもちろん、窓やドアさえも、この部屋には一切存在していませんでした。
現状の確認作業があっさりと終了を告げると、さっそく例の化け物が作業を開始しました。そいつは私の内面にどす黒いタールのような不安と恐怖を流し込み、私の体の自由を奪おうと目論んでいるようです。
「うううううううううううううううううううう……」
ふるふると震える唇から呻（うめ）き声が漏れてきました。次第に部屋の輪郭（りんかく）がぼんやりと歪んでいきます。う

うっ、涙が。でも泣いちゃ駄目。泣いちゃ駄目だって。けれど、必死で堪えようとする私の意思とは無関係にたっぷり溜まった涙が遂に零れ落ちようと、おはようございますご主人様。

「えっ？」

　はっと気付くと——壁際にメイド服姿の女の子らしき物体が立っていました。

「おはようございます、ご主人様！」

　声からして、やはり女の子のようですが——そう断言できない理由は、メイド服を着た彼女の顔にありました。いえ、顔そのものと言うより、彼女が被っている妙な被り物のせいです。その被り物のせいで、彼女の顔の判別が付かなかったのです。

　それは、気持ち悪くて不気味なクマの被り物でした。

　右半分は白くて可愛いクマ。

　左半分は黒くて邪悪なクマ。

　そんな被り物をしたメイド服姿の女子が、私に向かって元気よく発声しています。



「おはようございます。ご主人様！　お目覚めの紅茶をお持ちしましたっ！」
「えっと、あの……私はご主人様じゃないと思うけど……」
　彼女は私の意見なんて耳に入っていないとばかりに歩み寄ってくると、手にした銀色のトレイをグイと差し出してきました。トレイの上には花柄の陶器のティーカップが置いてありました。そこから立ち昇る湯気はもう消えかけています。
「あ、ありがとう……」
　寝起きの渇いた咽喉が激しく水分を欲していたせいで、すっかり警戒心が薄れてしまった私は、ティーカップを手にすると、そのまま一気に紅茶を飲み干しました。
　ぬるい！　まずい！　それに薄い！
　見事な逆三拍子（さんびょうし）です。これは紅茶のぬるま湯割りでした。
　微妙な顔を隠しきれない私がティーカップをトレイに戻すと、クマのメイドさんは「では失礼します」と、踵（きびす）を返して、そのままどこかに歩き始めました。
「待って！　失礼するってどこに？」
　私は慌てて呼び止めます。
「ん？　何か仰（おっしゃ）りましたか？」
　聞き返しながらクマのメイドさんが目の前の壁をバンと叩くと——ちょうど一畳ほどの壁が忍者屋敷のようにぐるりと回転して開きました。
「え、隠し扉……？」
「えへっ！　この施設をお造りになったご主人様の遊び心溢れる設計なのです！」
「そ、そんな遊び心はいいから私を出してよっ！」
　切羽詰（せっぱつ）まっていた私が、いきなり怒鳴り声を上げると——
「はい？」
　と、クマの被り物が大きく傾ぎました。
「別に……出たいなら出れば良いじゃないですか」
「は？」今度は私の頭が傾ぎます。「出たければ出ろって……何なの、その雑な監禁……」
「監禁だって！」
　驚きの声がコンクリートに反響しました。
「か、監禁って……そんな……いきなり監禁だなんて……」
　なぜだか、クマのメイドさんは肩を揺らして笑っています。
「ちなみに、笑っている訳ではありませんよ」

「あ、違うんだ……」
「むしろ悔（くや）しいのです」と、彼女はさらに肩を震わせながら、「あなたが面白い方なので悔しいのです。私には全然ギャグのセンスがありません。このままでは、いつかモノクマを任せてもらうという私の夢はいつまでたっても叶（かな）いませんよ。しょぼーん……」
　クマのメイドさんはガックリとうな垂れてしまいました。
「よ、よくわかんないけどさ……とりあえず、いったんここから出ようよ。ね？」
　そう急かしながら隠し扉から体を出したところで——ふと部屋の中に視線を戻すと、天蓋ベッドの脇に私の物らしきリュックを発見。
「……あ、ごめん。ちょっと待って！」
　慌てて駆け寄った私がとりあえずリュックを背負ってみると、思いのほかのフィット感だったので——これは間違いなく私の物だと確信したところで、「ほら、早く出ようよ！」と、私はクマのメイドさんを押し退ける形でコンクリートの部屋を後にしました。
　部屋を出た私を待ち受けていたのは——奇妙な光景でした。
　そこはホールのような広いスペースで、しかも、さっきの部屋と同じように天井や壁や床が剝き出しのコンクリートで囲まれた空間でした。その上、やたらと天井が低いせいで、広さの割には閉塞感（へいそくかん）があり、その低い天井から吊るされた蛍光灯の光があたりのコンクリートに反射されて、さらに寒々しい光景を作り上げていました。
　そんな空間に——五十脚ほどはあるであろう学習机が等間隔に並べられています。
　それらの机のすべてには人が着席していて、男女は様々ですが、全員同じ学生服を着こんでいました。しかも、そんな彼らの頭には——やっぱりクマの被り物。
　右半分は白くて可愛いクマ。
　左半分は黒くて邪悪なクマ。
「ねぇ……あのクマって流行（はや）ってるの……？」
　隣で同じ被り物をしているメイド服姿の彼女に問い掛けてみました。
「あれはクマではなく、モノクマですよ」
　——モノクマ？
　名前はどうでもいいとして——そんな不気味で奇妙なクマの被り物をした学生服姿の男女が、広大なスペースにびっしりと並べられた学習机に座っている様子は——奇妙な光景としか言い表しようがありませんでした。
　しかも、そのモノクマヘッズとでも言うべき彼らが着席している学習机の上には、モニターがどんと置か

れていて、彼らは揃ってそのモニターを食い入るように見つめていました。私の位置から見えるのはモニターの背面部分だけで、そこでどんな映像が流されているのかはわかりませんが――よっぽど夢中になる何かのようです。身じろぎ一つせず、じっとモニターに見入る彼らは、マネキンのように生気がなくって、私はまるで生者のいない墓場に紛れ込んだような気分になっていました。
「……この人たちって何なの？」
　恐る恐る尋ねると、モノクマメイドさんは深刻そうなトーンで答えます。
「私たちはミュータントなのです。みんな迫害され、そしてここに閉じ込められ――」
「てるの？」
「たいの！」
「むしろ希望？」
「だってほら……ミュータントとか優れた能力者って、おしなべて迫害されるものじゃないですか。逆に迫害されないってことは所詮その程度の能力ってことになるじゃないですか。だから私たちはむしろ迫害されたいんですよね」
　彼女の言ってることがさっぱり理解できなかったので――とりあえず質問を変えてみました。
「……ところでさ、ここってどこなのかな？」
「待ってました！」
　と、実際声に出して、誇らしげに答えるモノクマメイドさん。
「もちろん秘密結社ですよ！」
「は？　ひ、秘密結社……？」
　その言葉があまりに幼稚であまりに予想外だったので、逆に疑ってしまいました。それは何かのメタファーなのかもしれない――と。けれど、いくら考えたところで何も浮かばないので、やっぱりそのままのストレートな意味だったようです。
　――秘密結社！　なんてくだらないんでしょう！
「ミュータントに秘密結社って……滅茶苦茶だよ」
「えへへっ、滅茶苦茶カッコイイでしょう！　そう、私たちはミュータントなのです予備学科の！　そしてここは秘密結社なのです予備学科の！」
「……予備学科？」
　それは久しぶりに聞いたちゃんと現実味のある言葉でした。だからこそ、そこに手掛かりがありそうな気がした私は、リュックから取り出した『音無涼子の記憶ノート』で、すぐに『予備学科』に関する記憶を探しました。

　そして見つけました。思い出しました。
　そう、予備学科とは——
　よくわかりません。
　よくわからない存在としかノートにも書いてありませんでした。
　仕方ないので、直接聞いてみるしかありません。
「……えっと、予備学科の人たちっていつもこんなことしてるの？」
「いつもではありませんよ。そんなに堂々としていたら秘密結社っぽくないじゃないですか。秘密結社は秘密結社らしく、秘密裏に動かなければいけませんからね！」
　よくわからない予備学科らしく——よくわからない論理です。
「でも、こんな堂々とした施設を造っておいて……秘密も何もないんじゃない？」
「いきなり変な言いがかりをつけるのはやめてください！」
　急にモノクマメイドさんは声を荒らげました。
「どこのクレーマーですか！　ここは西地区の地下にこっそりと、そしてひっそりと造られた秘密結社ですよ？」
「……え？　西地区？」
「秘密結社には打ってつけですよね。予備学科がある西地区には教職員たちはほとんど出入りしませんからね。しかも大して活動もしていない部活ばかりが集まるクラブハウスの、さらに廃(すた)れたミステリー研究会なんて部室の地下となれば……尚更ですよね！」
　西地区の、
　廃れたクラブハウスの、
　さらに廃れたミステリー研究会の、
　その地下。
　——それが、この場所？
　私は改めてあたりを見回してみました。閉塞感こそあるもののちょっとしたホールの程度の広さがあり、しかもホールの両側の壁に沿って扉がいくつも並んでいるので、どうやらその奥には小部屋も存在するようです。さらに、ホールを挟んだ私の対角線上には、通路の入り口まで見えました。そこから伸びているのはかなり長い通路らしく、奥がまるで見えません。
「……こんな広い施設がそんな場所の地下に？」
「信じられませんか？」モノクマメイドさんが含み笑いで返します。「誰もが信じられないようなことを簡単にする……だからこそ絶望なんじゃないですか」

「絶望……」
　それは口にするだけで胸の奥がそわそわするような――何だか嫌な響きの言葉でした。
　私はその言葉を振り払うように、「とっ、とにかくさ！」と、頭に浮かんだ新しい質問を口にします。
「あなたたちが秘密結社なのはわかったし、ここが秘密結社なのもわかったけど……そもそも、あなたたちはどうして秘密結社なんてやってるの……？」
　すると、モノクマメイドさんは思いのほかあっさりと答えてくれました。
「パレードですよ」
　私は慌ただしくノートをめくりながら、「えっと、パレードって……希望ヶ峰学園の体制に不満を抱く予備学科生たちのデモ活動……だったよね？」
「デモなんかではありませんよ。あれは革命ですから」
　と、彼女はきっぱりと力強く断言しました。
「……え？」
「うぷぷっ。ワクワクしちゃいますよね！　あれはこの希望ヶ峰学園を、そして世界を変える革命なのですよ。ドキドキしちゃいますよね！」
　――革命って？
　――この人は何を言ってるの？
「ですから、その革命を成就する為にも、まずはこの学園のふざけた幻想をメタンコに破壊しまくってやらないといけないのです。この学園の提唱する希望がどれだけ身勝手で、そして周囲を苦しめているのかを叩き付けてやらなければならないのです。それにはやはり、この学園の象徴である《超高校級の希望》をぶっ潰さないことには――」
「あ、ちょっと待って！」
　私はヒートアップしているモノクマメイドさんを慌てて止めました。どうしても聞き逃してはいけない言葉があったような気がしたのです。
「超高校級の希望……って何？」
　するとモノクマメイドさんは、「ほほう」と、感嘆の声を上げ、「まるで私を試そうとしているようなお言葉ですね。いいでしょう、そつなく答えて見せましょう！」
　と言うか――どうして彼女はベラベラとこんな大事な話をしてくれるのでしょうか。だって、秘密結社って秘密守らなくていいんですか？
　でも、余計な突っ込みをして話して貰えなくなるより――今は彼女の話を黙って聞いておいた方が良さそうです。

「えー、超高校級の希望とは、すべての才能を凌駕(りょうが)する絶対的才能であり、究極の天才であり、言わば人類の進化型であり最終形なのです！　そう、それこそが超高校級の希望なのです。ジャジャーン、完璧なる説明ですね！」
「あ、ごめん……さっぱりなんだけど……」
「えっ？　マジですかっ？」
　モノクマメイドさんはショックを受けたようにのけぞっています。
「え、えっと……じゃあですね……」
　と、彼女は腕組みしながら、しばらく唸った後で――
「整いました！」
　整ったようです！
「そもそも、超高校級の希望における《希望》の意味は、普段使われる意味での《希望》とは少し違うのです。『人類の希望と呼べるほど優れた才能』を指して、《希望》と呼んでいる訳ですね。つまり、《超高校級の希望》というのは、それほど優れた才能の持ち主ということなのです」
「要は、もの凄い天才ってこと？」
「しかも、全方位の天才ですね」
「そんなの完璧超人じゃん……なんだか、ずるくない？」
「まぁ、眉唾(まゆつば)モンですけどね！」
　モノクマメイドさんは途端に吐き捨てるような口調に変わっていました。
「どうせ、そんな設定なんて幻想に決まってますよ。それなのに、《超高校級の希望》とか、希望ヶ峰学園の象徴的存在とか持ち上げられて、あり得ないくらいのクソVIP待遇まで受けて……あぁ、確かにずるいですよね！」
「……何か怒ってない？」
「怒ってるに決まってるじゃないですかぁあっ！」
　彼女はすっかり全身から怒気を漲(みなぎ)らせていました。
「希望ヶ峰学園は《超高校級の希望》の研究と育成に総力を挙げて取り組んでいて、そこにかなりの費用を割(さ)いているらしいじゃないですか。しかも学園はそのことを生徒にすら内緒にしてるんですよ！　極秘プロジェクトだか何だか知りませんけど、ふざけてますよね。ぶっちゃけ、ふざけまくってますよね！　そもそも、その研究費だって私たち予備学科からせしめとった金なんですよ。この学園は私たちから大金と希望を奪っておいて、それをすべて《超高校級の希望》の研究費に充(あ)てているんですよ。そんなくだらない幻想の為に私たちを踏み台にするなんて……それがこの学園の言う希望なんですか？　優れた才

能の為なら私たちなんかはどうだっていいって言うんですか？　才能がなければ希望を抱く価値もありませんかっ？　どうなんですか？　おいっ、どうなんですかって！」
「ちょ、ちょっと落ち着いて――」
　くれませんでした。
「ふざけんなっ！　何が希望だっ！」
　彼女はもう私の言葉に耳すら貸してくれません。
「才能に選ばれた人間だけが偉いのかよっ？　持ってる人間だけが偉いのかよっ？　ふざけんなっ！　そんなモンはただの選民思想だろ！　天上人の為なら地上の民など皆殺しにしてもいいってか？　そうなんかぁ？　そうなんだろ、おいっ！」
　もはや、その罵倒を止める術は私にはありませんでした。
「クソだっ！　そんな希望なんてクソまみれにしてやるよ！　この学園ごとすべての希望をクソまみれのクソ祭りにしてやるってんだ！　クソだっ、クソだっ、クソだぁあっ！」
　彼女の言葉にはクソと憎悪しかありません。その憎悪も生半可じゃない黒々とした毒のような憎悪です。もはや、それは《超高校級の希望》なる存在に対してだけではなく、希望ヶ峰学園自体にも、さらには彼らが掲げる《希望》という概念にすら向けられているようでした――などとノートに記入していく内に、ふと私の手が止まりました。
　――あれ？
　途端に我に返りました。
　そもそも――と言うべき根本的な記憶をノートから発見したのです。
　そもそも私は希望ヶ峰学園を休学中らしいではありませんか。ということは、超高校級の希望だの、パレードだの、予備学科だの、希望ヶ峰学園だの言ったところで――
　――あれ、関係ないじゃん。
　――音無涼子とは丸っきり関係ないじゃん。
「何だ……関係ないんだ……」
　私は唇を結んだまま誰にも聞こえないような声で呟きました。すると、その言葉は乾いた草木が水分を吸収するように、私の中へと浸透していきます。
「……ど、どうかなさいましたか？」
　肩で息をするモノクマメイドさんが私の顔を覗き込んできました。ようやく彼女も落ち着いてきたみたいですが、そもそも彼女だって――
「ううん。何でもない」

　そうです。この状況の何もかもが私とは関係ないのです。

　だから私は——関係ないこの場所からさっさと逃げることにしました。

「……ねぇ、ところでトイレってどこかな？　何だかもよおしてきちゃった」

「え？　大ですか小ですか？」

「……行く前に申告する制度なの？」

「いや、大の個室が一つしかないものでして他の人が使ってたら大惨事！　ダイハード！　ダイの大冒険！　ダイ・イン・クライズ！」

「ま、いいや！　とにかくトイレ行ってくるねっ！」

　とりあえず私は逃げるように走り出しました。と言うか、実際に逃げるつもりで走り出したのです。これ以上、私と一切関係ないこの場所にいても何の意味もありませんから！

「あ、通路の奥ですよ。地図持っていかなくて平気ですか？」

　走り出した私の背中に、モノクマメイドさんの声が掛けられました。

　——通路の奥？

　それを聞いた私の体は、ホールの奥に見える通路へと吸い寄せられていきます。

　私は学習机に座るモノクマヘッズたちの間をすり抜けながら、ホールを横断していきました。けれど、その間も彼らは私に見向きもしません。じっと目の前のモニターに見入っているだけでした。

　——だから、何にそんなに夢中になってるの？

　関係ないとわかっているものの、いったん熱せられた好奇心は私の冷静さを鈍（にぶ）らせるには充分で——そのせいで私はつい振り返ってしまいました。

「あれ……？」

　けれど真っ暗でした。どのモニターも真っ暗のまま何も映していません。

「また……すぐに始まります……から……」

　私の目の前に座るモノクマヘッズさんが、覇気（はき）のない声で言いました。

「さっき第一部が終わったところで……これから第二部の開始なので……」

　と、その時でした。

　たどたどしく語られる言葉を遮るように——モニターが一斉に光を放ちました。

『ザ・希望ヶ峰学園プレゼンツ——

　若者よ、己（おのれ）の《希望》を勝ち取るべし！

　自分が誰よりも優れた才能だと証明すべし！

《自らの希望》の為に誰よりも多く殺すべし！
コロシアイ期末試験スタート！（第二部）』

今時、地方のテレビ局でも使わないような、センスの欠片もないけばけばしいテロップが、画面一杯に映し出されていました。
──何これ？
一瞬そんな疑問が頭をよぎりましたが、それも本当に一瞬だけでした。
すぐに画面が切り替わると、次に映し出されたのは──
赤い色。
まるで赤いセロファンがモニター全体を覆い尽くしたかのような、真っ赤な色でした。
よく見ると──その赤の中で何かが蠢いています。
どうやら人のようです。
床も壁も真っ赤に染まった赤い部屋の中で、人相も体格もわからないほど全身を真っ赤に染めた人間が、地中から出てきたばかりの芋虫のように床に這いつくばって蠢いていました。
カメラはその様子を俯瞰の位置から捉えています。初め、私はそれを前衛的な舞踏か難解なビデオアートの類かと思っていましたが──すぐに、そうではないとわかりました。
その直後、フラフラと酔っ払いのような足取りの人物が画面にフレームインしてきました。彼が着ている服はその面積のほとんどが血で汚れていましたが──それでも、それが希望ヶ峰学園の制服であるということだけはわかりました。
彼は手にしたパイプ椅子をずるずると引きずりながら、床に這いつくばる人間の頭上に立つと、そこでパイプ椅子を持ち替え、そのまま大きく振り上げました。
そして男の脳天目掛けて一気に振り下ろしました──って、は？
何が起こったのか理解できないまま、呆然とモニターを眺め続ける私の前で──
パイプ椅子が何度も振り下ろされていきます。
這いつくばった男目掛けて執拗に振り下ろされ続けます。
そこで唐突にアングルが変わり、パイプ椅子を振り下ろしている男の顔が大写しになりました。彼は顔全体でしきりに何かを叫んでいるようでした。
「あ、音……上げますね……」
前に座ったモノクマヘッズがボリュームを上げていくと──モニター越しの男から発せられる叫び声も大きくなっていきます。それは声を上げている彼の方が被害者なのではと思えるほどの悲痛な叫び声でし

た。
「……し、死に、たくっ、ないっ！」
　その叫び声の向こうでは、何か別の音も鳴っています。
　ぐちゃ。ゴリュ――
　軟骨とヨーグルトを口の中で一緒くたに咀嚼しているような不快な音が、男がパイプ椅子を振り下ろす度に鳴り響いていました。
「おっ、俺はっ！」びたびちゃ。「……悪くないっ！」ゴリゴリュ。「仕方ない、んだっ！」びちゃゴリュ。「だ、だからっ！」ぐちゃゴリ。「悪く、ないっ！」びちゃ――
　と、そこでパイプ椅子がひしゃげて壊れました。
　けれど這いつくばった男はそれより前にとっくに壊れていました。彼の頭は原形をとどめておらず、落としたホールトマトのように潰れて、周囲に血液と脳漿（のうしょう）の混ざったものを撒き散らしています。
　私は恐怖を感じる段階にすらありません。モニターの向こうで頭を割って脳みそを垂れ流している死体を、人間と結び付けることが、私にはどうしてもできなかったのです。
　だから――空っぽの頭で呆然とモニターを見つめているだけでした。
「……もっ、もっ、もういい、だろ」
　モニターの中の男がブルブルと震えながら呟きました。
「も、もう二人も殺（や）って……俺が、い、一番で、いいじゃ――」
　そこで男の言葉を遮ったのは――ぶ厚いガラスが割れる音でした。
　いつの間にか彼の背後に立った別の男が、手にしたビンでその顔面に不意の一撃を食らわせたのです。
「ああ……あぁぁぁああぁあぁあぁぁああああ！」
　両手で顔を押さえながら、手負いの獣のような唸り声を上げた彼は、そのまま急発進すると、転げ回るようにして部屋から飛び出していきました。
「まっ……待てっ、待ってっ！」
　不意打ちを食らわせた男がおぼつかない足取りでそれを追ったところで――再び画面が切り替わります。
　次に映し出されたのは廊下でした。
　顔面を真っ赤に染めた男が蛇行（だこう）しながら廊下を走っていました。彼はガラスの破片が突き刺さった両目から赤い鮮血を撒き散らしながら、
「だっ、だっ、だずげでえええええええっ！」

と、濁った声で叫んでいます。
　大きく開かれた口はまるで笑っているようでしたが、もちろんそうではありません。頬がザックリと大きく裂けたせいで口が閉じなくなっているだけでした。
　そんな彼の進行方向に——震える少女が立っていました。
　薄暗い廊下にポツンと立つ少女の手には、分厚い中華包丁が握り締められていました。それは見る者にもの恐ろしさを感じさせる異様な佇まいでしたが——走っている男にその姿は見えていません。彼は悲痛な叫び声を上げながら、そのまま少女へと向かって突っ込んでいきました。
　すると、待ち構える彼女は震えながら中華包丁を振り上げ——それをタイミング良く、彼の頭に振り下ろしました。
　——グチャリ。
　頭蓋骨に中華包丁がめり込んだ衝撃で、彼の両目からガラス片の刺さった眼球が飛び出しました。それでも男はそのまま数歩走り——そこでようやく倒れました。
　少女は全身をガタガタと激しく震わせながら、それをじっと凝視していました。
「わ、私だだだって……死にたくなななないい……仕方ないないじゃない……」
　震え切った声はボリューム調整まで狂ったような、大きな独り言になっていました。
　と、そんな彼女の後方には——鉄パイプを片手に忍び足で近寄ってくる別の高校生の姿が見えました。
　そこで、私はようやく目を逸らします。
　趣味の悪い映画——にしたって趣味が悪すぎです。これも予備学科の人たちが作った映像なのでしょうか？　だとしたら気味が悪いです。そして気味が悪すぎるほど——リアルな迫力に溢れていました。
　そこで殺されていく彼らの《死》は、よくある《冷たい》というイメージから連想される空想の《死》ではありません。死んでいく彼らが撒き散らす血液は、生きている時の温かさとは桁違いの熱を放出し、カメラのレンズを曇らせるほどの湿気と蒸し暑さを生み出していました。それは火傷しそうなほどの熱さを伴った死でした。
　でも、一体どうしてこんなものを——
「くだらないですね……」
　不意に、目の前のモノクマヘッズがモニターを凝視したまま呟きました。
「……これが希望ですか？　こんなものが希望なんですか？」
　彼は心底くだらなそうに呟きました。何もかもに絶望し切っているように呟きました。
「結局は誰もが自分のことだけ考える……だから殺し合う……ここまでのことをしておいてまだ希望だな

んて言うんですか……まだ守ろうとするんですか……僕らのことは見捨てた癖に……本当にくだらないですね……」

　彼は自らの言葉に苛立っているようでした。喋れば喋るほどその苛立ちが増していくように、いつの間にか肩で息を始めています。

「……ねぇ、あなたたちはずっとこんなの見てるの？」

「ずっとではありません。たった五千八百十八回くらいですから……」

　たった五千八百十八回――って、は？

　ねっとりとした汗が私の背中を流れていきました。いくら作り物の映像と言っても、こんな物をそんなに繰り返し見ていたら頭がどうにかなってしまいます。実際、一回見ただけの私でさえ、もしかしたらこれは現実なのかもと思い込みそうになっているほどです。

　――やっぱり関わるべきではありません。

　――今すぐここから逃げ出さないと！

　と、視線を上げたところで目が合いました。

　ホールの反対側に立ったモノクマメイドさんが私をじっと見たまま、胸元で小さく手を振っていました。まるで私が逃げるのを促しているようです。

　背筋から這い上がってくるような悪寒に襲われた私は、その視線と、脳髄（のうずい）にへばり付いている映像から逃れるように、ホールの奥の通路へと飛び込んでいました。

　薄暗い通路に私の足音が反響しています。その通路もまた四方をコンクリートに囲まれていました。

　コンクリート、コンクリート、コンクリート、コンクリート！

　コンクリートに囲まれたその通路は、大人同士がやっとすれ違える程度の幅しかなく、圧倒的な閉鎖感に満ち溢れています。唯一の明かりである足元に埋め込まれた間接照明も、走る私の影を不気味に歪ませ、その空間の異様さに拍車を掛けているだけでした。

　そんな通路を走っている内に、いつの間にか私はその通路を走っている理由を忘れてしまい、代わりに新たな不安に襲われていました。

　このままエンドレスにこの通路を走り続けるだけで私の一生は終わってしまうのかもしれない――そんな不安に駆り立てられた私は、この通路自体から逃れたい一心でとにかく走り続けていきました。

　と、その足が急停止します。

　私の正面にコンクリートの壁が立ち塞（ふさ）がったのです。どうやら行き止まりのようです。右も左も剥き出しのコンクリートの壁でした。

　ただ、その正面のコンクリートの壁には――小さな鉄製の扉が打ち付けられていました。

――ひょっとして出口とか？

そんな期待を胸に、扉に手を伸ばしました。鍵などは掛かっておらず、扉はあっさりと開いてくれました。私は溢れんばかりの期待を込めて扉の奥を覗き込みます。

そこにあったのは既視感（きしかん）でした。

またもやコンクリート――壁も床も天井もコンクリートで囲まれた小部屋です。けれど、そのコンクリートの部屋の奥には、さらに異様な光景がありました。

二つ並んだ鉄格子（てつごうし）。

――牢屋（ろうや）？

ゆっくりと歩を進めた私は、まず右側の鉄格子の前に立ちました。鉄格子の向こうには暗闇が黒い霧のように立ち込めています。ひんやりと冷たく禍々（まがまが）しい空気が、その暗闇の中から流れ出していました。

恐る恐るその鉄格子の向こうを覗き込んでみた――その時でした。

「……誰だ？」

突然、暗闇の中から聞こえた声に私の心臓が跳ね上がります。

「ひっ！」

「誰か……そこにいるな？」

しゃがれた老人の声でした。何かをひどく警戒しているような声です。

「そ、そ、そちらは……ど、ど、ど、どちら様ですか……？」

私が震えながら聞き返すと――鉄格子の奥の暗闇から人のシルエットが浮かび上がってきました。誰かが椅子に腰掛けたまま眠り込んだようにうな垂れています。

「あ、あの……気分でも悪いんですか？」

しかし、その人物は無反応でした。

あれ――と、首を傾げかけたその時です。

「……そっちはもう駄目だろ」

それは、私が覗き込んでいる牢屋からではなく、その隣の牢屋から上がった声でした。

「昨日から何の返事もよこさない……もう駄目なんだろ？」

――駄目？

――駄目って何が？

私は改めて正面の牢屋に視線を戻しました。そこでようやく目が慣れてきたのか、暗闇の中でうな垂れていた人物の顔が徐々に鮮明になっていきました。

生気の失われた顔でした。

だらしなく開いた口から赤黒い舌が驚異的な長さで垂れ落ちています。

さすがに一目でわかりました――眠っているのではなく、死んでいるのだと。

「ひいいっ！」

悲鳴を上げる私は、ひっくり返りながら後ずさりをしています。

目の前の死体には、作り物という可能性すら思い付けないほど圧倒的な現実感がありました。私はこの状況の何もかもがすっかり恐ろしくなっていました。痛みすら感じるほどの寒気が私の全身を駆け回っています。

「死んで……いるんだろう？」

死んでいる――さらに強い寒気が私から呼吸を奪います。慌てて空気を吸い込むと激しい嗚咽(おえつ)がこみ上げてきました。

すると、そこで老人の声が驚いたようなものに変わりました。

「どうしてお前が慌てているんだ？　お前は……あの連中の仲間じゃないのか……？」

「あ、あ、あの連中って……？」

震えながら『音無涼子の記憶ノート』をめくったところで――すぐ直前に会っていた予備学科の人たちのことを思い出しました。

「ち、違いますっ！　あんな変な被り物した人たちと一緒にしないでくださいよっ！」

「じゃあ……お前は被ってないのか？」

妙な質問だな、と思いました。

「そ、そんなの……見ればわかるじゃないですか……」

言いながら立ち上がった私は、まるで生まれたての小鹿(こじか)のようにヨロヨロとした足取りでした。その足取りのまま老人の声が聞こえる隣の牢屋の前に移動すると――そこにも椅子に腰掛けたままうな垂れている男の姿が見えました。

「見えないんだよ」

「……えっ？」

そこで老人が顔を上げました。

その皺(しわ)だらけの顔にあるはずの両目は――暗闇に沈んだままでした。

それは影ではありません。ミシンで細かく縫いつけたような曲線縫いの黒い糸が滲み出た血と絡まり合い、真っ黒い塊(かたまり)となって男の瞼を塞いでいたのです。

「……うっ！」

激しい吐き気が喉元まで一気にせり上がってきて、私は慌てて口許を押さえます。

「これを見て驚くってことは……やっぱり違うのか……」

　そこで老人はガラリと声の雰囲気を変えると――懇願するように言いました。

「……だ、だったら助けてくれないか？　私をここから逃がしてくれ！　い、いくらでも礼はする。だ、だから……頼む！」

　必死に懇願する彼の顔は縫い潰された目許のせいでほとんど表情を作れません。そのせいで、何だかちぐはぐな懇願になっていました。

「な、何をされた……んですか？」

　私の口から嗚咽交じりに出てきたのは、そんな根本的な疑問でした。

「あ、あいつらは……私たちを別々の牢屋に閉じ込めて……先に口を割った方だけ殺さないでやるって……そ、そう言ってきたんだ……」

「先に割った方だけ……殺さない……？」

「さ、最初は励（はげ）まし合って頑張っていたんだ……だが頑張って堪えれば堪えるほど……こ、怖くなっていった……もし先に裏切られたらと考えると……仕方なかったんだ……死にたくなかったんだ……だ、だから……だから…………」

　そして、老人は一際沈んだ声で言いました。

「だから……私が先に口を割った」

　ふと、もう片方の鉄格子に視線を移しました。その奥にあるはずの死体の形相が脳裏をよぎります。こういう記憶に限ってすぐに忘れないのはどうしてでしょう。

「なぁ、取引しないか……？」

「え？」

　また懇願するような声に戻った老人が、いきなりそんなことを言い出しました。

「私の知っていることならすべて話そう……お前もそれを聞きに来たんだろう？　だから、その代わり私をここから逃がしてくれ……それでどうだ？」

「……わ、わかりました」

　半ば反射的にそう答えていました。けれど、答えた瞬間にはもう後悔しています。

　――やっぱり、関わらない方がいいんじゃないかな。

　それに逃がすといってもその方法さえわからないのに――と、後悔に後悔を重ねている私をよそに――

　両目を潰された老人の話は、もうとっくに始まっていました。

「予備学科の連中が私から聞き出そうとしたのは……ある人物の居場所についてだ。その人物は……カムクライズルという名前を与えられている……」

とりあえず私は——老人の話を聞くことにしました。

どっちにしろ今考えてもどうしようもないことなので、話を聞いた後で考えることにしたのです。

「どこから嗅(か)ぎ付けたのかはわからないが、連中は我々がカムクラを匿(かくま)っているという事実を知ったんだ。そして我々からその居場所を聞き出そうとした……力ずくでな」

力ずく——その残酷な響きに私は思わず奥歯を噛み締めます。

「あいつらの目的は……この学園を潰すことだ。連中はカムクライズルという存在を使って……この希望ヶ峰学園を根底から覆そうとしているんだ」

「つ、潰すって！」

私は思わず声を上げてしまいました。

「そ、そんなの……困るんだけど……」

だって希望ヶ峰学園が潰れたら、松田くんとも会えなくなってしまいます。

「だったら……何とかして予備学科を止める方法を探してくれ……」

「な、何とかって……」

「このまま予備学科の連中にカムクラを渡せば……間違いなく希望ヶ峰学園は終わってしまうんだ」

「そ、そう言われても……」

「旧校舎だ……カムクライズルはそこにいる」

「ちょ、ちょっと待ってよ……」

噛み合わない会話の最後に発せられた言葉を、慌てて『音無涼子の記憶ノート』に書き込みました。旧校舎——と。

その時でした。

——あれ？

いきなりの眩暈(めまい)に襲われて、思わず足元がふらつきます。

——何これ？

「少し前から旧校舎にはかなりの数の警備員を配備していたんだ。表向きは取り壊し前で危険だからという理由だったが……実際は違う。あそこにカムクライズルを匿っているからなんだ」

朦朧(もうろう)としながらその話を聞いていると——またでした。

さっきのとは比べものにならないほどの眩暈です。それは視界が歪むほど強烈で、よろけた私は目の前の鉄格子に手を突いてしまいました。

「私が話せるのはここまでだ……」

目の前にいるはずの老人の声が——どこか遠くから聞こえているようでした。

「私が知ってることは全部話した……そろそろ解放してくれないか……」
　ただでさえ不明瞭（ふめいりょう）な声を遮るように、痛いくらいに脈打つ心臓の鼓動が私の耳の奥でけたたましく鳴り響いています。
「おい、どうしたんだ？　なぁ、早く頼むよ……さっきから目の周りが熱くて痒くて堪らなくて……医者に行きたいんだよ……おい、聞いてるのかっ？」
　聞こえませんでした。
　高まっていく鼓動が、すべての音をすっかり遮断し、もう何も聞こえません。
　何も聞こえないはずなのに――
　ただ、その不気味な笑い声だけが聞こえていました。
「……うぷぷ」
　と同時に、背後に気配が現れます。
　それは私のすぐ後ろから首筋に生温かい息を吹きかけてくるような嫌な気配でした。
「……うぷぷぷぷ」
　何かを察知した私の体がブルブルと震え始めます。まるで金縛りにあったように声も出せません。そんな私を嘲（あざけ）るように――笑い声はさらに勢いを増していきました。
「うぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷ」
「な、何がおかしい……っ！」
　怯（おび）えたように叫ぶ老人すらも嘲るように――声はますます勢いを増していきます。
「うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ」
「な、何を笑っているっ！　何がおかしいんだっ！」
　老人は狼狽（ろうばい）したように怒鳴り散らしていました。その目に何かを捉えることのできない彼は、あたりに向かって無闇にかすれた怒声を上げています。
「だ、黙れっ！　黙れっ！　黙れっ！」
　すると――笑い声が止みました。
「……うぷぷ、なかなかいい顔するじゃん」
　そんな声が老人に向かって放たれます。
「でもさ、『やっぱりオマエは逃げられないよ』って言ったら……もっと絶望的な顔になってくれるんだよね？」
「……なっ、なっななっ！」
「うぷぷぷっ！」

引き攣（つ）った老人の顔が瞬間的に白くなったのを見て——その反応がおかしくて堪らないように、また笑い声が響きました。

「うぷぷぷぷぷ。うぷぷぷぷぷ。うぷぷぷぷぷ。うぷぷぷぷぷ。うぷぷぷぷぷ。うぷぷぷぷぷ。うぷぷぷぷぷ。うぷぷぷぷぷ。うぷぷぷぷぷ」

その笑い声は周囲のコンクリートに反響しながら部屋中を縦横無尽（じゅうおうむじん）に飛び交い——魂の抜けた亡骸（なきがら）のように立ち尽くす私の周りをぐるぐると回っていました。

全身から活力を奪われた私は微動だにできません。声の主を確かめることはおろか、耳を塞ぐことすらできませんでした。

そのまま私の意識は収束し、周囲から音や光や色が一斉に奪われていきます。

目の前の光景が水面に垂らした絵の具のようにぐにゃぐにゃと歪んでいき、鉄格子とその向こうの老人の顔も、その境界が曖昧（あいまい）になっていきました。

——何これ？

歪んでいく世界を目の当たりにしながら、私は呟きます。

——何なのこれ？

やがて世界はドロドロに溶けていき、それぞれ別の色で固まった後——再びぐにゃぐにゃと混ざり合いながら、別の世界へと変わっていきました。

それは流れる川に映し出された映像のように、ゆらゆらと揺れながら私の目の前を通り過ぎていきます。

私の後ろで大きく開かれる扉——

そこから雪崩（なだ）れ込んでくるモノクマヘッズ——

鉄格子の向こうから響く悲鳴——

私の足元に広がる真っ赤な水たまり——

無我夢中で逃げ出す私——

そして暗闇。

次に目が覚めたのは——白くて明るい部屋の中でした。

　私は何だか生まれ変わったような気分です。
　生まれ変わって新しい音無涼子になったような爽やかな気分の中で目覚めた私は、体を伸ばしながらゆっくりとベッドから起き上がります。
　ふと窓に目をやると、カーテンの隙間から差す爽やかな太陽の光が、白い室内を明るく照らしていました——この日差しの感じは朝日のようです。
　どうやら、いつの間にか寝てしまったみたいですが、忘れっぽい私はいつだって寝た時のことを忘れているので——
「……あっ」
　その瞬間、目の奥に光を感じ——脳裏にある映像が浮かび上がりました。
　地下施設。
　予備学科。
　モノクマ。
　突然のフラッシュバック——それは私にとっては未知の体験でした。
　これって、もしかして——私の記憶？
　直後、脳髄にむず痒い感覚が走ります。
　何かが思い出せそうなのに思い出せない——そんな感覚だと直感的に理解するものの、一方でそんな感覚を抱いた自分に困惑していました。
　——何これ？　私どうなっちゃったの？
　困惑と不安に怯えながら慌てて周囲を見回します。するとベッドの脇にリュックが置いてあるのを発見しました。急いで駆け寄った私がリュックを漁ると——やっぱり出てきました。『音無涼子の記憶ノート』です。
　とにかく、まずはこの部屋がどこかを思い出さなければなりません。すぐにノートをめくって、自分がいる部屋について思い出してみました。
　えっと、ここは——神経科学研究所。
「何だ……良かったぁ……」
　思い出した途端、思わず安堵のため息を漏らしていました。
　——あ、だけど松田くんは？
　すぐに、もう一度部屋の中を見回します。けれど、見回した部屋の中に彼の姿はありませんでした。
「松田くん……」
　そこでノートに視線を落とした私は、大事なことを思い出していました。

──そう言えば、しばらく松田くんの治療を受けてないや。

どうやら、私の頭がますますおかしくなっているのはそれが原因のようです。だったら早く松田くんに治療してもらわないと──と、私がそんな焦燥感に体を震わせていた、その時でした。

ガサゴソ。

と、妙な物音が聞こえてきました。

それは私が腰掛けているベッドの下から聞こえているようです──と、そこでまた脳に走るむず痒い感覚。頭の中で勝手に誰かの声が再生されます。

──えっ、どうしてベッドの下にっ？

──イライラを抑える為の精神統一だ。

そんな会話を思い出した途端、今度は勢い良くベッドの下を覗き込んでいました。

「松田くんっ？」

すると、そこで目が合いました。

ベッドの下に潜んでいた人物と目が合いました。

けれど──それは見知らぬ女性でした。

「……え？　誰？」

思わずそう尋ねると──ベッドの下で仰向けになった彼女が素っ気無く返します。

「……そこどいてもらえる？　出るのに邪魔なんだけど」

「あ……はい……」

私が困惑しながら体を起こすと、彼女はすぐにベッドの下から這い出してきました。彼女はその立ち上がり際にふっと短い息を吐くと、体に付着した埃を両手で払いのけています。ふと、そんな彼女の手に目が留まりました。ピッタリと肌に吸い付くような黒い革の手袋がやけに印象的です。けれど、そんな私の視線が鬱陶しかったのか──彼女はその手を隠すように体の後ろに回してしまいました。

「……どうやら、噂通りみたいね？」

「え？」

彼女は何の前置きもなく、いきなり私に向かってそう言いました。

「う、噂って……？」

「記憶障害なんでしょ？　治療中って聞いているわよ？」

そこでまたもや脳のむず痒さに襲われ──私は思わずベッドに腰を落としてしまいました。彼女はそんな私の様子を怪訝そうに見つめています。

「あ、あなたって……私の知り合いなの……？」

　頭のむず痒さを堪えながら、彼女に向かってそう尋ねると――

「……第七十八期生の霧切響子よ」

　返ってきたのは聞き覚えのない名前でした。すぐに『音無涼子の記憶ノート』を開いて、その名前を探しましたが――そんな名前はどこにも見当たりません。

　――じゃあ、知り合いじゃないってこと？

「記憶障害の件を伏せていたのはあなた自身を混乱させない為……そういう判断なのよね？　ちなみに、それも松田夜助の判断なのかしら？」

　勝手に始められた彼女の話に、私は面食らってしまいました。

「え？　な、何の話……？」

「そう、それも覚えてないのね……」

「て言うか、松田くんのこと知ってるの？」

　すると彼女は黙り込んでしまいました。そのまま目を逸らしてしまった彼女の反応があからさまに怪しかったので――私は思わず詰め寄ります。

「ねぇ、知ってるんでしょ？　知ってるなら教えてよ！　松田くんはどこなのっ？」

　私は必死に彼女に問い掛けます。だって私にとって大事なのはそれだけなんです。私が知りたいのも、知らなくちゃいけないのも、松田くんのことだけなんです。

「残念だけど私も知らないわ」

「……え？」

　松田くんが――遠ざかっていきました。

　落胆を隠しきれない私がガックリとうな垂れていると――彼女は窓の外にぼんやりとした視線を向けながら、そこで呟くように言いました。

「松田夜助を捜しているのは私も一緒よ。どうしても彼に確かめたいことがあるから……」

「……松田くんに確かめたいこと？」

　そう聞き返した途端に、彼女の視線が私に向けられます。それは何かを探るような居心地の悪い視線でした。

「ついでに、あなたにも確かめておこうかしら」

「……え？」

「さっき、あなたはベッドの下を覗き込んだ時、松田夜助の名前を口にしていたわよね？　それって彼がよくベッドの下に入るのを知っていたから……そういうことなのよね？」

「は？　な、何……？」

いきなり始まった尋問（じんもん）に私がうろたえていると、彼女は牽制するように言いました。
「正直に答えた方がいいわよ。嘘をついても話がこじれるだけだから」
「べ、別に嘘つく必要なんか——」
「だったら正直に答えられるわよね？」
挑発するような言い草に、私もムキになって答えます。
「うん、知ってたよ。松田くんはイライラすると、精神統一の為にベッドの下で寝ちゃう癖があるって言ってたからね。で、それがどうしたの？」
「ふーん、精神統一ね……」
霧切さんは酷薄（こくはく）な笑みを浮かべていました。何だか松田くんを馬鹿にされたような気がして、思わず声を荒らげそうになったところで——
「ま、きっと嘘でしょうけどね」
「……は？」
「松田夜助は明確な意図を持ってベッドの下に潜り込んでいたはずよ。さっきの私と同じようにね……」
そう言いながら、霧切さんはベッドに腰を下ろしたままの私に向かってゆっくりと歩を進めてきました。そして彼女は私の目の前でようやく止まると——そこから見下ろすような角度で言いました。
「……どいてもらえる？」
「え……あ、うん」
混乱気味の私がベッドから下りると——彼女は誰もいなくなったベッドのシーツを摑み、そのまま一気にめくり上げました。
ベッドシーツがふわりと宙に浮きます。
「……見えるでしょ？」
霧切さんはベッドの下を指差していました。
私は彼女の隣に並ぶように立つと、腰を屈めてベッドの下を覗き込みました。
ベッドの下の床の一部が不自然にめくれ上がっています。めくれ上がっているのは五十センチ四方ほどの床で、しかも奥が暗くなっていることからして——どうやらその奥にはある程度の空間が広がっているようでした。
「隠し部屋ってほど大袈裟（おおげさ）なものじゃないわね……せいぜい倉庫かしら」
「……倉庫？」
「死体を隠す為のね」
「……は？」

　困惑する私の横で、霧切さんは落ち着いた口調のまま淡々と続けます。

「この下には死体が隠されているのよ。しかも二つ……行方不明になっていた希望ヶ峰学園評議委員会の二人でしょうね」

「な、何言ってるのっ！」

　と、顔を真っ赤に染めた私が思わず叫び声を上げると――彼女はそんな私に見向きもしないまま涼しい顔で言いました。

「冗談よ」

「じょ……冗談っ……？」

「死体が腐敗する基準は摂氏五度くらい。もし、こんな場所に死体があったら、とっくに腐敗しているわ。ねぇ、死体が腐敗するとどうなるかわかる？　体内で分解された硫黄含有蛋白から硫化水素が発生して作られる腐敗ガスの臭いは強烈で、シャワーを浴びたり、服を洗濯した程度では落ちないわ。それに臭いだけじゃない。腐敗ガスは死体の体内で内圧を高め、その肉体の様相をまったく変えてしまうの……ピンポン玉のように腫れた眼球が眼窩を外れて飛び出し、舌や唇も膨張し、手足などの末端部分もまるでボールのように膨れ上がっていく。それに皮膚もどす黒くなって、その顔付きは生前とは似ても似つかぬほど酷いものになってしまうわ……そんな物がこんな場所にある訳ないじゃない」

　聞いているだけで酸っぱい物がこみ上げてきて、私は自然と口許を押さえていました。

「わ、わかったよ……とにかく冗談なんだね……」

「丸っきり冗談って訳でもないけどね」

　追い討ちを掛けるように、彼女の挑発的な視線が私に向けられます。

「この中には上下ともに真っ黒なジャージ、それと同じ色のシューズが隠してあった……丁寧に洗い流したつもりみたいだけど血痕が付着していたわ。それに持ち運びが可能な簡易型の台車もあったわね……」

「つ、つまり……どういうこと？」

「つまり、松田夜助は評議委員会の殺人に関与しているってことよ」

　途端に全身が跳ね上がるほどの震えが私を襲いました。私は歯を鳴らしながら、それでも必死に反論します。

「な、何言ってんの……松田くんが人殺しなんて……す、する訳ないじゃん！」

「誰も『殺した』なんて言ってないわよ。『殺人に関与した』と言っただけよ」

　彼女の色素の薄い瞳が、一瞬陽光を受けて輝いたようにも見えました。

「ただ、評議委員会の件に関してはそうだとしても……生徒会長の殺人の件はどうかしらね？　あれも

『関与』だけで済むかしら？」

「……は？」

「昨日の夜、《超高校級の生徒会長》と呼ばれる村雨早春が死体となって発見されたのよ。自殺に見せかけられていたけど……あれは間違いなく他殺のはずよ」

私にはまだその話の終着点は見えていませんでしたが――それでも本能的に嫌な予感を察知したように、私の胸の鼓動は危険なくらいに高鳴っていました。呼吸が勝手に荒くなり、全身の毛穴から汗が噴き出し、こめかみの血管が激しく脈打っています。

そして――そういう予感に限って的中してしまうのです。

「おそらく……松田夜助が村雨早春を殺したのよ」

ポキリ――

今まで自分を強固に支えていた柱が呆気なく折れてしまった音を聞きました。捉えどころのない巨大な不安が私の内部を埋め尽くしていきます。反論しなければと考えるほど思考の糸が複雑に絡み合っていくだけで、それらは言葉にすらなってくれません。

そんな私をじっと見つめる霧切さんの目は、相変わらず嫌になるくらい落ち着き払っていました。そこに感情の類は一切ありません。それはただ観察する為だけの目でした。

もう何もかもがわかりません――

おかしくなった頭、絡み合う思考、圧倒的な不安、冷たく探る目――それらにいっぺんに襲われた私は、混乱の底なし沼へと落ちていきました。

落ちながら――私はもがくように必死に叫んでいました。

――関係ない！

もういいです。もう忘れることにします。どうせ忘れてしまえば、何もかもが元通りになるんです。これは逃避ではありません。むしろ戦いなのです。松田くん以外のものを私の世界から追い出す為の戦いなのです。

――関係ない。関係ない。関係ない。関係ない。

やがて、それは爆発的に跳ね上がる私の胸の鼓動と同調し――叫び声へと変わっていきました。

――関係ない！　関係ない！　関係ない！　関係ない！　関係ない！　関係ない！

がむしゃらに叫び続けている内に、沸騰するような熱気が胃の奥から湧き上がってきました。それはマグマのような熱い塊となって――遂に私の口から爆発します。

「関係なああああああああああああああああいっ！」

すると本当に爆発しました。

絶叫と共に、霧切さんの後方で研究所の扉が弾け飛んだのです。

粉々になったガラス片と木片が宙を舞い、紙細工のようにひしゃげた扉が床に叩き付けられ——そして遅れてやって来た破壊音が、研究所の中を暴風雨のように暴れ回っていました。

——こんなの信じられない。でも私がやったんだ！　私が！

振り返った霧切さんの後頭部越しに、その光景を目の当たりにしながら——

——こ、これが……私の本当の力っ！

私は、音無涼子の恐るべき能力の覚醒を感じていました。

霧切響子が神経科学研究所に足を踏み入れた時——《その彼女》はもうベッドの上に横になっていた。彼女のことは噂で聞いていた。記憶障害になって、この研究所で治療を受けているということだったが——どうやらその噂通りだったようだ。

だが、そんなことなどどうでも良かった。それより、肝心の松田夜助がそこにいないことが問題だった。

——ま、最初から期待はしてなかったけど。

それは予想していたことでもあった。だからこそ彼女はすぐに気持ちを切り替えると、部屋の中の捜査に取り掛かった。松田がいないということは、逆に言えば、気を使わずにとことん調べられるということでもある。

だからこそ——

と、そこで響子の視線がベッドの上の彼女に向けられる。

——起こさないように注意しておいた方が良さそうね。

余計な邪魔が入るのは避けておきたかった。

そこから彼女は慎重に研究所の中を見て回った。そして一通り見て回った後で——彼女は自然とベッドの脇に立っていた。

——やっぱり、怪しいわね。

それはベッドで寝ている彼女に対してではなく、ベッドそのものに対しての感想だった。

気になるなら調べるだけだ——響子は当然のようにベッドの周辺を探り、そしてシーツで隠された床の下から——隠し倉庫を見つけた。

その中から、黒いジャージとシューズ、簡易型の台車が無造作に押し込まれているのを発見した響子は、すぐに一つの結論へと辿り着いた。

松田夜助は評議委員会の連続殺人の件にも関与している――

今のところ、それを事件と認識しているのは、彼女と彼女の依頼人である学園長だけだった。その上、死体さえも消え、極端に手掛かりの少ない事件――だからこそ彼女は手掛かりを求めて地道な調査を繰り返していた。

そんな事件の手掛かりが思わぬところから見つかった。まさか、松田夜助がこの件に関係しているとは思っていなかったが、もしそうだとすると――彼はいなくなった残りの二人の行方にも心当たりがあるかもしれない。

響子の忠告も虚しく、あれから立て続けに行方をくらました評議委員たちは、今や四人全員が行方不明となっていた。だが、ようやくその行方を突き止められるかもしれない。それが手遅れかどうかは別の話だが、そんなことはどうでも良かった。彼らが助かろうと、犠牲になろうと関係ない。自分の役割は、探偵として隠された真相を暴(あば)くことだけ――響子は本気でそう思っていた。

――だけど、まさかあの二つの件が繋がっていたとはね。

そもそも、彼女がここに来たのは評議委員会の件とは無関係だった。

教職員棟で見つかった村雨早春の死体の件――彼女はそれを調べに来たのだ。

学校医の話によると、死んだ村雨が最後に会っていたのが松田夜助だったらしい。しかも彼はその後どこかに消えたまま行方をくらましていた。響子の考えている通り、村雨の死が殺人だったとすると――松田夜助はどう考えても怪しい。

だとしたら、彼はどうして村雨早春を殺したのか――響子はその動機を探る為に、彼が根城にしているこの研究所までやって来たのだ。

しかし、その松田夜助が村雨の件だけではなく、評議委員の件にも関与しているとなると――もはや彼はこの件の中心人物と言っても過言ではない。二つの事件に同時に関係するなんて、そんな偶然はありえない。

だったら彼の目的は？

彼は何を知っている？

何を隠そうとしている？

と、ベッドの下に潜り込んだまま、そんな思案を重ねている時だった。

不意に、頭上から物音がした。

どうやら例の彼女が目を覚ましたようだ。

だったら、彼女から話を聞いてみるのもいいかもしれない。松田夜助の治療を受けていた彼女がただの傍観者だとは言い切れない。もしかしたら彼女は辛い事実を知ることになるかもしれないが、その程度のことは隠された真相を暴く為には仕方のないことだ——と、それもまた本気で思っていた。

それに残された時間はきっと長くない——響子は焦燥感にも似た想いを抱いていた。急がないと取り返しの付かないことになる。そんな気がしてならなかったのだ。

——松田夜助はもう帰って来ないのかもしれない。

それは勘だったが、ただの勘ではない。霧切家の探偵としての勘だった。その勘が彼女を駆り立てる。一刻も早く松田の居場所を突き止めろと駆り立てる。別に松田の身を心配してのことではない。自分が探偵として受けた依頼を果たす為でしかなかった。カムクライズルの行方を掴むという目的の為でしかなかった。

なぜなら、彼女は探偵だからだ。

探偵でしかないからだ。

そして響子は探偵としての自分の目的を果たす為に、彼女に対する尋問を始めた。

「ついでに、あなたにも確かめておこうかしら」

その一言を皮切りに、響子は故意にきわどい質問を並べ立て、彼女を追い詰めていった。そして、その反応を観察し続けた響子が辿り着いた結論は——

彼女は何も知らない。

混乱に混乱を重ねる彼女の様子は演技なんかではなかったし、それに彼女の忘れっぽさを目の当たりにしていく内、この状態の彼女に共犯なんて真似ができっこないと思うようになっていた。

——つまり、これ以上話を聞いても無駄ってことね。

だが彼女は落胆よりも先に、次に自分が何をすべきかをすぐに考え始めていた。

けれど、その答えが見つかる前に——

「関係なあああああああああああああああああいっ！」

鼓膜をつんざくような突然の絶叫。

と同時に、響子の後方で破壊音が轟いた。

反射的に振り返ると、研究所の扉がガラス片と共に舞い散っていた。

そして、その中から——一人の男が姿を現した。

その男は、響子に不吉をもたらす死神のような——残酷な笑みを浮かべていた。

絶叫と共に無残に弾け飛んだ研究所の扉を見つめながら、私は自分が恐るべき能力を覚醒させてしまったことに驚いていました。

ギリギリまで追い詰められた少女が覚醒する復讐物語──なんかそんな映画があった気もしますが、そんなことより今はこの暴走を何とかしないと！

わかっています。この暴走を止める方法は一つしかありません。

それは松田くんです！

彼に、おかしくなった頭を診てもらう以外には、この暴走を止める術などないのです。とにかく急がないと。このまま放って置いたら本当に大変なことになってしまいます。

だから私は松田くんに会う為に──

もう一度だけ、この暴走した力を使いますっ！

そう決心した私の視線が、弾け飛んだ扉の残骸に見入ったままの霧切さんの後頭部を捉えました。そして私は彼女の頭に全神経を集中させると──力の限り叫びました。

「弾けろおおおおおおッ！」

すると、彼女の頭はまるでスイカのように破裂しませんでした。

──あれ？

キレイな形を保ったままの霧切さんの後頭部を見て小首を傾げていたところで──その奥に、人影が立っているのに気付きました。

「やっぱ、ここにいたのか……」

低く凄みのある声でした。

真っ黒な学生服に身を包んだその男は、同じく真っ黒な長髪を揺らしながら、床に転がった扉の残骸を踏み鳴らしていました。痩身（そうしん）の体躯（たいく）ながら、針金のような強靭（きょうじん）さを感じさせる、やたらと背の高い男でした。

「……ノックにしては派手（はで）すぎるんじゃない？」

霧切さんが警戒心を込めた言葉で牽制します。

「……なりふり構ってらんねーんだよ」

男は刺々（とげとげ）しい言葉で返しながら、爬虫類のように細い目を駆使して、私と霧切さんを交互に睨み付けていました。

その目を見た途端──また頭の奥がむず痒くなってきました。

　すぐに『音無涼子の記憶ノート』に視線を落とし——そして思い出します。

　そうです、その真っ黒な男の名前は——斑井一式（いっしき）。

「あれ……でも、どうして？」

　だって彼は今まで何度も私の目の前で撃退されてきたはずです。

　その一、棚で下敷き。

　その二、超高校級の絶望を名乗る黒い影にねじ伏せられる。

　その三、この神経科学研究所で戦刃むくろさんに撃退される。

　それなのに、どうして——

「どうして無傷なのか驚いてるのか？」

　私の疑問を感じ取った様子の斑井は、ちょっと異様なくらいに長い両手を広げながら笑っていました。それは三日月のように唇を湾曲（わんきょく）させた、仮面のような笑みです。

「前に言わなかったか？　俺は不死身なんだよ」

　不死身——その言葉に追従するように彼の足元でガラスが鳴りました。

　——もう嫌です。

　私は松田くんに会いたいだけなのに、その松田くんとは会えないで、どうして意味のわからないことを言う人たちばかりが私の周りに集まってくるのですか？

「彼女から話を聞こうとしても無駄よ……」

　そこに霧切さんが割って入ってきました。

「……なんだお前は？」

　斑井が霧切さんに向けた冷たい視線は、常人であれば身も凍るほどのものでした。しかし霧切さんはそんな視線をものともせずに、淡々と口を動かし続けます。

「あなたは、生徒会が揃っていなくなった件を独自に調べているんでしょう？」

　その言葉に、斑井の眉がピクリと反応します。

「……俺のことを知ってるのか？」

「小耳に挟んだ程度だけどね」

　霧切さんは顎を上げ、すこし間を置いてから口を開きました。

「それでも、あなたが不死身じゃないってことくらいは知っているわ。だって、あなたの才能は無限のものではなく有限のものだったはずよ？　そうよね、希望ヶ峰学園生徒会の《超高校級のボディーガード》さん」

「それは生徒会の人間しか知らないはずだ……その小耳はどこで挟んだんだよ」

　ギリッ――と、斑井は口の奥で異音を鳴らしていました。
「でも、それだけ耳がいいなら知ってるんじゃないのか？　なぁ、教えてくれよ。希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件とやらの犯人は誰なんだ？　生徒会を壊滅させたヤツはどこにいるんだ？」
「だから言ってるでしょ、聞くだけ無駄だって……私はもちろん、そっちの彼女もあの事件については何も知らないわよ……」
「いいや、嘘だな」
「……どうして、そう思うの？」
「俺の勘だよ。それ以上に理由がいるのか？」
　言い終わるや否や、斑井の全身から放たれる威圧感が増しました。
　足元のガラス片を鳴らしながら踏み出してくる彼の迫力に呑まれ、私の足は自然と後ずさりを開始しています。
「ねぇ」
　霧切さんは斑井を警戒したまま、声だけを私に向けて言いました。
「さっきの彼の口振りだと、あなたは前に彼を撃退しているみたいだったけど……」
「そ、そんな期待されても困るって……」私は弱々しく首を振ります。「あんまり覚えてないけど……ほとんどが偶然の連続だったって言うか……しかも、あいつって不死身みたいだし……」
　言いながら、そっと斑井を窺うと――彼は鋭さを増した蛇（へび）のような目で私を凝視していました。私は慌てて目を逸らしながら、
「ぜ、絶対無理だよ……せめて数で勝ってるから、どっちかが囮（おとり）になって逃げるとか……それくらいしか方法ないって！」
　と、私はさりげなく彼女に囮になってもらえるようにアピールしたつもりですが――今ので伝わったかは定かではありません。
「おい、どうするんだ？　大人しく話すのか？　それとも痛めつけられてから話すのか？　そろそろ決めてもらえるかな？」
　斑井が脂（あぶら）っこい長髪をかき上げながら問い掛けてきます。
「だ、だから話すも何も……」
「話すことなんて何もないわよ」
　言い淀む私とは対照的に、霧切さんはきっぱりとした口調で返していました。こんな状況にもかかわらず彼女は毅然（きぜん）とした態度を崩そうとしません。て言うか、何だか意固地（いこじ）になっているみたいです。何か話せない理由でもあるのでしょうか――だとしても、私を巻き込まないで欲しいです。

「……交渉決裂か」

　凄みの増した声で呟きながら、斑井は静かな微笑みを見せていました。

「だったら仕方がない。実力行使だ。言っておくけど、今までみたいな様子見はなしだからな。面倒だから一気に行かせてもらうぞ」

　彼はそこで細長い体をゆらゆらと左右に揺らし始めました。

　と、次の瞬間でした。

　不可思議な感覚が私を襲いました。

　眩暈のように視界がブレて——目の前に立つ斑井の姿が二重に見えました。

　けれど、二重に見えているのは彼だけでした。周りの世界には一切の影響はなく——斑井だけが二重になっていたのです。

「……あ、あれ？」

　いくら瞬きを繰り返しても結果は一緒でした。

　目の錯覚でも何でもなく、そこには確かに——斑井が二人いたのです。

「改めて自己紹介してやるよ」

「改めて自己紹介してやるよ」

　彼らはハモったように同じタイミングで声を発していました。

「俺の名前は斑井四式だ」

「俺の名前は斑井五式だ」

　右の斑井と左の斑井が揃って蛇のような長身をくねらせながら——同時に構えました。それは背筋が震えるほど不気味な光景でした。

「確かにそっくり……小耳に挟んだ通りね」

　霧切さんが警戒するような声を発しました。その身がいつでも動き出せるように低くなっています。

「だから、その小耳はどこで挟んだんだよ」

「だから、その小耳はどこで挟んだんだよ」

　ただでさえ不気味な斑井の声が、さらに不気味にハモリングしていました。

「斑井兄弟……斑井一式から斑井八式までの八つ子で、それを知る仲間からは《超高校級の多胎児（たたいじ）》と呼ばれることもある……八つ子ならではの意思疎通を活かしたチームワークこそが《超高校級のボディーガード》としての斑井兄弟の最大の才能……つまり、斑井兄弟とはその全員で一つの超高校級と呼ばれる才能……小耳に挟んだのはその程度よ」

「や、八つ子って……？」

斑井一式から斑井八式までの八つ子。
超高校級の多胎児。
それが、斑井兄弟の才能──
「そ、そんなのずるいよっ！」私はほとんど自棄（やけ）になって叫んでいました。「そんなの不死身以上に反則だって！　なんか腑（ふ）に落ちないもんっ！」
すると、二人の斑井は揃ったように口許を歪めながら──
「実際そうなんだから仕方ないだろ」
「実際そうなんだから仕方ないだろ」
「実際そうなんだから仕方ないだろ」
──あれ、一つ多い？
と思った瞬間、後方から足音が聞こえてきました。
私と霧切さんがほとんど同時に振り返ると──そこには、研究所の後ろの扉を塞ぐようにして立っている別の斑井の姿がありました。
「……斑井六式だ」
三人目の登場。あっという間に挟みうち。
「これでお前らは数でも負けた訳だ」そして彼らは順番に、「だからって油断はしないぞ」ぴったりと息を合わせ、「確実にぶちのめした後で話を聞かせてもらうぞ」声を上げていました。
右から左から、そして後方から──
ぐるぐると回る斑井の声が私の三半規管を惑（まど）わします。
「ね、ねぇ……どうする？　どうしよう？」
私はすがりつくような声を霧切さんに向けました。
「今それを考えて──」
「いる暇はねーぞ！」
「いる暇はねーぞ！」
前方の斑井が、二人同時に扉の残骸を蹴飛ばしました。ツインシュートされた残骸が凶器と化して、私と霧切さん目掛けて飛んできます。
「……くっ！」
霧切さんは私を突き飛ばしながら、その勢いを利用して反対側に飛び退りました。間一髪のところで、扉の残骸が私たちの間を掠めていきます。
「……いたっ！」

　突き飛ばされて転んだ私はお尻を強く打ち付けながら――だけど怯(ひる)んでいる場合じゃないとすぐに立ち上がります。けれど立ち上がった途端に、シャツの襟首(えりくび)を後ろから引っ張られ――

「ぐ……ぐぐぐっ！」

　苦しいとか、離してとか、思う暇もなく――ぶん投げられました。

　乱暴な子供に投げ捨てられた人形のように宙を舞った私の体は、壁面に頭と背中を打ち付けたところで、ようやく止まりました。

「……っ！」

　衝撃で目の前が暗くなりました。

　かろうじてわかったのは、そこが廊下だということだけです。私はいとも簡単に研究所の外まで投げ捨てられてしまったようです――などと冷静に分析している余裕なんてないほど、とにかく体が痛くて仕方ありませんでした。お尻と背中と頭を必要以上に打ち付けた私は、痺れを通り越して、その部分が丸ごと消失してしまったような激しい痛みに苦悶(くもん)していました。

　そんな私の目の前に、いつの間にか斑井が立っていました。

　天井に近い位置から、急角度で見下ろしてくる爬虫類のような目は、もう何とも喩(たと)えようがありません。とにかく残酷でした。

「……お前には前にも何度もやられてるみたいだからな」

　そんな声が聞こえてきましたが――奇妙なことに彼の口は動いていません。

「けど、二人いりゃあ充分だろ」

　そこで目の前に立つ斑井の背後から、別の斑井が姿を現しました。

　どうやら、今のはこっちの斑井が喋った言葉だったようです。

　ぼやけた視界に二人の斑井――それはあまりに絶望的な光景でした。しかも、廊下に投げ出された私はもう霧切さんを頼ることもできません。

「最後に、もう一度だけ聞いておいてやるよ」

「最後に、もう一度だけ聞いておいてやるよ」

　ハモったようなその言葉をきっかけにして――

「お前は事件にどう関係している？」連なるように、「俺が復讐するべき相手は誰だ？」矢継ぎ早に、「そいつはどこにいる？」まくし立てるように、「ひょっとしてお前か？」彼らは私を、「さっさと話せ」追及していきます。「話さないなら殺す」

　けれど、その時でした。

　ふと頭上に風を感じました。

　そっと見上げると――廊下の窓が開いていました。
　――あ。
　それを目にした瞬間、ぼんやりとした私の思考に閃きが訪れました。
「……やっぱ痛めつけてからじゃないと駄目みたいだな」
「……やっぱ痛めつけてからじゃないと駄目みたいだな」
　左右に並んだ斑井の手が、私に向かって同時に伸びてきます。
　迷っている暇はありません――
　私はその手をすり抜けるように立ち上がると、勢いそのまま窓の縁を乗り越えました。そして一気に裏庭を駆け抜けようとしたところで――ようやく思い出しました。
　ここは三階でした。
「……なっ！」
「……なっ！」
　廊下に残された斑井たちの顔が、同時に驚愕（きょうがく）の表情に変わります。さすがに三階の廊下から身を投げた私の行動は予想外だったようですが――それは私も一緒です。むしろ彼ら以上に驚愕した顔になっていたはずです。そして、その驚愕の表情のまま重力に捕まった私の体は、一直線に裏庭へと落下していきました。
「ああああああああ……」
　そのまま落下していった先にあったのは――衝撃でした。
　けれど致命的な衝撃ではありません。意識を刈り取るほどの衝撃でもありません。幸運にも、裏庭の植え込みが落下してきた私の全身を見事に受け止めてくれたのです。
　それは純度百パーセントの偶然です。
　知っていた訳でもなく、狙った訳でもなく、予想した訳でもありません。
　それなのに、なぜか――
　自分でもどうしてかはわかりませんが――
　その偶然を、当然のものとして受け止めている私がそこにいました。
　と言っても、やはり全身が痺れるくらいの衝撃はありましたし、植え込みの枝で切れた足や手や顔もヒリヒリと痛みます。それでも冷静な私の頭が逃げろと命令を下すと、痺れた両手両足もすぐに活動を開始し、そして私は四つん這いで植え込みの外へと這い出しました。
　すると、地面に並んだ四足の黒い靴（くつ）が見えました。
　四つん這いのまま顔を上げると――二人の斑井が私を見下ろすように立っていました。

「斑井七式だ」
「斑井八式だ」
　上にいたのとは別の斑井でした。どうやら待ち伏せされていたみたいです。
「ま、落ちて来るのは予想外だったけどな」
「ま、落ちて来るのは予想外だったけどな」
　思わずゴクリと咽喉を鳴らしました。
　けれど、こんな悪夢のような状況にもかかわらず――不思議と、恐怖や不安は感じませんでした。その代わりに私が感じていたのは――
　強烈な脳のむず痒さでした。
　そして、そのむず痒さは私にある予感をもたらしていました。
　――私は死なない。
　――ここでは死なない。
　どうしてそんな風に感じるのかは自分でも説明できませんが、確かにそんな予感がしたのです。いえ、予感というレベルではありません。それはほとんど確信でした。
「何だよ、その余裕の顔は……」
「気に食わないな」
　斑井たちが針金のような体を折り曲げて私の顔を覗き込んできました。その目には濃厚な殺意が凝縮されています。
「少しは自分が置かれている状況を理解したらどうだ……」
「少しは自分が置かれている状況を理解したらどうだ……」
　そこで斑井たちは揃って拳を握ると、これまた揃って拳を振り上げました。
　けれど、私の視線はそんな二人を飛び越え――その肩越しに見える一人の少女に向けられていました。
　どうやら、さっきの私の予感はあまりにも都合よく的中したようです。
「これ以上……部外者が首を突っ込むべきじゃないって……」
　二人の斑井が同時に振り返ると――さっきまでは親指大だった彼女が、いつの間にか二人のすぐ背後まで接近していました。
　またもや脳のむず痒さ。そこで私は思い出します。私は思い出せます。
　彼女の名前は――戦刃むくろ。
「悪いこと言わないから……もう手を引いた方がいいと思うよ……」

　彼女はその両手で、振り上げた斑井たちの腕をそれぞれ強く摑んでいました。
「……ぐっ！」
「……ぐっ！」
　苦悶の表情に顔を歪めた彼らが、揃ってその場に膝をつきます。
「諦めなって……あなたたちレベルが手に負えるような事件じゃないんだから……」
　それはギリギリと締め付ける音が聞こえてきそうなほどの握力でした。彼女の細身の体のどこにそんな力が隠されていたのでしょうか――と、それを一番痛感しているのは他ならぬ斑井たち自身のはずです。
「ふざけるなっ！」
「ふざけるなっ！」
　跪（ひざまず）いた斑井たちが叫んだのと――ほぼ同時でした。
　彼らの背後に立つ戦刃さんの、さらに背後から――また別の二人の斑井たちが飛び出してきました。それぞれ右足と左足から繰り出されるシンメトリーな飛び蹴りが、挟み撃ちにするように戦刃さんに襲い掛かります。
　けれど彼女は顔色一つ変えないまま前方の斑井たちの腕を離すと、後方から飛んできた二つの飛び蹴りを受け流すような動きでかわしました。その隙に、膝をついていた二人の斑井たちは後方にバックステップ。飛び蹴りを放った二人の斑井も着地するや否や、すぐに体勢を整えます。
　四人の斑井が――戦刃さんを完全に包囲する形になりました。
「あっちの女は？」「六式に任せてある」「一人で大丈夫か？」「向こうのは戦闘には慣れている訳じゃない」「まずはこっちに集中だ」「確かにその方が良さそうだな」
　まったく同じ声で繰り広げられる作戦会議――その間も、彼らは中央の戦刃さんへの警戒を緩めません。しかし、当の戦刃さんには追い詰められた緊張感なんてありませんでした。彼女はきょろきょろと斑井たちの顔を見回しながら、確認するような口調で呟いていました。
「ここの四人を倒せば……後は霧切さんの方に残った一人だけ……うん、予定通り」
　予定通り――その言葉に斑井たちが強く反応します。彼らは四つの声をハモらせながら、同時に叫んでいました。
「どういう意味だっ！」
　けれど、やっぱり戦刃さんは涼しげな顔で、
「別に、あなたたちは意味なんて知らなくていいんだってさ……そもそも、あなたたちは意味を知るほど重要人物じゃないらしいから。だから悪いことは言わない……もうやめた方がいいと思うよ……」
「黙れ！」「黙れ！」「黙れ！」「黙れ！」

　威圧的な四つの声が、一斉に戦刃さんに浴びせられます。
「今更やめられるか！」「死んだあいつらに誓ったんだ！」「生徒会はやられっ放しじゃ終わらない！」「俺がそれを証明する！」「生徒会の名誉は必ず守る！」「死んでも守るぞ！」「絶対に復讐してやるっ！」「誰にも邪魔させるかっ！」
　右から左から、
　前から後ろから、
　焦燥交じりに喚き散らされる言葉を聞きながら、それでも戦刃さんは呑気に頭を掻きつつ、う～んと唸っているだけでした。
「えっと、あなたたちの気持ちはわかるような気もするけど……あ、嘘です。本当はこれっぽっちもわからないんだけど……でも理解ならできるよ。だけど、あの子は別なの。あの子にとっては、あなたたちなんて理解する価値すらない……あなたたちの想いとか希望なんて……あの子にはまるで関係ないの。このシナリオを組み立てたあの子にとって関係ない以上は……それを汲み取った終着点なんて望むだけ無駄。だから諦めて……」
　ギリリッ、ギリリッ、ギリリッ、ギリリッ――
　斑井たちの歯軋りが合唱となって裏庭に響きます。
「どうやら、お前も何か知っているみたいだな」「希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件について知っているみたいだな」「だったら好都合だ」「話を聞かせて貰うぞ」「ただし、ぶちのめした後でだ」
　四人の斑井が同時に腰を低くし――構えました。
「あーあ、せっかく忠告したのに」それを見た戦刃さんが不貞腐れたように呟きます。「これ以上犠牲を増やしたってしょうがないのに……」
「犠牲だとっ？」「犠牲だとっ？」「犠牲だとっ？」「犠牲だとっ？」
　またもや四人の斑井たちが揃って叫びました。彼らは包囲した獲物を威嚇する犬の群れのように、歯を剥き出しにして吼え立てます。
「兄弟たちのことかっ！」「お前は知っているのかっ！」「兄弟たちはどこに消えたっ！」「一式と二式と三式をどうしたっ！」
　すると戦刃さんはそっと首を振りながら――凍えるような冷たい声で返しました。
「もう帰って来ないよ……」
　その言葉が引き金でした。
　破裂するような音と共に、地面を強く蹴り出した斑井たちが、細長い体を目一杯に伸ばして、四方から一斉に戦刃さんに飛び掛かりました。

「だから……無駄だって言ってるのに……」
　戦刃さんはギリギリまで引き付けたその四つの初撃を、たった一つの動きだけでいっぺんにかわしていました。
「いくら寄せ集まっても元の価値は変わらない……そんな、お徳用パックみたいな攻撃なんて私には通用しないよ……」
　平淡な声で呟きながら、彼女は目にも留まらぬ速さで動き続けています。息がぴったりと合った斑井たちの連係技を、鮮やかすぎる体捌（たいさば）きで軽やかにかわしていました。
　まるで次元が違います。
　彼女だけがたった一人で、どこか別の次元で踊っているようでした。



「誰もあの子には逆らえないの……」
　踊りながらも彼女は呟いていました。息すら乱れない声で呟いていました。
「だからこその……絶望なの……」
　かすりもしない攻撃を繰り出し続ける斑井たちが憔悴(しょうすい)していく一方で、戦刃さんの全身はさらに速く、まるで激流のようにうねっていきます。やがてその激流は四人の斑井たちを無慈悲に飲み込んでいきました。
　そこから先は、あまりに一方的な展開でした。
　一方的すぎる展開のまま――一方的に幕を閉じました。
　戦刃さんがようやく動きを止めた時――その足元には四人の斑井が倒れていました。
　そこには途中経過なんてありません。私が目撃できたのはその結果だけでした。
「終わったよ……」
　小さなため息と共に呟いた戦刃さんの目は、もう斑井たちを見ていません。その目は私に向けられていました。
　私は驚くのも忘れるくらいに呆気に取られていました。
「何で……そんなに強いの……？」
「だって、私にはこれしかないから……」
　そう答えた彼女の顔には、表情と呼ばれるものは一切ありません。仮面のような無表情に赤い返り血が点々と付着しているだけでした。
「……どうして助けてくれたの？」
「だって、そう決まっていたことだから……」
「……決まっていたこと？」
　戦刃さんは頷いたまま足元に視線を落としました。そのまましばらく間を置いた後で、ゆっくりと口を開きます。
「例えば、テレビゲームのRPGとかそれと一緒なんだけど……」
　――テレビゲーム？
　――それと一緒？
「一本道のRPGとか……あの世界で生きている人って、意思があるように見えるけど、それはそう見えてるだけで……結局はみんなシナリオに沿って都合よく動かされているだけ……それは主人公も一緒……ただ主人公自身がそれに気付いていないだけ……」
「……何言ってるの？」

「あのね、ここで私が斑井と戦ったのは偶然じゃないんだ……もっと言えば、神経科学研究所に斑井たちが来たのもそう……邪魔な霧切さんがこのシナリオから排除されたのもそう……全部最初から決まってたことなの」
「き、決まってたことって……」
「それは私も一緒なの。私もあの子が決めたシナリオに沿って動いてるだけ……あの子に動かされて、このシナリオが間違った方に進まないようにしているだけ……」
「……あの子？」
「もちろん、江ノ島盾子のことだよ」
　一瞬にして血液が凍るほどの寒気が私を襲いました。
　やっぱり、すべては江ノ島盾子に戻ってくる。私や松田くんを巻き込もうとしている、あの最悪な彼女に――って、あれ？
　そこで私はようやく気付きました。
「じゃあ、あなたって江ノ島盾子の仲間だったの!?」
　と、私が責めるような視線を戦刃さんにぶつけると――彼女はもじもじと恥ずかしそうに答えました。
「な、仲間って言うか、あの子は私の妹だから……」
「は？」
　あまりに唐突すぎる告白でした。
　戦刃むくろと江ノ島盾子が姉妹なんて――そんなの仲間以上に厄介じゃないですか！
「でもね、姉妹だとか血が繋がってるとか……そんなの、あの子には関係ないんだ……だって、あの子が見ているのは絶望だけだもん……他人の絶望、自分の絶望、それだけなんだもん……」
　いつの間にか遠くを見るような目になっている戦刃さんが、頼んでもいないのにボソボソと語っていきます。
「だから、どんな人物であれ、どんな事実であれ、どんな世界であれ、あの子には関係を及ぼせないの。たとえ及ぼしたところで絶望させられるだけ……それが《超高校級の絶望》って称される江ノ島盾子の世界なの……」
「な、何それ……滅茶苦茶だよ……」
「そう、滅茶苦茶だよ……だって、それが江ノ島盾子なんだもん」
　そう断言した彼女の言葉に、私は新たな悪寒を感じていました。今度はじわじわと足元から凍りついていくような悪寒です。
「あの子は本当に滅茶苦茶で……絶望的なほど、最低で最悪な妹だけど……だからこそ放って置け

ないんだ。だからこそ私が手伝ってあげなきゃ駄目なんだ。だって、あの子を理解してあげられるのは私だけなんだもん」
　と、そこで戦刃さんが見せた顔に、思わずハッとしてしまいました。今まで無表情だった彼女が――うっとりと頬を染めて笑っていたのです。
「あの子が絶望を引き寄せるのか、絶望があの子を引き寄せるのか……それはわからないけど……あの子はずっと絶望と隣り合わせで成長してきた。絶望にまみれて生きてきた。だからこそ、あの子はそれを他人にも求めるようになったの。他人を絶望させることに快楽を覚えるようになったの。でもね、そこまでは普通なんだよ。それって不幸な人間が幸福な人間に抱く憎悪なんかと一緒だからね。だけど、あの子が特別だったのは、あの子が自分自身を絶望させることにも快楽を覚えたことなの……だからこそ絶望の連鎖が始まった。あの子は自分を絶望に追い込み、それと同じくらいの絶望を他人にも与えた。そうなると、今度はそれ以上に自分を絶望させなければ気が済まない……って、そんな絶望の連鎖が《超高校級の絶望》を生んだんだよ」
　語っていく内に熱が入ったように、戦刃さんは恍惚とした表情になっていきました。
　それは荒唐無稽（こうとうむけい）で冗談としか思えないような内容の話でしたが――私はそれが真実であることをすんなりと受け入れていました。私の中にある江ノ島盾子の記憶がそうさせたのかもしれません。
「ね、理解できないでしょ？　きっと誰も理解できないと思うよ。でもね……私だけには理解できちゃうんだよね……」
　恍惚とした戦刃さんは、吐き出す息さえ荒くなっています。
「私だけがあの子のことを理解してあげられる……だから、あの子には私が必要なんだよ。あの子はまだそれに気付いてないけど、きっといつか気付いてくれると思う……ううん、もしかしたらとっくに気付いているんだけど、気付いてない振りをしてるだけなのかもね。うふっ、あの子ったら照れ屋さんだからね。うふふふっ」
　陶酔したように語り続ける戦刃さんを前にして――私は完全に引いていました。
　彼女が江ノ島さんに並々ならぬ想いを抱いているのはわかりました。だけど、そんなことは私には関係ないはずです。
「……そうだよ、関係ないじゃん」
　私は思わず口に出していました。
「え……？」
「別に、あなたのこととか江ノ島盾子のこととか、そんなの知らないよ……私には関係ないもん……」
　と、私が涌き上がる感情そのままにムッとしたような口調で言うと、

「あ……ご、ごめんなさいっ！」

　途端に、戦刃さんの顔が青ざめていきました。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいっ！」

　そして、ますます引いてしまうぐらいの勢いで頭を下げ始めました。

「いや、そこまで謝らないでもいいんだけど……」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいっ！」

　それでも謝り続ける彼女に気持ち悪さを覚えるのと同時に――そこで私は極度の疲労感を思い出していました。私はとにかく疲れていたのです。斑井兄弟との対決に、戦刃さんと江ノ島盾子の話に、それと――松田くんに会いたい。

　――そうだ、松田くんに会いたいっ！

「ねぇ、私ってもう行っていいんだよね？」

　疲労感を吹き飛ばすほどの焦燥感に駆り立てられた私は、とにかくその場を立ち去りたくて仕方なくなって、だから彼女の返事すら待たずに、

「とにかく助けてくれてありがとう。じゃあ私は行くね」

　そう言い残して、その場を後にしようと走り出した――その時でした。

「あ、待って。まだ松田夜助の居場所を教えてないよね？」

　慌てて急ブレーキ。振り返った私に向かって戦刃さんは言いました。

「私から彼の居場所を聞かないと……彼には会えないと思うけど……」

「ど、どうしてあなたが松田くんの居場所知ってるの？」私はすぐに彼女に詰め寄りました。「て言うか、知ってるなら早く教えてよっ！」

　けれど詰め寄ったところで――思わず体を仰(の)け反(ぞ)らせてしまいました。

　目の前の戦刃さんが、さっきまでとはガラリと変わった険しい顔付きになっていました。まるで戦場で標的を狙うスナイパーのような雰囲気です。

「仲良く話した後にこういう展開って嫌なんだけど……でも仕方ないんだ。これってそういうシナリオだから……仕方ないんだ」

　今すぐ泣き出してしまいそうなほど悲しそうな声で呟きながら、彼女は身も凍るような冷たい視線を私に向けていました。

「松田夜助の居場所を教えるには……交換条件があるの」

「こ、交換条件？」

　そこで戦刃さんは倒れている斑井たちを指差すと――低い声で言いました。

「そこで倒れている彼らは、生徒会唯一の生き残りだった生徒会長が殺されたことを、まだ知らない。きっとそれを知ったら絶望するだろうね……絶望して、死んでも復讐しようとするだろうね……」
「な、何が言いたいの？」
　声が緊張している——自分でもわかるほどでした。
「放って置いたら、彼らは間違いなく松田夜助を殺すと思うよ」
　殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す——すぐに、その言葉がぐるぐると頭の中を回り始めます。
「ど、どうして松田くんが殺されなきゃいけないの……生徒会長が殺されたことなんて、松田くんとは関係ないじゃん……」
「ううん、関係あるよ」
　戦刃さんは首を振りました。
「だって、松田夜助がその生徒会長を殺したんだもん」
　殺した。殺した。殺した。殺した。殺した。殺した。殺した。殺した——
「だから交換条件」
　言いながら、戦刃さんは懐から取り出した《何か》を私の足元に放り投げます。
「彼の為に精一杯（せいいっぱい）のことをしてあげて。あなたが本当に松田夜助を愛しているなら……彼の為に精一杯のことをしてあげて」
　私は足元に視線を落としました。湿った地面の上に、希望ヶ峰学園の刻印が入ったナイフが落ちていました。それを目にした途端——私の心臓は弁が壊れたように大量の血液を吐き出し始めました。
「彼とあなた自身の希望を勝ち取る為に……あなたも精一杯戦って」
　まさかこれで——殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。殺す。
「う、嘘……でしょ？」
「ううん、嘘じゃないよ」
　彼女は思考時間ゼロの即答で答えます。
「ここであなたはこの絶望を乗り越えるの。斑井たちを犠牲にすることで本物の希望を掴み取るの……それが江ノ島盾子があなたに贈ったシナリオなの」
　何それ——
　江ノ島盾子が私に贈ったシナリオって——
　どうして？
　どうして私にこんなことをさせるの？

あまりの混乱に頭が発熱し――強い眩暈と酷い耳鳴りに襲われます。

どうしてっ！　どうしてっ！　どうしてっ！　どうしてっ！　どうしてっ！

ふと気付くと――私は空を見上げていました。

ぶ厚い灰色の雲が空を覆い隠していて、ただでさえ湿って薄暗い生物学棟の裏庭が、真夜中のような静けさに包まれていました。そんな空をぼんやりと見つめている内に、私は自分の内面にどうしようもないほど真っ黒な感情が湧き上がってくるのを感じました。それは下水道のへどろのように湿っていて、干からびた枯れ草のように乾燥しています。

これが――と、私は朦朧とする頭で考えます。

これが絶望。

「この絶望を乗り越える……本物の希望を掴み取る為に……」

――今のは誰の声？

私の声？

戦刃さんの声？

それとも――

けれど、そんなことはもう――関係ないみたいです。

いつの間にか、私は銀色に光るナイフに手を伸ばしていました。そして自分にまとわりつく黒い霧のような絶望を断ち切ろうと、無我夢中でナイフを振り回します。

すると肉の感触がありました。

斑井の体に突き立てたナイフ越しに、ずぶずぶずぶと皮膚と肉を突き破っていく感触が伝わってきました。

噴き出す鮮血。断末魔の叫び。

肌が粟立ち、胃のあたりをねじ切られるような痛みを瞬間的に感じます。

それでも私は刺しました。

絶望を乗り越え、私と松田くんの希望を掴み取る為に――

刺して刺して刺して刺して刺して刺して刺して刺して刺して刺して刺しました。

遠くから私の絶叫が聞こえてきます。

それは壊れた私の心が発する絶叫、絶叫、絶叫――でした。

あああああああああああああああああああああああっ――「あああっっ！」

そこで我に返りました。

そして頭に浮かんだ妄想を振り払うように、すぐにまた叫んでいました。

「や、やっぱ無理だって！」
　ナイフに手を伸ばしたところで硬直してしまった私は、脳裏をよぎった妄想に怯えたまま——頭を抱えてすっかりうずくまっていたのです。
　やれません！　こんなのやれる訳がありません！
「あ、えっと……」
　すると、頭上から困惑気味の戦刃さんの声が聞こえてきました。
「あの、ここで絶望を乗り越えないと希望は掴み取れない……んだけど」
「む、無理だって！」私は嗚咽交じりに叫びます。「殺せる訳ないじゃん！　そもそも希望とか絶望とか……そんなの、あなたとか江ノ島盾子が勝手に言ってるだけでしょ？　私には関係ないよっ！」
　叫びすぎて咽喉が潰れたように熱くなっていました。目と鼻に押し寄せてきた洪水がぐちゃぐちゃに混ざり合いながら地面へと垂れ落ちていきます。
「ううっ……た、助けて……松田くん助けてよ……」
　そのまま私は懇願するように泣きました。頭を抱え込んだまま、ひたすら無様（ぶざま）に泣き続けました。
「助けてよ……松田くん助けてよ……松田くん、松田くん、松田くん……」
　すると、頭上からさらに困惑したような戦刃さんの声が聞こえてきます。
「えっと……こういう場合はどうしたらいいんだろ……よくわかんないけど、とりあえず松田夜助の居場所を教えておくね……」
「……え？」
　私は驚いて顔を上げました。
「……え？」
　戦刃さんも驚いていました。きっと私の泣き顔があまりに酷かったせいです。
「お、教えて……くれるの……？」
「だって……このまま終わらせたりしたら、後で盾子ちゃんに怒られちゃうし……」
　それを聞いた私は、制服の袖でゴシゴシと顔を拭くと、再びしっかりと二本足で立ち上がりました。そこで自分の頬を叩いて気合を入れ直すと——改めて彼女に向かって問い掛けました。
「……じゃあ、教えてよ。松田くんはどこにいるの？」
　すると戦刃さんはか細い声で答えます。
「えっと、松田夜助は旧校舎だよ……」
　またもや、強烈なむず痒さが私の頭を襲いました。
「旧校舎……」

つい最近もどこかでその言葉を聞いた気がします。けれど、今はそんな痒みなんて気にしている場合ではありません。

「わかったよ……旧校舎に行けば松田くんに会えるんだね？」

「うん、そこがクライマックスの場所の予定だから……」

松田くんに会える――そんな予感と共に、体の底から得体の知れない力が湧いてくるのを感じました。さっきまで泣いたり喚いたり絶望していたのが嘘のようです。

これが――と、私は力を漲らせながら考えます。

これが希望！

「ありがと、じゃあ私は行くね！」

と、私は戦刃さんに頭を下げていました。憎き江ノ島盾子の姉で、その怪しげな計画を手伝っている彼女に頭を下げる必要なんてないけど――でも、これも希望の力なのかもしれませんね！

「うん、行ってらっしゃい……ここの後片付けは私に任せて……」

戦刃さんは足元に倒れる斑井たちを見回しながら言いました。

「ここを片付けたら霧切さんを助けに行くから……そこで霧切さんにはこのシナリオから降りてもらう……それで全部シナリオ通り……だから後は任せて……」

最後までシナリオがどうとか、そんなことばかり連呼する彼女に、私はうんざりし切っていました。だから私は、「さよなら」と、短く言って、すぐに駆け出します。

けれど駆け出した直後に――ふと何かが気になりました。

走りながら振り返ると、後方で戦刃さんがぼんやりと突っ立っていました。その周囲には四人の斑井たちが倒れていたのですが――

そこには何かが足りないような気がしました。

でも思い出せません。

だけど、今はそんなことを気にしている場合ではないので、私はすぐに前方へと向き直ります。

そうです、私には振り返っている暇なんてないのです。

目指すは――希望ヶ峰学園北地区の旧校舎です。

手にした『音無涼子の記憶ノート』を見返さなくても、そこまでの道のりがなぜか頭に浮かんでいました。やっぱり私は色々と不安定みたいです。そんな自分が不安で堪らないけど――でも松田くんに会えれば、きっと大丈夫。そんな不安なんてすぐに解消されるはずです。

だって松田くんに会えればすべてが元通り――私の頭も元通りになって、そして私と松田くんはいつもの日常に戻れるのです。

何もなくて、何も起きなくて、松田くんの治療だけを楽しみに過ごす日常に――すっかり元通りに戻れるはずなのです。

それこそ私が求めるハッピーエンド。

私が向かうのは旧校舎なんかじゃなくて、そのハッピーエンドでした。

そこに向かって私は走ります。

この先で待っているハッピーエンドに向かって――全速力で走っていくのです。

――あれ？　雨？

生物学棟の裏庭から中庭へ出てきたところで気付きました。いつの間にか雨が降り出していました。そこまで雨脚は強くないものの、雨は地面を濡らし、あたりの木や葉に当たって音を立てるくらいの力はありました。

けれど、そんな雨程度で私が止まることはありません。私は冷たい雨を全身に浴びながら、建ち並ぶ校舎の間を縫うようにして、東地区の中庭を駆け抜けていきました。

雨のせいか、それとも授業中だからかはわかりませんが、中庭にいる学生たちの姿はまばらでした。それでも雨を逃れようと走る学生や、相合傘（あいあいがさ）でゆっくりと進む学生などが、ぽつぽつと中庭を歩いています。そんな中を傘もささずに全力で走る私は、やっぱり居合わせた学生たちから奇異の視線を向けられていました。

いつもは関係ないで済ませていたはずなのに――なぜだかムッとしました。

安全な場所から腫れ物を見るような目を向けてくる彼らに、私は猛烈な腹立たしさを感じていたのです。

それでも私は、関係ないと自分に言い聞かせながら、一気に中庭を走り抜けます。

そして、そのまま東地区を抜け、中央広場へと入っていくと――

そこでまた、学生たちの集団を目にしました。おそらく寄宿舎のある南地区へと帰っていくのでしょう。彼らは色とりどりの傘を手に、楽しそうに談笑しながら、舗道の上をゆっくりとした足取りで歩いていました。

そんな彼らを尻目に、私は舗道から飛び出します。

旧校舎がある北地区へと向かう舗道は存在しないらしく、この中央広場を横断しない限りは辿り着

けないのです。

足元の芝生（しばふ）は濡れ、所々に水たまりもできていました。

半ば空き地と化した北地区に、しかもこんな雨の日に向かう人間などいるはずもなく、すぐに視界から人影が消えました。足元の芝生も次第に剝き出しの土へと変わっていき、あたりの木々もその数を減らしていきました。やがて周囲はただの荒れ地の様相を呈していきます。

そんな荒れ地をしばらく進んでいくと――唐突に人工的な建築物が見えてきました。

――あれが、そうなんだ。

その建物を見上げながら、私は走る速度を徐々に緩めていきます。

希望ヶ峰学園旧校舎――

その荘厳な佇まいを見る限りでは、ここが使われなくなった廃墟だとはとても思えませんでした。けれど、それもそのはず――と、私は久しぶりに『音無涼子の記憶ノート』を開いて確認します。

どうやら、この旧校舎が完全にその役割を終えたのは、たかだか半年ほど前のことらしいです。であれば、まだ使われていた頃の残り香（のこりが）があっても不思議ではありません。

けれど、その旧校舎の周囲をぐるりと取り囲むように張り巡らされた背の高いフェンスが、その建物がもう終わった場所だと声高に主張していました。そのフェンスには、『希望ヶ峰学園北地区改築予定地――立ち入り禁止』というプレートまで掲げられています。

私は乱れた呼吸を整えながら、ゆっくりとした歩調でフェンスに沿って歩いていきました。旧校舎へと入るには、ここを乗り越えるしか方法がなさそうなのですが――

そこでまた頭の奥にむず痒さを感じました。

未だに慣れないその感覚に思わず顔をしかめたところで――ふと、ある考えが頭をよぎります。

――そう言えば、警備員がいるって話だったよね。

と、ノートを見返した訳でもないのにそんな思考に辿り着いた自分に驚いて、思わず立ち止まったところで――さらなる驚きが私を襲いました。

複数の警備員たちが、私の周囲をすっかり取り囲んでいたのです。

「……え？　あれ？」

慌てて警備員たちを見回しました。彼らは揃って無言で、しかも無表情でした。まるで生気の抜け落ちたマネキンです。私を捕まえたり、注意しようとする素振りすらありません。ただ真っ直ぐに私を見つめているだけでした。

「え、えっと……私は怪しい者ではなくてですね……って、あれ？」

警備員たちは私の言い訳に耳も貸さずに、一斉にあたりに散ってしまいました。不審者であるはずの

私を無視して、それぞれ勝手に歩き去っていってしまったのです。
「え？　あれ？　えっと……」
　取り残された私がオタオタと困惑していると――その場に一人だけ残っていた警備員と目が合いました。
　――若い？
　警帽の下の顔は高校生くらいにしか見えませんでした。彼は口許を歪めて思わせぶりな笑みを作ると――懐から何か光る物を取り出しました。
　一枚のメダルでした。
　そのメダルにはクマのマスコットが刻まれています。
　それは半身が白くて、残りの半身が黒い――妙なクマのマスコットでした。
　あれって確か――
「モノクマ……だったよね……」
　またです。またノートを見返した訳でもないのに勝手に思考が浮かんできました。まるで自分以外の誰かの思考が頭の中に入り込んだような――心地の悪い感覚でした。
　――これが思い出すってこと？
　でも今はそんな自己分析をしている場合ではない――とばかりに、目の前の警備員が不意に右手を伸ばしました。
　彼はその伸ばした右手で、どこかを指差しています。
　その先を目で追うと――フェンスとフェンスの繋ぎ目に、潜り込むのにおあつらえ向きな隙間がありました。
　――でも、どうして警備員が教えてくれるの？
　と、驚いた私が視線を戻した頃には、もう彼の背中は小さくなっていました。
　訳もわからないまま、遠ざかっていく背中をぼんやりと眺めていると、不意にある言葉が脳裏をよぎりました。どうやら、また私の頭が何かを思い出してしまったようです。
　――結局はみんなシナリオに沿って都合よく動かされているだけ。
　途端に、鈍痛（どんつう）のような恐怖が私の後頭部に重くのしかかってきました。
　――でも、きっと大丈夫。
　私は必死に自分に言い聞かせます。
　とにかく松田くんに会えれば何もかもが大丈夫。
　私は信じています。

松田くんを信じています。
　松田くんへの自分の想いを信じています。
　私と松田くんの世界を信じています。
　私はひたすら彼を信じることですべての不安を吹き飛ばし――そして、また力強く動き出しました。

　フェンスの隙間をくぐって敷地内へと侵入すると、旧校舎の裏側に出ました。
　入り口を探して建物に沿うように回り込むと、正面に大きな玄関が見えました。建て付けが悪くなったのか玄関の扉は半開きで、鍵が掛かっていないのは一目瞭然（いちもくりょうぜん）でした。私は付近を警戒しながら慎重に扉の隙間に体を滑り込ませます。
　その扉の向こうには、薄暗くて埃っぽい玄関ホールがありました。
「……松田くーん」
　と、呼び掛けながら、私は玄関ホールを進んでいきました。足元で水分を吸収した靴が湿っぽい音を鳴らしています。
「松田くーん。どこー？　どこにいるのー？」
　声を上げながら奥の廊下を覗き込んだところで――ふと違和感に気付きました。
　――暗すぎない？
　この玄関ホールはまだしも、その先の廊下は不自然なほどの暗闇に包まれていました。
　そこには、まるで一切の光さえ届いていないようです。
　けれど今はまだ昼間です。いくら外が雨だと言っても、廊下の窓から差し込む陽の光だってあるはずなのに――
　バチン。
　暗闇の中から妙な音が響きました。
「わわっ！」
　しかも音は一つだけではなく、そこから連鎖的に鳴り響いていきます。
　バチン、バチン、バチン、バチン、バチン――
　そんな音と共に廊下に次々と明かりが灯（とも）っていき、そして音が止んだ頃には――建物の中はすっかり

明るく照らされていました。

「……松田くん？」

　としか考えられませんでした。

　きっと彼が私の呼び掛けに応じてくれたのです。そんな期待に背中を押された私は、人工的な明かりに包まれた廊下を進んでいきました。

「松田くーん！　どこにいるのー！」

　私は通り掛かった教室を覗きながら、「松田くーん？」トイレを開けると、「松田くーん」そこから階段を上りながら、「松田くん？」また別の教室を覗きながら、「松田くーん？」トイレを開けると、「松田くーん」そこから階段を上りながら、「松田くん？」

　そうこうしている内に――いつの間にか最上階まで来てしまいました。

　そこでも私は、「松田くんってばー」と呼び掛けながら、廊下やトイレや教室を一通り見て回ったのですが――どこにも彼の姿は見当たりませんでした。

　さすがに疲れてきた私は、そこでいったん足を止めました。

　そして改めて思います。

　――旧校舎ってこんな所だったんだ。

　松田くんを捜して歩き回った建物の中は、学校とは名ばかりの奇妙な空間でした。

　まず、ここには窓がありません。校舎の一階から最上階に至るまでのすべての廊下と教室の窓が、重ね合わされた分厚い木の板で塞がれていて、それが建物の不自然な暗さの原因となっているようでした。さらには廊下や教室の至る所に、無意味で不気味で悪趣味なオブジェが散乱しているような有様です。

　結果、もはや学校の面影はありませんでした。

　まさか、ここが使われていた時からこんなだったとは考えられないので、だとすると誰かが何らかの意図で作り上げたとしか思えません。でも誰が何の為に？

「やぁ、びっくりしてるみたいだね？」

「きゃあああああああっ！」

　何の前触れもなく背後から声を掛けられた私は思わず飛び上がってしまいました。

　慌てて振り返ると――あれ？　そこには誰もいません。

「ま、それも無理ないよね。これにはさすがの僕もびっくりだもん」

　それなのに声だけは聞こえてきました。

　改めて周囲を見回すものの――やっぱり人影なんて見当たりません。

「……ねぇ、お姉ちゃん、どこ見てんの？　僕ならここだって」

　と、語る声は私の真正面の——廊下のど真ん中から聞こえているようです。

「そうそう、ここだよ」

　この異常事態に縮み上がりながら、声の聞こえる方向に意識を集中させ、じっと目を凝らすと——次第に少年の姿が浮かび上がってきました。

「えっ、子供？」

「あ、やっぱり、また忘れてる！」

　少年はうんざりしたように自分の額に手を当てています。

「……神代優兎だよ。第七十七期生の超高校級の諜報員だってば！」

　私はすぐに『音無涼子の記憶ノート』を開くと、脳のむず痒さが訪れる前に思い出しました。

「あぁ、あの神代くんね！」

「まったく、本当に何回目の自己紹介かな、これっ！」

　と、神代くんは不満げに頬を膨らませていました。

「……あれ、でも神代くんはどうしてこんな所にいるの？」

「それはこっちのセリフだよ」

　彼は頬を膨らませていた空気を、ため息にして吐き出しながら、

「むしろ、お姉ちゃんの方こそどうやってここに入ったの？　旧校舎の周りには警備員たちがウロウロしてたはずだよ？　存在感のない僕ならまだしも、一般人のお姉ちゃんに立ち入りは不可能だったと思うけど？」

　私は思わず言葉に窮してしまいました。まさか警備員が入れてくれたなんて言っても信じてくれないでしょうし——

「えっと……何か成り行きで……」

　結果、そうとしか説明できませんでした。

「どうやって入ったのか忘れちゃったって？　もうっ、しょうがないなぁ！」

　でも何とか納得してくれたようです。

「……ま、それに来ちゃったもんはしょうがないしね」

　そこから神代くんは、彼がいかにしてここに辿り着いたのかを自慢げに語ってくれました。それによると——彼は学園側に対して様々なスパイ活動を繰り広げ、その結果としてこの旧校舎に一連の事件の秘密が隠されていると知ったようです。そして、実際にここに忍び込んだのが私の来るちょうど直前だった——らしいのです。

　ちなみに、真っ暗だった校舎の中からブレーカーを見つけ出して電源を入れたのも、彼とのことでした。
「でも、あんな真っ暗な中で、よくブレーカーなんて見つけたね」
「あははっ、趣味で使ってる暗視スコープが役に立ったよ！」
　怖いので、どんな趣味かは聞かないでおくことにしました。
「ま、でもよく考えてみれば、ここでお姉ちゃんと会えたのはちょうど良かったかもね。だって、当事者であるお姉ちゃんを抜きにして解決編は始められないもんね」
「……え？　解決編？」
　すると神代くんは懐から取り出した菓子パンを盛大に頬張りながら、得意げな口調で言いました。
「つまり、この陰謀の全貌（ぜんぼう）はもう僕には丸わかりってことだよ。後はスパイアクション風にビシッとそれを阻止すれば、この事件は一件落着って訳だね！」
「ふーん、そっか……」
「あれれっ!?　リアクションが薄くないかい!?」
　神代くんはやたらと大袈裟にずっこけていました。
　でも、リアクションが薄くて当たり前です。だって事件とか解決編とか――そんなことは私にはどうだっていいんです。
　それより松田くんです。
　私は松田くんに会わなくちゃいけないんです！
「……大丈夫だよ。松田夜助もすぐにこっちに来るはずだからさ」
「えっ？」
「どうせ、松田夜助の心配をしてたんでしょ？」
　神代くんは含み笑いをしながら残った菓子パンを丸飲みすると――急にどこかに向かって歩き始めました。
「じゃあ行こっか。後は歩きながら話すからさ」
「……え？　行くって？」
　困惑する私に見向きもせずに、神代くんは背中越しに声を上げます。
「ほらほら、早くしないと置いて行っちゃうよーっと！」
　そのままリズミカルに階段を降りていく神代くんを、私は慌てて追いかけました。
「ね、ねぇ待ってよ！　松田くんがどこにいるのか知ってるの？」
「あははっ、いきなりその話題なんて、お姉ちゃんって気が早いんだね。ま、でも僕はそういう気の早さも嫌いじゃないよ。ほら、アメリカ映画とかでよくあるじゃん。脱ぎながらもうガシガシ始めちゃってるみたいな

シーンとか……ああいう気の早さって何だか興奮しちゃうよねー」
「ちょっと、ふざけないで――」
「ふざけてんのはオメーの方だろ」
　振り返った神代くんの視線に思わず全身が硬直します。
　それは幼げな彼の顔からは想像もできないほど、物騒かつ冷酷な目でした。
「……松田くん、松田くん、しつけーんだよ。いいから今は黙って僕の説明を聞いてろや」
　有無を言わせぬ神代くんの迫力に私が気圧されていると――そこで彼は前方に視線を戻し――とん、とん、とん、と跳ねるような歩調で階段を降りていきました。
　そして、ぴょんと踊り場に降り立つと、そこでまた振り返って――
「どうしたの、お姉ちゃん？　早くおいでよっ！」彼はもういつもの無邪気な笑顔に戻っていました。「ほら、早くってば！」
「……う、うん」
　私は戸惑いながらも階段を降りていきました。そして踊り場で待ち受けていた神代くんと合流すると、彼と並ぶようにしてさらに階段を降りていきます。
「じゃあ、まずは希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件の説明から始めよっかな」
　どうやら彼の解決編とやらは、もう始まっているようでした。
「もう何となくわかってると思うけど……希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件ってのは、この旧校舎で起きたんだよ。そう、何もかもここから始まったことだったんだ」
　すべてを一気に収束させていくような語り口はまさしく――解決編を語る探偵役のそれでした。
「確かに最悪な事件だよね。まさしく希望ヶ峰学園始まって以来の最悪の事件だよ。だって、希望ヶ峰学園のエリートで構成される生徒会の人間が十三人も殺されちゃったんだからさ……でもね、そんな最悪の事件を生き残った人間が二人だけいたんだ……一人は重傷を負わされつつ何とか逃げ出した《超高校級の生徒会長》村雨早春で、もう一人は――」
「カムクライズル……」
　――って、あれ？
　思わず口走った言葉に自分でも驚いてしまいました。
「ふーん、珍しく覚えてるんだね……」
　と、神代くんは妙に粘り気のある視線を私に向けましたが、
「……ま、いいけどね」
　すぐに気を取り直したように説明を再開させます。

「何を隠そう、そのカムクライズルってのは、《超高校級の希望》なんて呼ばれる凄い人間だったんだよ。カムクラってのは希望ヶ峰学園が総力を挙げて研究し、育て上げた、言わば希望ヶ峰学園の総決算で、あらゆる才能を身に付けたすべての分野における超高校級だったんだ。まさに希望ヶ峰学園にとっての希望ってヤツだね。だからこそ学園側はその存在を守る為にずっと秘密にしてきて、そのお陰でこの学園の生徒ですら、カムクライズルについては何も知らないんだ。それが男か女かすらね……要はとびっきりの温室育ちって訳だよ」

温室育ち――閉ざされた自分の世界だけで生きているのは私も一緒です。まるで自分のことを言われたようで、思わずドキリとしてしまいました。

「……だけど、そのカムクラがとんでもない事件を起こしちゃったんだ」

そこで神代くんの声のトーンが一気に深刻さを増しました。

「カムクラはよりにもよってこの学園内で猟奇的（りょうきてき）な大量殺人を起こしたんだ……まったく最悪だよね。だって誰よりも希望に溢れていたはずの《超高校級の希望》が、そんな絶望的な事件を起こしちゃったんだからね。それを最悪と言わずして何て言うんだって話だよ」

それが《希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件》と呼ばれている理由――確かに、学園側からしたらそうとしか言いようのない事件です。総力を挙げて育て上げた存在が、前代未聞の猟奇殺人を犯すなんて――最悪としか言いようがありません。

「でも、それだけじゃないんだよ。さらに最悪なことに、事件を知った学園側はその真相を明らかにするんじゃなくて、事件そのものを隠蔽しようとしたんだ」

リズミカルに階段を降りながら語られる彼の話に、私はすっかり聞き入っていました。相槌も打たず、ノートに書きもせず、ただじっと耳を傾けています。

「きっと学園側は恐れてたんだろうね……だって、その事件が知られちゃったら、『才能こそが人類の希望』っていう、この学園の理念が根本から覆されちゃうことになる訳だからね。そうなったら学園の権威は失墜して、下手すればその存続すら危うくなる……だから学園側は事件をもみ消すことにしたんだよ。ま、実際はOBやらからの圧力もあったんだろうけど……でも可哀相（かわいそう）なのは生徒会の連中だよね……」

生徒会――その言葉は勝手に私の頭の中に入り込み、脳のむず痒さと共に、ある記憶を無理矢理掘り起こしてきました。

それは斑井兄弟――事件を執拗なまでに追っていた彼らの顔です。

「だってさ、生徒会の連中は完全に犬死にだもんね。まったく酷いもんだよ。学園の《希望》の為なら何を踏み台にしてもいいのか……予備学科の連中でなくても、そう思って当然だよね」

私は頭を振って、斑井たちの顔を思考の外へと追い出しました。

もう関係ありません。

彼らのことを気にしている場合ではないのです。

「そして、その隠蔽工作を主導したのが、希望ヶ峰学園の実質上のトップである、評議委員会の人たちなんだ。あの人たちは、カムクライズルが単なる生き残りじゃなくて、この事件の犯人だと知った上で、こっそり匿ったんだよ」

「それが……この旧校舎？」

久しぶりに開いた口で聞き返すと——神代くんがコクリと頷きました。

「どっちにしろ、事件が起きたこの場所を放って置く訳にはいかないからね。どうせ厳重に警備して隠すならついでに……そう考えたんじゃないかな？」

二階から一階へと続く階段を降りながら、神代くんは淡々と続けます。

「だけど学園側にとって誤算だったのは……隠蔽されたはずのその事件を利用しようと目論んでいる、厄介なヤツがいたってことなんだ」

「江ノ島盾子……」

私がその名前を口にしたのと同時に——私たちは一階へと到着しました。

「……こっちだよ。付いて来て」

神代くんは迷うことなく、すぐに歩き出します。

「事件の第一発見者である江ノ島盾子はその事件の真相を知っていたんだ。そして、彼女はカムクライズルを引っ張り出すことで……希望ヶ峰学園の転覆を狙ったんだよ」

歩きながら進められる神代くんの解決編も、核心へと突入しているようでした。

「……その後のことは、すべて江ノ島盾子の計画によるものだね。評議委員会の老人たちが揃って行方不明になってる件だってそう。あれも間違いなく彼女の仕業だろうね。きっと評議委員会の連中を力ずくで拉致(らち)することで、カムクライズルの居場所を吐かせようとしたんだろうけど……それにしても、江ノ島盾子は本当に恐ろしくて厄介なヤツだよね。まったく、何が超高校級のギャルだか……」

そんな神代くんの言葉を聞きながら、またむず痒いフラッシュバック——私の記憶が蘇ります。

今度はコンクリートに囲まれた鉄格子の部屋が見えました。そこには無残に両目を縫い合わされた老人たちの死体があります。

「……お姉ちゃん。何をボーっとしてんのさ。こっちだよ、こっち！」

はるか前方に立った神代くんから声を掛けられたところで——我に返りました。

「あっ、ごめん……」

　私は小走りで神代くんの元へと駆け寄ります。彼は一階の廊下の一番奥の突き当たりで足を止めていました。彼の前にはもう壁しかありません。
「多分、このあたりにあると思うんだけど……」
「……あるって何が？」
　そこで神代くんは両手を壁に置くと、何かを探すようにまさぐり始めました。
「……あった、これだよ！」
　しばらくして声を上げた彼の指先に、小さな穴が空いているのが見えました。
「で、こっちは、外にいた警備員が持ってたのを拝借したんだけど……」
　そう言いながら彼がポケットから取り出したのは、細長い棒状の――どうやら鍵のようです。神代くんがその鍵を壁の穴へと差し込みます。すると、カチャリ、と彼の手の中で小さな音が鳴りました。
「ほれ、ずっぽし！　そうじゃないかと思ったんだ！　校舎の中を散々見回したけど、他に怪しい場所なんてどこにもなかったからさ！」
　と、誇（ほこ）らしげに言う神代くんが鍵を回すと――
　ゴゴゴゴゴ――という音と共に、壁が自動ドアのようにスライドして開きました。
　その向こうは一直線に伸びる細長い通路になっていました。奥の突き当たりには物々しい両開きの扉も見えます。
「な、何なの……ここ……？」
「さっきも言ったでしょ？　ここがカムクライズルの隠れ場所なんだよ」
　神代くんはまるで舌舐めずりでもするように言いました。
「……松田くんもそこにいるの？」
「もう来てるのか、これから来るのかはわからないけど……どっちにしても、松田夜助がやって来るのは間違いないだろうね」
　神代くんが先に通路に足を踏み入れ――私はそれを追いました。
　薄暗くて妙にひんやりとした通路に足音を響かせながら、真っ直ぐ奥へと進んでいきます。唇がやたらに乾いていて、濡らそうとする舌までパサパサでした。
　突き当たりまでやって来ると、私たちはそこでいったん立ち止まりました。
　神代くんが無言のまま大きな扉に手を突きます。私がそれを真似して手を突いたところで――彼が深く息を吸い込むのがわかりました。心なしか彼も緊張しているようです。
　そのまま二人で同時に力を込めると――やけに大袈裟な音と共に扉が開きました。
　扉の向こうには、十畳ほどのスペースの、何もない空間が広がっていました。

柱やコンクリートが剥き出しで、いかにも建設途中といった雰囲気が丸出しの、殺風景な部屋でした。

「……お姉ちゃん、あそこ」

神代くんが部屋の隅（すみ）を指差していました。

そこには工場などにあるような簡易エレベーターが見えます。

「きっと、あれだね」

言い終わるや否や、神代くんは力強い足取りでエレベーターに向かって一直線に進んでいきます。私が躊躇（ちゅうちょ）して動けないでいると、彼はエレベーターの扉を手動で開けながら大きな声で言いました。

「ほら、早く来なって！　松田夜助に会いたいんでしょ？」

――松田くん。

その言葉が私の体に熱をもたらしました。

そうです。私は松田くんに会う為だけにこんな危険な場所まで来たのです。きっと松田くんに会えればすべてが解決するはずなんです。この悪夢だって、私の頭だって――何もかもが良い具合に解決するハッピーエンドが待っているはずなのです。

だから私は行かなければなりません！

そう決意した私は一気に歩を進めると、勢いそのままエレベーターに飛び乗りました。乗った瞬間に足元がグラリと揺れ――やっぱり私はもう後悔していました。

「……きっと、このエレベーターはカムクラを隠す為だけに作られたんだろうね。まったく相当用心深い隠蔽だね、こりゃ」

呆れたように言いながら、神代くんは床からせり出したエレベーターの操作盤に手を伸ばします。そこにある行き先ボタンはたった二つだけです。『１階』と『Ｂ階』――神代くんの短い指が迷いなく『Ｂ階』のボタンを押しました。

途端に、仰々（ぎょうぎょう）しいモーター音が響き渡って、足元の床が大きく揺れました。そのままガタガタと不安になるぐらいに揺れ続けた後――エレベーターはゆっくりと下降を始めます。

「……いやはや、楽しみだね！」

すぐに、神代くんが歓声のような声を上げていました。

「何か本当に楽しそうだけど……怖くないの……？」

「あはは、怖いに決まってるじゃん！」

神代くんは笑顔のまま答えます。

「正直言って、めっちゃ怖いよ。逃げたいくらいだね。まったくこんなの初めてだよ。まさか、この僕が恐怖

に怯えるなんてさ……でも、だからこそ楽しいんだよ。だってこの恐怖を乗り越えれば、僕はスパイとしてさらに成長できるはずだからね！　だから僕は逃げないよ。スパイとしてパワーアップする為には絶対に逃げられないんだ！」

　と、そこで根本的な疑問が私の頭をよぎりました。

「ねぇ、神代くん。どうして——」

「どうしてそこまで自分の能力に固執するのかって？　それは愚問ってヤツだよ、お姉ちゃん」

　彼は私の質問を先回りしたように答えます。

「そんなの、水泳選手に『苦しいのにどうしてそこまでして泳ぐんですか』って聞くのと一緒だよ……こだわって当然でしょ。だって僕にはそれしかないんだからさ」

　そう言いながら、神代くんは両手を真上に上げ、ぐぐーっと大きく伸びをしました。

「あ、お姉ちゃんも体を伸ばしておいた方がいいんじゃない？　不測の事態に備えてさ。ほら、やってご覧よ。お胸をツンツーンと張ってさ」

「……ううん、遠慮しとく」

「あははっ！　言うと思った！」

　そうやって無邪気に笑った後で、彼はゆっくりと真剣な顔付きに戻っていき——そして、ぽつぽつと語り始めました。

「僕からスパイ活動を取っちゃったら何も残らないんだ。極端に目立たない子供みたいな男……それだけだよ。でも才能があるってそういうことなんだよね。僕らは才能があるからこそ生き方を選べないんだ。才能を与えられた時点で、僕らはもう決められたシナリオを生きるしかないんだよ……ははっ、まったく偏（かたよ）った生き方だよね」

　才能があるからこそ、そこで戦うことを宿命付けられる——それが偏った生き方と言うならば、あるいはそうなのかもしれません。

「だけど、僕ら自身もその偏った生き方を望んでいるんだ。だからこそ希望ヶ峰学園に来たんだしね。自分が誇る才能でずっと戦っていく為にさ。それはこの学園の他のみんなも、お姉ちゃんだって一緒のはずだよ？　だから戦わなくちゃいけないんだ。たとえどんなに怖くても戦わなくちゃいけないんだよ。これは、『自分を信じて頑張ろう』なんて安っぽいメッセージじゃなくて、義務なんだよ。もしそこから逃げたら、僕らは自分の存在そのものを否定したことになる……だからこそ僕らは戦わなくちゃいけないんだよ」

　正直言って、誰よりも自分自身を、自分の頭を、疑い続けてきた私には、神代くんの気持ちはよくわかりませんでした。

　——だって怖いなら素直に逃げちゃえばいいのに。

――どうせ関係ないんだし。
「……あ、だけど怖いだけじゃないんだよ」
そこで神代くんは弁解するように付け加えました。
「いや、怖いのは確かなんだけどさ……それと同じくらい楽しみでもあるんだよね。カムクライズルや江ノ島盾子、生徒会のエリート連中や松田夜助、それに評議委員会……こんな個性的な面子(メンツ)が巻き込まれたトラブルを解決させるチャンスなんて、そうあるもんじゃないからね。きっとこのトラブルを解決させたら、僕の名前は希望ヶ峰学園の歴史に刻み込まれるに違いないよ。《超高校級の希望》を救い出した伝説のスパイ、神代優兎ってね！」
「……え？　救い出す？」
私は思わず聞き返していました。今まで黙って彼の話を聞いていた私ですが――だからこそ、その言い回しが腑に落ちませんでした。
「救い出すってどういう意味？　だって……希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件の犯人が、《超高校級の希望》って呼ばれるカムクライズルなんでしょ？」
「要は、カムクラも被害者なんだよ。ある意味ではね」
ある意味では――被害者って？
急にあたりが静かになったような――そんな奇妙な感覚に襲われました。
「だけど、評議委員会の連中を始め、今まで誰も《その恐ろしい事実》には辿り着けなかったんだ。だからこそ、カムクラだけが隠蔽なんて理由で閉じ込められている訳だけど……その真相を僕が暴いて、そして《真犯人》を追い詰めたとなれば……それって希望ヶ峰学園史上に残るレベルの大活躍だと思わない？」
途端に、彼の目がギラギラと鋭さを増していきます。
「別にこの学園から感謝されたい訳じゃないけど……でも目に浮かぶよね。学園長が涙を流しながら僕に跪いて感謝している様がさ……あはっ、あはははは っ」
神代くんは笑いながら、くるくるとその場で踊るように回り始めました。まるで興奮を抑えきれなくなった犬のようでした。
「実はさ、もう見出しまで思い付いちゃってるんだよね！　『希望ヶ峰学園の救世主となった《超高校級の諜報員》神代優兎！』ってね！　あはははははははっ、これって目立つね！　すげー目立つじゃん！　もう僕の存在感の無さなんて吹き飛ぶくらいの目立ち方だよねっ！」
そこでようやく――私は彼の本心を垣間見た気がしました。
きっと彼は自分の才能を信じていると同時に、激しく忌(い)み嫌ってもいるのでしょう。

歪んでいる——だけど、きっとそれは彼だけではないはずです。
きっと才能を与えられた者なら誰しも——何となくですがそんな風に感じます。
と、その直後でした。
ガタン——という大きな揺れと共に耳障りなモーター音が止まりました。どうやら、このエレベーターの旅も終わりを迎えたようです。
「……着いたみたいだね」
ようやく狂気的な踊りを止めた神代くんが、静まり返ったエレベーター内に神妙な声を響かせていました。そして彼はエレベーターの扉に歩み寄りながら——
「さてと、もう黒幕たちは来てるのかな……」
「ちょっと待って」
私は思わず、神代くんの肩を掴みました。
「……ん？　どったの？　決戦の前のキスをして欲しいとか？」
「そんなことじゃなくって……」
何だか嫌な予感がしていました。とても嫌な予感がしていました。それでも私は聞きました。聞かずにはいられませんでした。
「ねぇ、『黒幕たち』って、どういうこと？」
神代くんの眉がピクリと動きました。
「あーあ、こりゃうっかりしちゃったな……この一連の事件の共犯者に関しては、みんなが揃った時に、ズビシィと言うつもりだったのになぁ……」
と、神代くんはペロリと舌を出しながら苦笑いをしています。
「共犯者って……」
考えられるのは彼女しかいません。と言うより、私が思い出せる登場人物なんて——他には彼女だけでした。
「それって……戦刃むくろのことだよね？」
「えっ!?　彼女って怪しいの!?」
意外にも、神代くんは驚いた顔になっていました。
「いやぁ、それは知らなかったな！　じゃあ共犯者は二人いるってことだね！　これはこれは……すっかり大所帯になっちゃったね」
今度は、私が驚いた顔になる番でした。
「でも、戦刃むくろじゃないとしたら共犯者って……」

「もちろん、松田夜助だよ」
　その瞬間、衝撃という言葉では表現し切れないほどの激しい衝撃が私を襲いました。極限まで高鳴った心臓の音が悲鳴のように体内で鳴り響き、背筋が痺れるほどの寒気が私から呼吸を奪っていきます。
「ま、この際だから言っちゃうけどさ……そもそも、カムクライズルは犯人なんて呼ばれるべき存在じゃないんだ。カムクラはただ巻き込まれただけの可哀相なヤツなんだよ。実際にそれを仕組んでいたのは江ノ島盾子だったんだ。つまり、彼女はただの第一発見者ってだけじゃなくて、《希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件》を裏で操(あやつ)ってた黒幕だったんだね。で、その女房役として暗躍してたのが松田夜助なんだけど……でも、男なのに女房役って言うのは変なのかな？」
　ひょんなことから再開された神代くんの解決編を――私はただぼんやりと聞くことしかできませんでした。
「きっと、あの二人の関係を知ってるのって本人たちだけだったはずだよ。ま、少なくとも学園側は知らなかっただろうね。だからこそ、学園側は松田夜助に取り調べの協力を依頼したんだろうし……と言っても、それも、そうなるように彼らが仕向けたんだろうけど……とにかく、その結果、江ノ島は学園側の取り調べをかわすことに成功したんだよ」
　私は相槌はおろか反応すらできないマネキン人形と化していました。
　――ところで、彼の言う松田夜助って誰ですか？　どこの松田夜助ですか？
「でも、松田夜助が協力したのはそれだけじゃないんだ。さっきも言った通り、評議委員会の人間が行方不明になってる件も江ノ島の仕業な訳だけども……どうやら松田はその件にも関係しているみたいなんだよ。まったく二人はいいコンビだね！」
　何を言っているのかわかりません。
　と言うか、私の思考が全力で理解を拒んでいました。
　私は知りたくもないことを知らされて――頭が痛い。胸が苦しい。吐き気がする。
「しかも、あの二人が組んでいる決定的な根拠として……僕は見ちゃったんだよね。ま、それを見たお陰で、僕はこの事件の真相に気付くことになった訳だけど……」
　もう聞きたくないっ！
　けれど彼はそんな私に突きつけるように――その続きを口にしました。
「……江ノ島盾子と松田夜助のラブシーンだよ」
　――江ノ島盾子と松田夜助のラブシーン？
　何それ。
　何なのそれ。

何それ。何なのそれ。何それ。何なのそれ。何それ。何なのそれ。何それ。何なのそれ。何なのそれ。何それ。何なのそれ。何それ。何なのそれ。何なんだよおおおっ！

ガラガラと何かが崩れていく音が聞こえました。

私の精神がドミノのように連鎖的に崩れていく音でした。

『松田くん』『江ノ島盾子』『ラブシーン』と、それらの文字が書かれたドミノが、雪崩のように崩れながら倒れていきます。

すべて仕組まれたこと。

江ノ島盾子に仕組まれたこと。

私と松田くんの関係も。そして私の松田くんへの想いも何もかも――仕組まれたこと。

――松田くん。松田くん。松田くん。松田くん。松田くん。

松田くん？

裏切られた――その言葉が私の耳の奥でリフレインしています。

裏切られ、騙され、利用され、操られた――それが真相。

この事件の真相。

事件に巻き込まれた私の真相。

松田夜助。江ノ島盾子。ラブシーン――ガラガラと崩れながら倒れていきます。

と、同時にエレベーターの扉が神代くんの手によってガラガラと開かれていました。

「ほら、お姉ちゃん。とりあえずさっさと出てよ。詳しい話は他のみんなが集まってからするからさ……ほら、早く、早くっ！」

呆然と立ち尽くしていた私は神代くんに背中を押され、エレベーターから追い出されてしまいました。

よたよたと足を踏み出したそこは――天井の高い円形のホールのような空間でした。何だか小さな劇場を彷彿(ほうふつ)とさせます。

「ふーん、なかなかいい所じゃん」

後ろから上がった神代くんの声がホールに反響していました。

「うんうん。解決編を始めるには、なかなか相応(ふさわ)しい舞台かもしれないね……」

確かにおあつらえ向きの舞台と言えました。そこには何もありません。生活感もありません。壁紙とカーペットだけの最低限の内装で、ベッドとタンスが一つずつという最低限の家具――それと部屋の隅に剥き出しの洋式トイレがあるだけでした。広くて豪華な牢獄――それか低予算の舞台のセットといった印象です。

ただ、それよりも気になったのが――そこに誰もいないことでした。

そこには江ノ島盾子も、戦刃むくろも、松田くんも、ここに隠れているはずのカムクライズルさえ――誰もいませんでした。

その場には、今さっき神代くんが語っていた重要人物が誰一人として揃ってなくて、代わりにいるのが、部外者である神代優兎と音無涼子だけという状況です。

でも――本当にそうなのでしょうか？

ひょっとすると、私は大きな勘違いをしていたのかもしれません。私は今までカムクライズルという人物に一度も会ったことがないと思い込んでいましたが――果たして本当にそうなのでしょうか？

もしかすると、彼はすぐ傍で私を見張っていたのかもしれません。自分の謎に辿り着こうとしている人物をずっと見張っていたのかもしれません。

つまり、カムクライズルの正体とは――

神代優兎？

私は即座に振り返りました。

しかし、そこに神代くんの姿はありません。

と、思った瞬間――私の視界が神代くんの姿を捉えました。

彼は私の足元でうずくまっていました。

いえ、うずくまっていると言うより土下座でもするように跪いていたのです。

それなのに――私は彼と目が合いました。

咄嗟（とっさ）に飛び退ります。

あまりに脈絡のない展開への驚愕――

あまりに支離滅裂（しりめつれつ）な結末への戦慄（せんりつ）――

頭蓋骨内の圧力が、いつ鼻血が噴き出してもおかしくないくらいまで高まり、私は歯の根が合わなくなるほどガタガタと震え出しました。

私の足元の神代くんは、土下座のような姿勢で跪いているにもかかわらず――その顔は床ではなく、天井を見ていたのです。

そんなの不可能です。

首が完全に背中の方を向くなんて――生きている人間には不可能です。

つまりは、そういうことでした。

彼はもう――生きている人間ではありません。

首を百八十度回転させた神代くんは例のギラギラとした目で天井を見上げたまま、すっかり硬直していました。ただ、その口から溢れ出す赤い血だけが生き物のように蠢いているだけでした。

　もう彼は、誰の声にも、誰の言葉にも――一切の反応を示しません。
　呆気なさすぎました。
　あまりに呆気なさすぎて、自分が人の死んだシーンに立ち会ったという自覚がなかなか持てないでいました。そのせいですべての反応が遅れてしまいました。本当なら私はすぐにその場から逃げるべきだったのです。だって――神代くんをそんな目に遭わせた人物がすぐ近くにいることくらいは容易に想像がつくはずです。
　――けれど、もう遅すぎました。
「……可哀相だったな」
　エレベーターの脇から、ゆらりと人影が現れました。
　すらりとした体型の色白の男――彼が身に纏っている薄汚れたシャツとズボンは希望ヶ峰学園の物でした。
「こいつも江ノ島盾子とさえ関わらなければ……こんな惨たらしい最期を迎えることもなかったのにな……」
　俯きながら発せられる言葉には、一切の感情が込められていませんでした。
「だ、誰……？」
　私が震えた声で尋ねると――彼はそこで初めて私の存在に気付いたように、ゆっくりと顔を上げました。
「それは……俺に聞いてるのか？」
　疲れ切った表情でした。
　すべてを失ったような顔でした。
　あらゆる思想や、あらゆる意識や、あらゆる感情を失った顔でした。
「……俺のことを覚えてないのか？」
　男は凍えるような冷たい声を発した後――さらに冷たい声になりました。
「どうして覚えていないんだ？」
「ど、どうしてって言われても……あの……わ、私って忘れっぽくてですね……」
　彼によって恐怖と混乱のるつぼに叩き落とされた私は、完全にパニック状態でした。
「え、えっと……ちょっと待ってください！」
　と、慌てて『音無涼子の記憶ノート』に目を落とした――その時でした。
　また脳のむず痒さが私を襲いました。
　そのむず痒さはすぐに痛みに変わります。しかも熱を伴った痛みでした。それは私自身が発した危険

信号のようなものかもしれません。思い出そうとする音無涼子と、忘れようとする音無涼子がせめぎ合い――その摩擦熱が痛みの原因となっているようでした。
「カムクライズルって言ったら……思い出せるか？」
「え……？」
　不意に呟かれたその言葉に――痛みが一気に引いていきます。
「……あなたがそうなの？」
　今、私の目の前にいる男こそが――カムクライズル。
　希望ヶ峰学園の集大成であり、希望ヶ峰学園の象徴であり、
　超高校級の希望と呼ばれる――その男。
　だったら、どうしてですか？
　彼は悲しみの底なし沼から助けを懇願するような目で私を見ていました。
　どうして、彼はそんな目で私を見るのですか？
　わかりません。わからないけど――その目がひどく不気味だったので、私は思わず視線を逸らしてしまいました。けれど、救いを求めるようにさ迷わせた視線は神代くんの死体に留まり――そこでも私は慌てて視線を逸らします。
「知らない方が良かったのにな……」
　私の視線を追ったのか、カムクラも神代くんを見下ろしながら呟いていました。
「下手に関わらなければ、こうならずに済んだのにな……」
　まるで自分に向けられた言葉でもあるような気がして、私は瞬間的に生命の危機を感じ取っていました。
「けど、お前は別だぞ」
「え……？」
「俺が今までどんなことをしてきたのか……お前はしっかり知る必要がある」
　知る必要があるって――は？　どうして私が？
　その疑問を口にするより先に、彼の大きなため息が聞こえてきました。
「それに……俺にも、もう少し考える時間が必要だ……だから、これからどうするかは、もう少し話した後で決めることにした……」
　よくわからない独り言を平淡な口調で呟く彼は、まるで芝居の台詞（せりふ）を棒読みしているだけのようでした。そんな彼の様子に恐怖を覚えた私は、気付かれないようにこっそりとホールを見回します。けれど、そこには換気用のダクトがあるだけで、逃げ込めるような場所はどこにもありません。唯一の出入り口で

あるエレベーターの前には――カムクライズルが立ち塞がっています。
「……で、続きは江ノ島盾子の目的から話せばいいのか？」
　ボリボリと頭を掻きむしりながら語る彼は、私と目を合わせようともしません。むしろ故意に逸らしているようでもありました。
「そもそも《希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件》は、江ノ島にとってそこまで大した意味は持っていないんだ……」
「……え？」
　その一言に、私の意識が吸い寄せられます。
　希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件に――大した意味はない？
「江ノ島はただ、予備学科の連中の鬱積した感情を焚き付けたかっただけだ。その為だけに、あいつは《超高校級の希望》をあんな事件に巻き込み、そして連中を扇動したんだ……いや、扇動なんて生易しいものじゃないな。むしろ、あれは洗脳だ」
「洗脳……」
　痛みを伴った激しい痒みと共に、脳裏にある光景が浮かびました。
　あの地下施設でモノクマヘッズの後頭部越しに見た映像です――頭部を砕かれ、顔を切り裂かれ、絶叫を上げながら、殺し合う赤い肉の塊たち。
「あいつはその為だけに俺や生徒会を犠牲にしたんだよ。落ちこぼれとして扱われる連中の為に、学園が誇るエリートたちが《コロシアイ》させられるなんて……まったく、本当に最悪の事件だろ？」
「コロシアイ……？」
　胸を締め付けられるほどの息苦しい緊張感に耐えながら――それでも私は絞り出すようにして尋ねました。
「コ、コロシアイって……どういう意味？」
「そもそも、希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件は、単なる大量殺人とか、そんな単純な事件じゃない……あれは江ノ島盾子によって仕組まれた《コロシアイ》だったんだよ」
　江ノ島盾子によって仕組まれた――
　コロシアイ？
　は？　殺し合い？
「江ノ島は密室となった旧校舎に《生徒会》と《超高校級の希望》を閉じ込め、その十五人が殺し合うように色んな罠を仕掛けたんだ。武器をばら撒いたり、時間内に殺し合いが起きなければ全員殺すと脅してきたり、実際に見せしめとして殺したり……まだまだ色々あるぞ。あいつはどうすれば全員が疑心

暗鬼になって、殺し合うようになるのか……まるで、それを試しているみたいだった。まったく異常だよな……」

　カムクラはまるで他人事のように淡々と語っていきます。混乱と恐怖の板挟みになって立ち尽くすだけの私は、それをただ聞くことしかできません。

「……そして俺たちは互いに殺し合った。それしか生き残る希望はなかったからな。江ノ島はそんな殺し合いを予備学科の連中に見せつけたんだ……この学園を象徴する《生徒会》と《超高校級の希望》たちが絶望に染まって、醜(みにく)く殺し合う姿を、まざまざと見せつけたんだよ」

　彼はそこで一息つきました。

　けれど、すぐにまた抑揚のない声をホールに反響させます。

「きっと、こうしてカムクライズルが生き残ることは江ノ島の目論見通りだったんだろうな。それは予備学科の連中にとっては最悪の結末だからな……自分たちが恨む《超高校級の希望》が他の希望を叩き殺して生き残るなんて、連中にとってはバッドエンド以外の何物でもないはずだ……それに、学校側がその罪を隠蔽したことすら、江ノ島盾子の目論見通りだったはずだ。だからこそ予備学科の連中は、カムクラだけでなく希望ヶ峰学園さえも激しく憎悪するようになっていったんだ……」

　結局、すべては江ノ島盾子の目論見通り——

　何もかもが彼女のシナリオ通りに進んだだけ——

「で、でも、どうしてそんなこと……予備学科を洗脳なんかして何の意味があるの？　やっぱり、それも希望ヶ峰学園を壊したいから……？」

「……それだけじゃない」

　カムクラはそこで——ようやく私を見ました。

　真っ黒な髪の隙間から覗く切れ長の目で——じっと私を見つめていました。

「あいつの目的は……もっととんでもないことだ」

「と、とんでもないこと？」

「予備学科の洗脳なんて……あいつにとってはまだ種を蒔(ま)いた程度のことなんだ。希望ヶ峰学園にとっての最大最悪の事件なんて……あいつにとってはその程度の価値しかないんだよ」

　カムクラの忌々しげに吐き出す言葉が、容赦なく私に浴びせかけられます。

「俺はその程度のことだけの為に操られ、そして破滅したって訳だ。気付くのが遅すぎたのかもな……いや、気付かないでいようと必死になっていただけか。あいつがそこまで絶望的な人間だと信じたくなかったんだ……それがすべての真相だ。この事件に巻き込まれた俺にとっての絶望的な真相だ……」

「ね、ねぇ……あなたと江ノ島盾子ってどんな関係——」

「お前にとってはどうだ？」
　私の問い掛けは、強い感情が込められた彼の言葉に一瞬にしてかき消されました。
「お前にとってこの事件はどんな意味があるんだ？　お得意の『関係ない』か？　関係ないなら、どうして思い出そうとしてるんだよ？　本当に関係ないなら……ずっと忘れていればいいはずだ」
「……え？」
　どうして――カムクラが私の口癖を？
　それに私が思い出し始めていることも――どうして知ってるの？
「やっぱりそうなんだな？　お前は思い出し始めているんだな？　だからこそ俺のことを思い出せないんだな？　俺がお前にとって大した存在じゃないってことを思い出したからこそ……お前は俺のことを思い出せないんだな？」
　そこでカムクラが両目を剝くと――そこには、猛毒を帯びた憎悪のような眼光がありました。
「……まったく最低なブスだよな」
「え……？」
　そこで、あり得ない考えが私の脳裏に浮かんできました。
　だから、そのあり得ない考えを否定する為に――私はあえて尋ねてみました。
「……だ、誰なの？　カムクライズルじゃないの？」
「違うに決まってんだろ、ど低能」
　そして、彼は吐き捨てるように言いました。
「松田夜助に決まってんだろ」

「結局、お前は思い出さなかったな。他のことは思い出しても、俺のことだけは思い出さなかったな……まったく、どこまで最悪なんだよ。まさか俺がカムクラだなんて、冗談にもならない言葉に騙されるなんて……本当に最悪だな。俺なんて、お前にとってその程度の存在でしかなかったってことか」
「……は？　え？　な、何？」
　まともな言葉が出てきません。背骨を軋ませるほどの寒気に襲われ、奥歯が打楽器のように打ち鳴らされていました。
「ほ、ほ、本当に……ま、松田くん……なの？」

「本物のカムクライズルはとっくにどこかに連れて行かれたみたいだな。だからこそ、俺とお前がここに残されたんだ……まるで仕組まれたみたいにな」
　頭の中に浮かんでいたあり得ない考えが、具体という名の装備を得て、より強固なものへと変わっていきました。それを打ち消したい私は、すがるように開いた『音無涼子の記憶ノート』を一心不乱にめくって、状況の打開策を必死に探します。
　しばらくすると、その手が止まりました。
　そこにはノートいっぱいに描かれた松田くんの似顔絵がありました。視線を上げて、もう一度目の前の人物を確認したところで――思考の中でバラバラだったパズルのピースが一気に組み上がっていきました。
「ど、どうして……？　だって私は何も……」
　胸の鼓動も、感情の昂ぶりも――
「……わかってる。何も感じていないんだろ？」
　皮肉にもその言葉が――彼が松田くんであることを証明していました。
　だって、私が松田くんをどうやって覚えていたのか――それを知るのは私以外には松田くんしかいないはずなのです。
「それは、お前が思い出し始めているからだよ。お前は記憶を取り戻し始めているからこそ……俺のことを何とも思わなくなっているんだ」
「……え？」
「結局、お前にとって俺という存在は特別でも何でもなかったってことだ。だけど、お前はその事実を忘れていた……だからこそ俺に特別な感情を抱いていたんだよ」
　松田くんは特別な存在なんかじゃない？
　それを忘れていたからこそ――私は松田くんを特別だと思っていた？
「な、何それ……全然わかんないよ……」
　無理矢理笑おうとした顔は――けれど苦笑いにしかなりません。
　そこで、またまた――猛烈な脳のむず痒さ。
　私は思い出していました。松田くんに会ったら言おうと思っていたことや、松田くんに会ったらやろうと思っていたことや、そもそもどうしてそんなに松田くんに会いたかったのか――その理由を呆気なく忘れてしまっていたことを、私は思い出していたのです。
「な、何これ……なんで……」
　途端に、私は何もかもが信じられなくなっていました。

松田くんも、私自身も――

そしてこの世界も――

自然と私は後ずさりをしていました。けれど、その足もすぐに止まります。後ずさりしていた背中が壁に当たり――私はそこで立ち止まってしまいました。

松田くんはそんな私を追い詰めるような足取りで、じりじりと歩を進めてきます。

「ま、松田くん？　どうしちゃったの……？」

私が怯えたような声を上げると、

「……どうしたんだろうな？　こっちが聞きたいくらいだ」

と、彼は青い顔で答えます。

息を呑む緊張感の中――私は恐る恐るその名前を口にしました。

「そ、それってもしかして……江ノ島盾子のせい？」

すると彼はそこで立ち止まり――突き刺すような視線で私を睨みます。

「……あぁ、きっとそうだな」

その鋭利な視線に、私は完全に射すくめられてしまいました。

――これが松田くんの目？

――あなたは本当に松田くんなの？

咽喉まで出かかった言葉を慌てて飲み込みました。今それを聞いてしまえば、これ以上良くないことになるのは目に見えています。

「……ねぇ、松田くん。もうこんなのやめようよ」

追い詰められた私は、そんな風に懇願することしかできません。

「とにかくさ、いったん研究所に戻ろうよ。それで楽しくおしゃべりでもしながら私を治療してよ。そうすればきっと……何もかも元通りになるんだって！」

私の懇願は最後には叫び声へと変わっていました。

だって、こんなのおかしいです！

こんなの絶対におかしいんです！

「……もう遅いんだ」

けれど――松田くんは首を振っていました。

「もう俺は引き返せない。俺もお前も……もう元には戻れないんだよ……」

凍えるような彼の声に、私の全身が急速に冷めていきます。

「ど、どうして……そんなこと言うの？」

「お前こそどうしてそんな残酷なことを言うんだよ」
　松田くんは凍える声のまま、苛立ったように声を荒らげていました。
「俺が江ノ島盾子を守る為に何をしたのか……まだ思い出せないのか？　そうか、だったら思い出させてやるよ……」
「も、もういいって！　そんなことなんて忘れて、一緒にどこかに逃げようよっ！」
「忘れたところで結局は一緒だ……それはお前が一番よくわかってるはずだぞ」
「そんなのわかんないよっ！」
　私は堪らずに全力で叫んでいました。
　けれど松田くんはそれを受け止めようともせず――
「……いいから聞いてくれよ」
　でも、どうして――そんなに悲しそうな顔で言うの？
　本当に悲しいのは――私の方なのに。
「希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件……あの事件ですべてが変わったんだ。いや、あの事件で俺はようやく気付いたんだよ。それまで普通だと思っていた暮らしが、俺を操る為だけに用意された偽物でしかなかったことにな……」
　それは誰に聞かせるものでもなく、私に聞かせるものでもなく――ただ自分だけに言い聞かせているような語り口調でした。
「俺は江ノ島にずっと騙されていたんだ……ずっと、ずっとだ……それでも俺はあいつを放っておけなかった……俺ならあいつを救えると思っていた。俺ならあいつを止められると思っていた……そう思わされていたんだ」
　彼の声が、次第に悲痛な色へと染まっていきます。
「俺はあいつを守る為に……あいつ自身を隠そうとした。だけど、あいつはそんなことなんてお構いなしに、今度は評議委員まで殺して……だから、俺はその死体まで隠したんだ。あいつの為に処分したんだよ」
　彼の話に耳を傾ける私の脳裏に、今までの光景が次から次へとフラッシュバックしていきます。脳のむず痒さを感じる暇もありません。
「それだけじゃない……俺はあいつの為に人まで殺したんだ。事件の真相を知っていた村雨早春を口封じの為に殺したんだ。そこの神代優兎だってそうだ……江ノ島を守る為には、そいつらを生かしておくことはできなかった。だから……殺した……」
　松田くんの口から畳み掛けられる衝撃的な事実の洪水に、私はすっかり飲み込まれていました。だけ

ど、どうしても聞かなくちゃいけないことがあって──だから私は溺(おぼ)れたような途切れ途切れの声で尋ねました。

「そ、そんなに大事なの……？　江ノ島盾子は……松田くんにとって……そ、そこまで大事な人なの……？」

「大事だ」

　松田くんは何の迷いもなく即答していました。

「ど、どうして……そんなに大事なの……？」

　恐怖と困惑の涙が洪水の勢いに拍車をかけ──私は押し流されそうになりながら、ほとんど死に物狂いでか細い声を上げました。

「あいつは俺に言ってくれたんだ。俺が大切だった存在を失った時に、言ってくれたんだよ。『これからは私が夜助くんの大事な存在になってあげるよ』だってさ……まったく、どんだけ図々(ずうずう)しいんだよな……でも、その図々しさのお陰で俺は独りぼっちにならずに済んだんだ。あいつは家族でも、恋人でも、友人でもないけど……俺にとってはそのすべてと同じくらい大事なんだよ」

　すべてと同じ──それが松田くんと江ノ島盾子の関係。

　──もう、何もかもが終わった気分でした。

　いえ、むしろ最初から終わっていたんです。最初から勝てっこなかったんです。

　過去を持てない私なんかが──江ノ島盾子に勝てっこなかったんです。

　悔しさも、嫉妬(しっと)も、そこにはありません。

　もう終わったんだという自覚があるだけでした。

　私は大きなため息を吐き出しました。そこには、この世界のすべてに対する諦めが込められていました。

　と、その時です。

　ガシャンという物音が聞こえ、とっさに松田くんが振り返りました。

　その肩越しに私は見ました。

　エレベーターの中から現れた彼女の姿を見ました。

「時間ぴったり……だったみたいだね……」

　ファッション誌から飛び出してきたような派手なメイクに、ふわふわと大きく膨らんだ金髪。着崩した制服の胸元はバカみたいに大きく開き、頭が悪いほど短いスカートからは白くて長い足がスラリと伸びて──

「江ノ島盾子！」

私は確信を持って叫びました。

「……江ノ島盾子？」

松田くんは疑問交じりに呟きました。

――あれ？

「あ、別に邪魔しに来た訳じゃなくって……」

何も言ってないのに、彼女の言葉は弁解から始まっていました。

「私はただ補足説明に来ただけで……だって、そういうシナリオらしいから……」

それは金髪ど派手メイクとは不釣り合いなオドオドとした口調で――って、何かおかしくないですか？

「えっと、その説明って言うのは……この格好を見ればわかると思うけど、要は私も盾子ちゃんのシナリオに操られて、演じさせられてただけで……うん、そういうことなの」

そこで、またしても強烈な脳のむず痒さに襲われました。それは脳を滅茶苦茶に掻きむしりたくなるほどの痒みで――と、その直後です。

視界が一気に開けるような感覚と共に、私は思い出しました。

目の前に立つ彼女の顔を思い出しました。

私は今までその顔を江ノ島盾子としてではなく、別の誰かとして見ていたはずです。

そう、それは――戦刃むくろの顔だったはずです。

けれど、そこで新たな疑問が頭をよぎります。それが戦刃むくろだということは今の私だからこそ気付いた事実であって――以前の忘れっぽい私だったらどうでしょう？

派手なメイク、金髪、着崩した制服、頭が悪いほど短いスカート――そんな変装をした彼女を見て、それを戦刃むくろと結び付けることができたでしょうか？

「じゃあ、もしかして……私が知ってる江ノ島盾子って……」

「ごめんなさい」

彼女はペコリと頭を下げました。

「種明かしするとね……あなたと会っていた時の江ノ島盾子もどきって、実は私だったんだよね……」

江ノ島盾子もどき――つまり偽者ってこと？

「でもね、別に私がやりたくてやった訳じゃなくて……それも盾子ちゃんにやれって言われたからで……だから台詞もほとんど盾子ちゃんが用意してくれてたし……」

でも、だったら――本物の江ノ島盾子って――

「でね、ここが一番大事なんだけど、どうして私がそんなことしたのかって言うと――」

「俺が江ノ島盾子を隠したからだろう？」

　松田くんの苛立った声が、彼女の言葉を遮ります。

「俺が隠したせいで本物の江ノ島盾子はいなくなった……だから、お前はその隙を突いて江ノ島盾子になりすましたんだ。そうすることで、こいつに江ノ島の存在を信じ込ませようとしたんだ。そうだろう？」

「……え、えっと、どういう意味？」

　私に江ノ島の存在を信じ込ませるって――どうして？

　最高に訳がわかりません。

　これって何の謎かけですか？

「つまり……江ノ島には俺がどう動くのかも計算ずくだったってことか。俺があいつを隠すこともあいつにはお見通しで……そして、あいつはそんな俺の様子を今も傍観して楽しんでいるって訳か……」

　――傍観している？

　私は慌ててホールの中を見回しました。傍観しているということは、きっとどこからかこの様子を覗き見ているはずだと思ったのですが――けれど、ホールのどこにも覗き穴や隠しカメラの類は見当たりません。あれ？　どうして？

「まったく、本当に最悪だな……あいつがここまで絶望的なヤツだったなんて……信じたくないけど……きっと、あいつが俺に近付いてきたのだって……」

　何かを言い掛けていた彼の言葉は、そこで消えてなくなってしまいました。

　私にはもう、彼の気持ちがわかりませんでした。

　私に向けて江ノ島盾子への想いを激白したり――

　私に向けて江ノ島盾子への恨みを語ったり――

　何もかもが絶望的なまでに理解できませんでした。

　ただ、それでも確かなことはあります。

　それもまた絶望的なまでに――確かなことがあります。

「きっと、松田くんは彼女のことが大好きで……だけど大嫌いなんだね？」

「そうだな……」

　松田くんは静かに頷きました。

　私の言葉を肯定していました。

　やっぱり、諦めるしかないようです。

　すべてを諦め、すべてを終わらせるしかないようです。

　ここが私の世界の終わり。

　ここが私と松田くんの世界の終わり。

　そう諦めた瞬間に、私の精神にゆっくりと緞帳(どんちょう)が下りていき――ドキン。
　――あれ？
「だからこそ……もう終わらせないと駄目なんだよ」
　松田くんは両手で顔を覆いながら、大きなため息を吐き出しました。そして再び顔を上げると――そこには確固たる決意が漲っていました。
「多分、あいつを守ろうとする俺の気持ちこそが……本当の絶望なんだ。だから俺が終わらせない限り……この絶望は終わらないんだ」
　それは、すべてを諦めたような――何もかもをふっ切った声でした。
「だったら、俺が終わらせるしかないよな……」
　その眼差しには、怒りや悲しみや愛情や憎悪といったすべての感情がどろどろに煮詰められていて、それなのに彼は不思議と穏やかな顔付きでした――ドキン。ドキン。
　――あれ、どうして？
「俺は江ノ島盾子を他の人間と関係させたくなかった……それがあいつを守ることだと思っていたんだ……」
　松田くんがゆっくりとした歩調で、私との距離を狭めていきます。
「だから俺はあいつを隠した……必死に隠そうとした……」
　ドキン。ドキン。ドキン。ドキン。
　松田くんが近付くにつれ――私の胸の鼓動もさらに高鳴ります。
「……でも無駄だったな。これだけの犠牲を払ってもどうにもならなかった。それどころか、江ノ島はこれだけの犠牲を払った俺のことさえ何とも思っていなかったんだ……結局、あいつは自分と関係した人間を絶望させることしかできないんだ。だからこその絶望なんだ……それを俺は、ようやく身をもって理解できたよ」
　私も、やっと理解できました。
　この胸の鼓動――私は今頃思い出していたのです。
　すべてを諦めた今頃になって、ようやく松田くんへの想いを思い出していたのです。
　きっと、これも江ノ島盾子のシナリオのせいなのでしょう。
　この絶望の為に――今更思い出させるよう仕組まれていたのです。
「だから俺は決めた……もう終わらせることに決めたんだ……」
　松田くんは私の眼前でようやく立ち止まりました。
　それは、つま先同士が触れ合うくらいの距離で――私は高鳴り続ける胸の鼓動を感じながら、上気し

た顔でじっと彼を見つめています。
　すると松田くんは抱き締めるように――その手を私の首へと巻き付けました。
　私はされるがままでした。
　きっと仕方がないんです。こうするしかないほど、彼の中にいる江ノ島盾子の存在は大きいのです。誰よりも松田くんのことが大好きな私だからこそ、それがわかるんです。
　でも、やっぱり最後くらいは――
　私と松田くんの世界だけで終わりたい。
　それが私の抱いた――最後の希望でした。
「これも……江ノ島盾子の為なの……？」
　そんな淡い希望を胸に、私は恐る恐る問い掛けます。
「……いや、俺の為だ」
　そう言って、松田くんは首を振りました。
「……そっか。じゃあいいや」
　そう返した言葉は――自分でも驚くくらい穏やかな声でした。
　私はもうとっくに受け入れていたのです。
　音無涼子の終わりを、すっかり受け入れていたのです。
「もう何も思い出す必要はないぞ……」
　優しく語る彼の温かい吐息が、私の頬に当たります。
「……これで、すべて終わりなんだ」
「うん、わかってる。どうせ私には関係ないしね……」
　そして、ゆっくりと――彼の手に力が込められていきました。
　けれど苦しくはありません。
　むしろ、その手の平がとても温かくて気持ち良かったので――私は微笑んでさえいたと思います。
　ドキン。ドキン。ドキン。ドキン。
　ドキン。ドキン。ドキン。ドキン。
　激しい鼓動。発熱した全身。騒音のような耳鳴り。
　やっぱり少し怖いけど、そこで目が合った松田くんが極度のストレスから解放されたような優しい顔になっていたので――
　――あぁ、やっぱり松田くんだ。
　その顔を瞼に焼き付けたまま――私はゆっくりと目を閉じました。

　このまま終わる。
　すべてが終わる。
　ようやく終わ――らないよ。
「うぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷ」
　突然でした。
　聞き覚えのある禍々しい笑い声が、耳の奥で反響を始めました。
「ほら、前に言ったでしょ？　いつかオマエを殺してあげるってさ……約束を守りに来たんだ。もう忘れたとは言わせないよ……うぷぷぷぷ」
　興奮したようにまくし立てられる声に目を開けると――視界いっぱいに松田くんの驚いた顔が映っていました。
　その背後に、黒い影が立っています。
　――超高校級の絶望。
　その影は松田くんの背後から、ゆっくりと私に顔を近付けてきました。そして松田くんと並ぶくらいの距離になったところで――影の中に浮かんだ顔が、ようやく私の目にもはっきりと見えました。
　今なら思い出せます。
　その顔は――私でした。
「うぷぷぷっ！　そう、そうなんだよっ！　最初から音無涼子なんてどこにも存在してなかったんだよ！　うぷぷ、笑っちゃうよね！　絶望的すぎて笑っちゃうよねっ！」
　そんな声を発しているのも、また――私自身でした。
　最後に私は思い出しました。
　ようやく、何もかもを思い出しました。
　と同時に――すべてが崩れて終わっていきます。
　どこまでも不変だと思われていた景色が簡単に、そして完璧に崩れ去っていきました。そのあっけなさは砂で作った建造物を連想させます。それは、どんなに精巧に強固に作ったところで、いとも簡単に崩れ去る砂の建造物でした。
　私の全身の皮膚や、肉や、骨が、ボロボロと乾いた砂のように崩れていき――そのまま私は消え失せていきます。
　すべてが崩れ、すべてが元通りになっていきます。
　私の世界が終わり、彼女の世界が作られていきます。
　それが私の、音無涼子の――

最期でした。

こうして、すべてが本当に元通りになりました。

両手に込めた力が徐々に弱まっていき、全身から力が抜けていく。

そして松田は遂に、《彼女》の首から手を離した。

──カラン。

足元で音が鳴った。血に濡れたナイフが落ちている。希望ヶ峰学園の刻印が入ったナイフだった。その周辺にぽたぽたと赤い血が垂れていき──やがてそれは大きな血溜まりになっていった。

自分の腹に手をやると、ぬるりと温かい感触があった。



そこで松田は《彼女》に視線を戻すと——

「……おい、ブス」

苦しげに口を開いた。

「し、死ぬ前に言っておくけど……俺がお前に言ってたのは嘘だぞ。あれは治療なんかじゃない。その逆だ。俺はずっと……お前が思い出さないようにしていたんだよ……」

知ってるよ——と、そんな声が聞こえた。

そう答えた《彼女》の口元は——奇妙に歪んでいた。

きっと笑っているのだろう。

ナイフ越しに味わった松田の肉の感触に、笑っているのだろう。

そこで松田は確信した。

音無涼子は——もういない、と。

「あ、ちなみに……なんですけど」

と、そこで戦刃がボソリと声を上げた。

「私がこの格好で盾子ちゃんもどきを演じていたのは本人の前だけで……あ、一回だけ斑井に見られちゃったけど……でも本当にそれだけで……」

「あ、当たり前だろっ……」

恨めしげな声と共に、松田の口から吐血が撒き散らされる。

「し、知ってる人間が見ればすぐにわかる……いくら姉妹と言っても別人だ……それに俺の前に現れた江ノ島は……間違いなく本人だったからな……」

『別人』という言葉を聞いた戦刃は、ムッとしたように松田から視線を逸らすと、そのまま《彼女》だけに向かって言った。

「だから……今回の件では、変装した私とは別に、盾子ちゃん本人もちゃんと暗躍してたんだよ……ただ、それを盾子ちゃん本人だけが気付いていなかっただけ……だからこそ、余計に盾子ちゃんは自分に騙されちゃったんだけどね」

「け、結局……お前の目論見通りって訳か……最初から最後までずっと……」

松田も《彼女》に向けて声を上げる。喋りながらも意識が朦朧として、立っているのがやっとだったが——その弱々しい視線だけは、ずっと《彼女》に向けたままだった。

「だ、だけど一つだけわからない……お前はどうしてこんな面倒なことを仕組んだんだ。ど、どうしてわざわざ俺に記憶を奪わせたんだ……学園側の取り調べから逃れる為……いやそうじゃない……その程度ならお前だけでも何とかなったはずだ。だ、だったら……どうして……」

　足元さえおぼつかなくなった松田は、遂にその場に腰を落としてしまった。それでも松田は絞り出すような声で、さらに問い掛けていく。
「……い、一方的にお前を想い続ける俺を……ぜ、絶望させたかったか……？」
　すると《彼女》はようやく動いた。
　そっと伸ばしたその手が――松田の頬に触れる。
　まるで愛（いと）おしいものに触れるような手付きで松田の頬を撫でた後、《彼女》は血で汚れるのを気にも留めず、ペタンとその場に座り込んだ。
　そして、目を細める松田の顔にゆっくりと自分の顔を寄せ――囁いた。
　教えてあげる――
　そんな愛でも囁くような優しげな口調の後で――しかし、それは豹変（ひょうへん）した。
「はぁあ？　自意識過剰すぎだっつーの！　アンタごときを絶望させる為に、こんなクソ面倒なことする訳ねーだろ！　何を思い上がっちゃってんの？」
　言い終わるや否や、《彼女》は突き飛ばすように、松田の顔から手を放した。
　松田は自らが作った血溜まりの中に力なく崩れ落ちていった。
「ど、どうでもいい……ってことか……」
　仰向けに倒れた松田は天井を見上げたままで呟いた。
　その顔を《彼女》が真上から覗き込んでいた。ほとんど顔と顔とが触れ合いそうな距離だったが――それでも松田の視界に映る《彼女》の顔は、ピントが合ってないようにぼんやりと歪んでいる。
「俺なんて……関係ないってことか……や、やっぱり、そうだったんだな……」
　溢れ出してくる血のせいで咽喉の奥に尋常じゃない熱さを感じた。しかし、それも――次第に消えていく。
「そ、それはいつからなんだ……こ、子供の頃からずっと……そうだったのか……？」
「うぷぷぷぷ」
　そこで《彼女》は残酷な笑みに顔を歪めた。
　無慈悲な視線が、ねっとりと松田に絡みついてくる。
「例えばさ……アンタの母親がおかしくなったのも、アタシのせいだって言ったら、アンタはどんな顔するの？」
「……なっ！」
　心臓に針が刺さったような鋭い痛みが走った。
「じょ、冗談……だろ？」

震える声と共に、松田の口から撒き散らされた鮮血が《彼女》の顔に飛び散った。それが彼女の笑みの残酷さを、凄惨さを、より際立たせていく。

「こ、答えろ……どうなんだ……」

松田が深刻になるほど、江ノ島はむしろ恍惚とした表情になっていく。《彼女》は何も答えないまま、おちょくるように小首を傾げるだけだった。

松田の精神が絶望の底へと沈んでいく。

自分の存在意義を徹底的かつ決定的に蹂躙(じゅうりん)され、却下され――

彼はすべてに絶望し切っていた。

「こ、答えて……くれよ……た、頼む……」

すがるように発せられた言葉は――ほとんど言葉にすらなっていなかった。

「なぁ、どうなんだよ……江ノ島盾子……」

そこで終わった。

その答えを聞くことなく、松田夜助は終わった。

すべてに絶望し切ったまま――終わった。

すべてが終わったのを見届けた後で――江ノ島盾子はゆっくりと腰を上げた。

だが、そこで動きを止めた彼女は、しばらく彼を見下ろしたままだった。

息絶えたばかりの松田夜助をじっと見下ろしたままだった。

「関係ない訳ないじゃん……」

ボソリと呟いた声は――どこか物悲しげだった。

「だって……誰よりも大切な人だったんだからさ……」

それは本心だった。

松田夜助は江ノ島盾子にとって特別な存在だった。彼は幼い頃からいつも自分を庇ってくれたし、そして自分に無償の愛を与え続けてくれたし、何より彼の傍にいるだけで彼女の心はとても温かくなった。

だが、彼女はそんな存在を自らの手で殺した。踏みにじり、絶望の奈落に叩き落とし、そして惨たらし

く殺したのだ。
「こんなの……こんなのって……」
　しかし、それは――江ノ島がずっと望んでいたことだった。
　こんなに大好きで、かけがえがなくて、何よりも大切で、狂おしいほど愛してて、ずっと抱き締めていたくて、他に何もいらなくて、世界には彼だけがいればいい――そんな特別な存在を失ったら――アタシはどれだけ絶望するのかな？
　彼女はそれを味わう為にずっと松田との愛を育（はぐく）んできた。最愛の人が絶望にまみれて死んでいく姿を思い浮かべながら、彼との時間を大事に生きてきたのだ。
　そして、ようやく味わったその絶望は――
「……最高じゃないいいいいいいっ！」
　想像以上の絶望だった。
「悲しすぎるっ！　辛すぎるっ！　胸が裂けそうっ！　最低の自己嫌悪よっ！　もう死んじゃいたい！　これがっ！　これが大事な人を失う絶望なのねっ！」
　江ノ島はその絶望に身を震わせながら――松田夜助の死体を力一杯蹴りつけた。
「すごい、すごいっ！　すごいすごいすごいすごいすごいっ！」
　彼女はひたすら絶叫しながら、ずっと恋焦がれ、堪らなく大好きで大切だった人間の死体を、容赦なく徹底的に蹴りつけていった。
　そんな彼女の目からは、大粒の涙が溢れ出している。
　歓喜とも慟哭ともわからない涙を圧倒的な勢いで垂れ流しながら――彼女は最愛だった人間の死体を、原形をとどめない肉塊と化すまで、ひたすら蹴りつけていった。

「うぷ……うぷぷぷ……うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ。うぷぷぷ」

　霧切響子が目を覚ましたのは保健室だった。

　窓の外が暗くなりつつあった。いつの間にか夕方になってしまったようだ。

　響子がゆっくりとベッドから体を起こすと――

「気が付いたみたいだな」

　窓際から男の声が聞こえてきた。希望ヶ峰学園長の霧切仁（じん）だった。

「ぐっすり寝ていたな。疲れが溜まっていたんじゃないのか？」

「私……いつの間に寝たの？」

「いくら言ってもじっとしないから学校医が薬を飲ませたんだ。まだ朦朧としているはずだ。もうしばらく大人しくしておいた方がいいぞ……」

　確かに、意識と感覚がボンヤリとしていた。彼の言葉に従うのは癪（しゃく）だったが――さすがに薬に逆らうことはできない。響子は仕方なくベッドに倒れこんだ。

　――と、そこで彼女は思い出していた。

　戦刃むくろに助けられた時のことを思い出していた。

　斑井兄弟に追い詰められていたところに、彼女がタイミングよく現れ、そして自分を助けてくれたのだ。

　だが、どうして彼女は自分を助けに来てくれたのだろうか？　彼女とはクラスメイトではあったが、今まで滅多（めった）に話したこともなかったはずなのに――

　けれど、それ以上に気になることがある。

　自分と一緒に斑井に襲われた彼女――江ノ島盾子はどうなったのだろうか？

　響子は、思い切ってその質問を霧切にぶつけてみた。

　すると――

「……彼女も君と同じように戦刃くんに助けられたようだ。だが、強く頭を打ったみたいでな……教職員棟の方の医療施設に一時的に入院しているよ。それでも不幸中の幸いと言うか何と言うか……その時のショックによって彼女の記憶が戻りつつあるらしいんだ」

「記憶が……？」

「じきに授業にも復帰できるはずだ。ただし、彼女は記憶がなかった頃のことは覚えてない。そのせいで色々と混乱しているようだから……みんなで面倒を見てやってくれ」

「そう……」

　クラスメイトの無事と復帰を喜ぶべきだとは思うのだが――何か釈然としなかった。

　何か出来すぎている気もするのだが――

「それと……君には大事なことを一つ伝えなければならない」

　そこでの彼の言葉が、響子の疑念を一気に吹き飛ばしてしまった。

「……カムクライズルの捜索依頼は取り下げさせて貰うぞ」
「えっ……？」
　突然の通告に、響子は慌てて身を起こした。
「……どうして急にっ!?」
　と、彼女が責めたてるような口調で問い掛けると――
「悪いが、それを言うことはできないんだ」
「そ、そんなのっ――」
「では、君の仕事内容に満足できないから……そう言えば納得するか？」
　有無を言わせぬその言葉に、響子は思わず眉をひそめる。
「……じゃあ、カムクラはどうなったの？」
「そう言えば、ちょうど今日付けで、旧評議委員会のメンバーの代わりに新しいメンバーが就任したんだ」
「話を逸らさないで」
「メンバーが替わったせいで機密に関する決まりごとが増えたんだ。いくら君といえど、今後はうかつなことは話せない……」
　それは響子を拒絶するような一言だった。そんな言葉を聞かされた彼女は恨み言のように呟くことしかできなかった。
「何よ今更……」
「だったら仕返しに、私が今まで君に話した機密事項をバラしてみるか？　君の探偵としてのプライドが許すなら好きにすればいいさ」
　まるで挑発するような彼の口ぶりに響子は面食らっていた。さっきからずっとそうだ。その内、『今まで利用する為に騙していただけだ』とでも言い出しかねないような態度だった。実際そう考えるのは簡単だが――そんな単純な理由だけではないような気もする。でも、どうしてそんな気がするのだろうか――
　これも探偵としての勘？
　それとも――親子だから？
　慌てて頭を振った。
　最後に浮かんだ思考を振り払うように、響子は語気荒く言う。
「……わかったわ。依頼は取り下げて構わない。だけど、せめて一つだけ教えて欲しいことがあるの……」
　霧切は窓の外を見たままじっと黙り込んでいる。

「……松田夜助はどうなったの？　それに斑井兄弟は？」
　しばしの沈黙の後――霧切は大きなため息を吐き出した。そして目を伏せたまま、保健室の扉に向かって歩き出した。響子はそんな彼をじっと目で追い続けている。すると彼は扉の前で立ち止まり――そのまま振り返らずに背中越しに言った。
「退学処分……ということで処理されるらしい……」
　重苦しい言葉の調子は、怒っているようでもあった。
「それも新しい評議委員会の意向だよ。今回の問題はより厳重に隠蔽され、闇に葬（ほうむ）られることになった。関係者である松田くんや斑井くんを始め、他の何人かもまとめて退学処分ということになるらしい」
「……止めないの？」
「私は事後報告を受けただけだ。彼らはもうこの学園にはいないよ。さすがの君でも彼らの行方を掴むのは不可能だろうな……」
　一際大きな息を吐き出した後――霧切はそこで歯噛みするように漏らした。
「それにしても都合のいい展開だな……まるで誰かが裏で操っているみたいに都合の良すぎる展開だ……」
　しかし、すぐに首を振る。言ったことを後悔しているような仕草だった。
「……依頼なんかなくても私は勝手に調べるわよ」
　霧切の背中に向けられたその言葉には、強い決意が込められていた。
　それを聞いた霧切は――やはり振り返らずに言った。
「探偵というのは事件が終わるまでは何もできない……すべての犠牲者が出尽くすまでは役に立たない……それは優秀な探偵であればあるほどそうだ。だが君はそうではないと思う。私は、君には探偵として以上の素質を感じているんだ。今までいろんな才能を見てきた私の言葉だ。少しくらいは参考になると思うぞ」
「……何が言いたいの？」
　響子の声が強張っていた。
「囚われる必要はないということだ……」
　そこで霧切は自分の肩越しに響子に視線を向けた――彼女は怒りで強く唇を噛み締め、涙ぐんでいるようにさえ見えた。
「それと最後に一つだけ言っておくぞ。君が調べるのは勝手だが、もし少しでも危険な行為に及んだり、校則に触れるようなことがあれば……今後は一切許すつもりはない。覚悟しておいてくれ。もしそれが守れないなら、この学園から出て行ってもらうことになるからな」

一方的に言って、霧切は保健室を後にした。もう響子の反応を待つこともなかった。

そして廊下に出ると――そこでまた大きなため息をついた。

いくら彼女を事件から遠ざける為とは言え、さすがに心が痛んだ。だが彼女は優しく言って聞くタイプではない。これも仕方のないことだった。

事態はすでに霧切の想像すら超えていた。

旧評議委員会が揃っていなくなったのを見計らったように、新しく就任した評議委員会のメンバーたちは、いずれも各界で重要なポストを担っていた人物ばかりだった。

そんな彼らは就任早々、カムクラプロジェクトの終了を宣言した。

それは、《超高校級の希望》カムクライズルの存在自体をなかったことにするという意味だった。あまりに呆気ない幕切れだ。霧切が中心となって、希望ヶ峰学園が長年かけて育て上げた希望の象徴は――こうしてあっけなく終わりを告げたのだ。

そこから先の、新評議委員会の面々の行動は迅速(じんそく)だった。彼らはあの手この手で事件の隠蔽工作を手際よく行っていった。まるで、すべてを誰かに指示されているかのようだった――

いつの間にか、霧切は急ぎ足で廊下を進んでいた。

そして急ぎ足で歩きながら――ふと窓の外に視線を移す。

これですべてが終わったとは、どうしても思えなかった。

むしろ、これから何かが始まろうとしているような気さえしている。

きっと、それはとても良くないことだ。

とても良くないことがこの学園から始まり――そして世界を飲み込もうとしている。

それはもう誰にも止められない。

そんな予感に、霧切は得体の知れない寒気を感じていた。

だが、それが霧切にある決断をさせていた。

生徒たちを守る為にも、《例の計画》を急いだ方がいいかもしれない。しかし、新しい評議委員会の連中に気付かれない場所となると――もう旧校舎くらいしか可能性はないかもしれないな。

そんな考えを巡らせている内に、霧切の足はほとんど駆け足のようになっていた。

だが彼は気付いていなかった。自分自身ですら気付いていなかった。

そんな彼の口許が――かすかに歪んでいたことに。

きっと彼はどこかで勘付いていたはずだ。世界を震撼させるほどの悪魔的な才能が、すでにこの希望ヶ峰学園に潜んでいるということに――

だからこそ、彼は慄(おのの)くと同時に、その存在に興味を抱いていたのかもしれない。

だが、そうだとしても——

さすがの彼でも、その先のことまではわからなかったはずだ。

やがてその才能によって世界が絶望に染め上げられ、そして彼自身もその絶望によって蹂躙されることになるとは——

この時の霧切仁には、まだ知る由もなかったはずだ。

久しぶりに戻って来た寄宿舎の自分の部屋で、最初にやったのはメイクだった。

そこで江ノ島盾子は鏡越しの自分を見て——絶望した。

——やっぱ、松田くんの趣味って最悪ね。

そこにいたのは、地味で何の面白みもない普通の女子高生だった。

「……まったく、絶望的な価値観の相違なんですけど」

母親に重ね合わせたのか何だか知らないけどさ——と、愛した人のセンスに絶望しながらメイクを重ねた彼女は、次に部屋の整理整頓に取り掛かった。壁中に貼られた『ここは私の部屋』という貼り紙をまとめて引っぺがしていく。

そして最後に『音無涼子の記憶ノート』——

このノートを見る度に松田夜助のことを思い出す。彼のことを思い出し、胸が締め付けられるような想いになる。彼をあんな目に遭わせた自分に激しい嫌悪感を抱き、泣き出したい欲求と、叫び出したい衝動に駆られる。

もう忘れたい！　こんなノートなんて捨ててしまいたい！

「アハッ！　だからこそ逆に手元に置いておきたい一品なのよねっ！」

江ノ島は悲痛と興奮が入り交じった何とも言えない表情でノートをめくっていく。

——ふと、その手が止まった。

そのページいっぱいに、松田夜助らしき人物の似顔絵が描かれていた。

「この微妙に似てない感じが逆に切なくて……そそるわね」

やはり、この心の傷はしばらく癒えなそうだった。けれど、そうでなければ困る。わざわざ記憶を失ってまでして味わった絶望なのだから——

　とは言え、彼女が記憶を失ったのはそれだけの理由ではない。
　そこには別の目的もあったのだ。
　それは今、記憶ノートと一緒に江ノ島の手元にある。松田が彼女に対して行った《記憶の制御》に関して克明に記されたレポートだ。
　それこそが、彼女のもう一つの目的だった。
　江ノ島の本当の目的である『さらに絶望的な計画』の最終段階において、《記憶の制御》は必須だった。だからこそ試しておきたかった。彼女自身の体で試しておきたかった。
　そこで彼女は、松田が自分の記憶を奪うように仕向け、自分自身をその《記憶の制御》の《実験台》にさせたのだ。
「ま、実験としてはこんなモンかしら……何もかも忘れっぽくなるなんて中途半端な副作用はあったけど……あれは松田くんがショボイせいね。ま、アタシが完璧に仕上げれば、問題なく片付くでしょ。うぷぷ、愛する人から引き継いだ素敵な研究だもの……大事に大事に絶望的に使わせて貰うわよ」
　彼女が松田を利用したのは――その実験の為でもあった。
　その為に、彼女は松田の行動を予測し、そして自分の都合通りに動かし続けたのだ。
　それは他の人間に関してもそうだった。彼女はすべてを予測し、すべてを自分の都合のいいように動かしたのだ。
　こうして、彼女にとってのご都合主義的展開は完成した。
　そして、それは江ノ島自身も同じだった。
　彼女も彼女自身に操られ――だからこそ最高の絶望を味わったのだ。
「やっほー！　お帰りちゃーーーーん！」
　その時、そんな奇声と共にいきなり部屋の扉が大きく開けられた。
　その向こうには、金髪の女の子が立っていた。
　江ノ島盾子の扮装をした――戦刃むくろだった。
　彼女は興奮したように頬を上気させながら満面の笑みで言う。
「あはは、びっくりした？　戻って来た記念にちょっと驚かせようかなって――」
「アンタってバカなの？」
　だが、江ノ島はその一言だけで戦刃を凍り付かせる。
「ねぇ、何テンション上げちゃってんの？　そんな格好してるのを誰かに見られたらどうすんの？　ねぇ、どう責任取るの？　て言うか責任取れんの？」
「ご、ごめん……なさい……」

戦刃はすっかり萎縮(いしゅく)したように肩を竦(すく)めていた。
「しかも、あんまし似てねーし！　はっちゃけすぎじゃね？　つーか、アタシってそんなバカっぽい？　ねぇ、バカっぽいの？」
「え、でも私は盾子ちゃんの書いた台詞通りに……」
「ふーん、言われたことしかできないんだ……ねぇ、お姉ちゃんって本気のバカでしょ」
「ご、ごめんなさい……本当に……っ！」
そそくさと着替え始める戦刃の目許は、すっかり涙で潤んでいた。
「つーか、相変わらずヒンソーな体だな！　軍人とかやってる暇あるなら、もっと男に揉(も)まれてデカくしとけっつーんだよ！」
「ご、ごめんなさい……もう怒んないでよ……」
叱られた仔犬のように肩を震わせる姉を見ながら——江ノ島はまた舌を鳴らす。
——あーあ、こいつの使い方は考え直さなきゃ駄目かもな。
江ノ島が、姉である戦刃むくろに自分の変装をさせていたのは、記憶のない自分を騙すという目的以外にも——やはりもう一つ別の目的もあった。
それもまた《実験》だった。戦刃むくろの扮装も、今後の『さらに絶望的な計画』において重要な要素の一つだったのだ。
記憶の制御も実験。
戦刃の変装も実験。
いや、それだけではない。
高校生たちにコロシアイをさせたのも、その映像をそれ以外の人間に見せ付けることで、絶望を広めたのも——それもまた実験だった。
すべて、実践と実験を兼ねた一石二鳥。
それこそが江ノ島盾子にとっての《希望ヶ峰学園史上最大最悪の事件》だったのだ。
ついでに言えば、評議委員の殺害も一石二鳥だ。カムクラの居場所を吐かせる以外に、彼ら自体を別のメンバーと入れ替えるという目的も、そこにはあったのだ。
「うーん、でも今回の実験は全体的にポップさに欠けた感じよね……ちょっとサイコすぎちゃったかな？　もっとサイコポップにいかないとね……やっぱ一気にコロシアイさせるんじゃなくて、もっとゲーム性を盛り込むべきかしら……うん、そうね！　その方がドラマティックな殺人が起きそうよねっ！」
それに、やっぱりマスコットも必要だ。
今回は、《実験として》洗脳した連中に着ぐるみを着させてみたが——あれでは駄目だ。あんなの不

気味なだけだ。この点はまだ大いに改良の余地がありそうだ。
「あの、ところで……なんだけど……」
　唐突な切り出し方で戦刃が声を上げた。
「は？　何？」
　江ノ島は舌打ちしつつ彼女の話を聞いた。
「あのさ……どうしてカムクライズルを予備学科の連中に渡さなかったの……？」
　それを聞いた江ノ島は、さらに強く舌打ちをする。
「やっぱ、お姉ちゃんってバカなんだね……だって、あいつらにカムクラを殺（や）らせちゃったら、それで満足しちゃうじゃん。そんなんじゃ駄目なのよ。あいつらにはもっと不安や不平や不満を溜め込んでもらって……その後で一気に爆発してもらうんだから。そうすれば使い捨ての暴徒くらいの役には立つでしょ？　あいつらはその為の存在なのよ」
「あ、そっか……」
　戦刃は苦笑いを浮かべながらも納得したように頷いていた。
「じゃあ、カムクラはもう用なしってこと……？」
「今は特に考えてないけど……ま、別に放って置いても問題ないでしょ。だって、あいつはもう《超高校級の希望》なんかじゃなくて、絶望に落ちた絶望人間なんだしね！」
　そして、そんな結果も――また彼女の予測通りだった。
　やっぱり、何もかもが江ノ島の思い通りだった。
　結局、今度もすべてが江ノ島の希望通りの結果になってしまった。
　――ま、でも今回は素敵な絶望も味わえたし、これはこれでよしとするか。
　しかし、彼女はどこかで期待していた。
　自分が練りに練った計画が台無しになる絶望を望んでもいたのだ。
　今回はそうではなかったが――いつかそんな絶望を味わえる時が来るかもしれない。その可能性を残す為に色々と種だって蒔いてある。
「アハハハハッ！　本当に私様（わたくしさま）は偉いわねっ！」
　江ノ島は思わず高笑いのような声で叫び始めた。
「自分が負けるフラグを自分で用意するなんて……私様は本当に黒幕の教科書みたいだわ！　お姉様もそうお思いになられるでしょう？」
「う、うん……でも口調が……」
「キャラに飽きたんだよっ！　テメーは何年アタシのねーちゃんやってんだっ！」

さっきまでとは打って変わった乱暴な口調で姉である戦刃を怒鳴り付けると、しかしそれにもすぐに飽きたように――今度は窓の外に目をやった。

「……どうしたの？」

心配そうに聞いてくる戦刃をよそに、彼女はじっと窓の外を見つめている。

そこからパレードが見えた。

うねるような激流となったパレードが、寄宿舎のすぐ下に見えた。

――本科のみんなはどんな気持ちでこれを見てるのかな？

――希望の終わりを感じてくれてるのかな？

そこで江ノ島はすっと立ち上がると、張り切ったような声を上げた。

「さーてと、テンション上がってきたし、そろそろ登校しましょうか！　久しぶりに会うクラスメイトたちが待ってるしね！」

「う、うん……」

そして江ノ島盾子は、希望ヶ峰学園での束の間の学園生活へと戻っていく。

虫唾（むしず）の走る仲良しごっこでも、この後の《とてつもない絶望》のスパイスになると思うと――むしろ楽しみな気持ちさえ涌いてくる。

「よーしっ！　じゃあ学園生活を思いっきりエンジョイしちゃうぞっ！」

だから、それもまた――本音だった。

こうしてキーワードは揃った。

フラグも立った。

コロシアイ、旧校舎、洗脳された予備学科、超高校級の希望、第七十八期生、希望ヶ峰学園評議委員会、学園長、記憶の制御、戦刃むくろの変装、モノクマ。

ここから始まる。

最高に絶望的な計画はここから始まる。

《人類史上最大最悪の絶望的事件》はここから始まる。

どういう展開になるか予測するのは簡単だ。でも、しない方が面白いかもしれない。その方が素敵な絶望を味わえる気がする。でも我慢できるかな？　あぁ、どうしようかなっ！

この先に待っている絶望を想像しただけで――江ノ島盾子の胸は躍った。

なぜなら、《超高校級の絶望》江ノ島盾子は――

何よりも絶望を望んでいるからだ。

　誰よりも絶望を希望しているからだ。
　——希望している？
「……は？　アタシが希望？」
　そこで江ノ島盾子は、希望なんかを抱いている自分に気付き——

　そんな自分に絶望した。




私立希望ヶ峰学園
生徒情報
CONFIDENTIAL
氏名
いくさば
戦刃むくろ
超高校級の軍人
体は強いけど、
大きな弱点を抱えた子だよね。
その弱点を突かれたらどうなっちゃうのかね。
体の鍛錬はもういい！心の鍛錬をすべし！
もしくは夜の鍛錬をすべし！
体の強さなんて何の役にも
立たないんだからさ！
そういうゲームじゃないんだからさ！
でも、何だかんだ言っても、
ボクにとっては大事な駒だよ。
大事過ぎて最後まで取っておきたいよね。
だからこそ……うぷぷ。
モノクマ'S memo

# 設定画




モノクマ'S memo
うわっ…気持ちわるっ…
こんなヤツが何人もいたら
マジでナイトメアだね…
朝の食卓は
どうなってんだって話だよ。
家族旅行は
どうなってんだって話だよ。
親御さんが可哀相だよ。
私立希望ヶ峰学園
生徒情報
CONFIDENTIAL
復讐者
氏名
斑井一式（まだらい いっしき）


設定画
ベースの体型は
ガリガリだが、
肩幅がすごく広い。
そして、腕と
舌が長い。
マユ無し
希望ヶ峰
指定カーディガン
戦闘時は
筋肉を膨張
させて闘う
全身黒
HIGH SCHOOL


私立希望ヶ峰学園
教職員情報
CONFIDENTIAL
むっはー、ボク好みの
…イケメンですね！（流行に乗った形で）
でも、まだまだ青いな！
（シガーチョコをタバコに見立ててくわえながら）
言っておくが、男の渋みに関しちゃ負けないぜ。
（ファンタグレープをワインのようにグラスで転がしつつ）
ま、彼はまだこれからの男だよね。
これからどんどん大きく羽ばたいて
もらわないとね。
でも、羽ばたき過ぎにはご用心！
それと娘さんをボクにくださいっ！
（前屈みで敬礼っ！）
モノクマ'S memo
学園の長
氏名
きりぎりじん
霧切仁


設定画
若オヤジ
服は評議委員と
同様
ネクタイ→
ピンの色は
金色

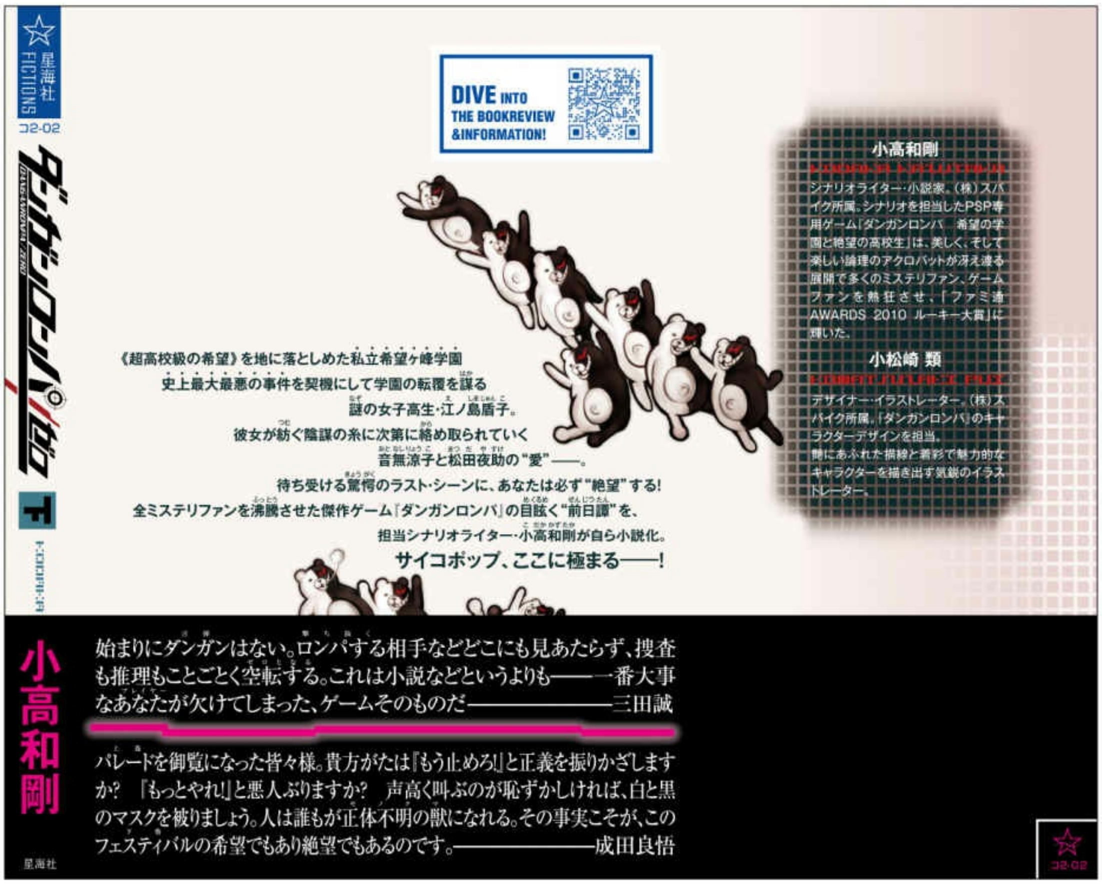

モノクマ'S memo
うーむ、そこはかとなく漂う加齢臭…
こんな加齢臭漂う彼らにも
子供の頃はあったんだなぁ…
そう思うと、時の流れの無情さを
感じずにはいられないよね。
あっ、でも安心して！
加齢臭が好きな若い女性も
いるらしいからさ！
えーっと…後は…
とりあえず合掌！
私立希望ヶ峰学園
教職員情報
CONFIDENTIAL
氏名
評議委員（ひょうぎいいん）
学園の支配者

# 設定画




星海社 FICTIONS
コ2-02
ダンガンロンパ/ゼロ
小高和剛
星海社
DIVE INTO THE BOOKREVIEW &INFORMATION!
《超高校級の希望》を地に落としめた私立希望ヶ峰学園
史上最大最悪の事件を契機にして学園の転覆を謀る
謎の女子高生・江ノ島盾子。
彼女が紡ぐ陰謀の糸に次第に絡め取られていく
音無涼子と松田夜助の“愛”——。
待ち受ける驚愕のラスト・シーンに、あなたは必ず“絶望”する!
全ミステリファンを沸騰させた傑作ゲーム『ダンガンロンパ』の目眩く“前日譚”を、
担当シナリオライター・小高和剛が自ら小説化。
サイコポップ、ここに極まる——!
小高和剛
シナリオライター・小説家。(株)スパイク所属。シナリオを担当したPSP専用ゲーム「ダンガンロンパ　希望の学園と絶望の高校生」は、美しく、そして楽しい論理のアクロバットが冴え渡る展開で多くのミステリファン、ゲームファンを熱狂させ、「ファミ通AWARDS 2010 ルーキー大賞」に輝いた。
小松崎 類
デザイナー・イラストレーター。(株)スパイク所属。「ダンガンロンパ」のキャラクターデザインを担当。
艶にあふれた描線と着彩で魅力的なキャラクターを描き出す気鋭のイラストレーター。


☆星海社FICTIONS
星海社 FICTIONS
ダンガンロンパ/ゼロ
下
DANGANRONPA/ZERO
小高和剛
小松崎類
星海社


星海社 FICTIONS
コ2-02
ダンガンロンパ/ゼロ
DIVE INTO THE BOOKREVIEW &INFORMATION!
小高和剛
シナリオライター・小説家。(株)スパイク所属。シナリオを担当したPSP専用ゲーム「ダンガンロンパ　希望の学園と絶望の高校生」は、美しく、そして楽しい論理のアクロバットが冴え渡る展開で多くのミステリファン、ゲームファンを熱狂させ、「ファミ通AWARDS 2010 ルーキー大賞」に輝いた。
小松崎 類
デザイナー・イラストレーター。(株)スパイク所属。「ダンガンロンパ」のキャラクターデザインを担当。
艶にあふれた描線と着彩で魅力的なキャラクターを描き出す気鋭のイラストレーター。
《超高校級の希望》を地に落としめた私立希望ヶ峰学園
史上最大最悪の事件を契機にして学園の転覆を謀る
謎の女子高生・江ノ島盾子。
彼女が紡ぐ陰謀の糸に次第に絡め取られていく
音無涼子と松田夜助の“愛”——。
待ち受ける驚愕のラスト・シーンに、あなたは必ず“絶望”する!
全ミステリファンを沸騰させた傑作ゲーム『ダンガンロンパ』の目眩く“前日譚”を、
担当シナリオライター・小高和剛が自ら小説化。
サイコポップ、ここに極まる——!
小高和剛
始まりにダンガンはない。ロンパする相手などどこにも見あたらず、捜査も推理もことごとく空転する。これは小説などというよりも——一番大事なあなたが欠けてしまった、ゲームそのものだ————三田誠
パレードを御覧になった皆々様。貴方がたは『もう止めろ!』と正義を振りかざしますか?　『もっとやれ!』と悪人ぶりますか?　声高く叫ぶのが恥ずかしければ、白と黒のマスクを被りましょう。人は誰もが正体不明の獣になれる。その事実こそが、このフェスティバルの希望でもあり絶望でもあるのです。————成田良悟
星海社
コ2-02


☆星海社FICTIONS
ダンガンロンパ/ゼロ 下
DANGANRONPA/ZERO
小高和剛
小松崎類
サイコポップ、ここに極まる——!
「あなたが欠けてしまった、ゲームそのもの」——三田誠
「人は誰もが正体不明の獣」——成田良悟
小高和剛
星海社

この物語はフィクションです。実在の人物・団体・出来事などとは一切関係ありません。

収録されている内容は、作品の執筆年代・執筆された状況を考慮し、初　発　当時のまま掲　しています。


Illustration　小松崎類

ブックデザイン　　eia

編集担当　太田克史
編集副担当　　中 武

フォントディレクター　　野慎一
電子書　ディレクター　松島
オペレーションチーム　　万 愛　三本絵理

校閲　　来堂

フォント制作協力　字　工房　リアルタイプ　　　印

制作協力　新　　　堂

本作品は、2011年10月、小社より　　社FICTIONSとして　行されたものをe-FICTIONSとして電子書　化したものです。
e-FICTIONSでは、　正部分や図　点数などが異なる場合があります。



ご利用の端末によっては、リンク機能が制限され正しく動作しない場合があります。また、リンク先の　e　サイト、メールアドレス、電話番号は、事前のご連絡なく　除あるいは変更されることもございます。ご了　ください。

# ダンガンロンパ／ゼロ（下）

2020年10月1日発行（01）

者　小高和剛
S i e C unso t Co. Lt . All i ts eserve .

発行者　太田克史

発行所　　式会社　　社
　112-0013
東　都文　区音羽1-17-14
音羽　　ビル4F
tt s://　　　.sei ais a. o.

発　元　　式会社　談社
　112-8001
東　都文　区音羽2-12-21
tt s://　　　. o ans a. o.

本電子書　は、　入者個人の閲覧の目的のためにのみ、ファイルの閲覧が許　されています。
私的利用の　囲をこえる行為は　作権法上、禁じられています。